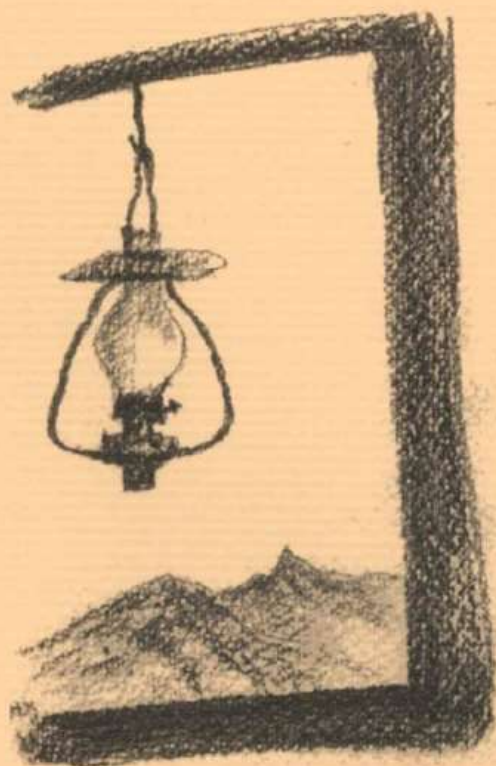


山 嶽 寮

甲南山岳会通信第 65号・2010年10月



甲南山岳部・甲南山岳会

山 嶽 寮 甲南山岳会通信65号

計 報	佐野源一氏(旧10)ご逝去(5月20日)		
追 悼	奥山先輩とのかかわり	伊 藤 文 三	……3
山 行	5月連休登山(小窓尾根～剣岳～早月尾根)	川 野 幸 彦	……5
紀 行	ユリアン・アルプス短訪記	越 田 和 男	……9
	懲りもせず、再びヒマラヤへ	柏 敏 明	……12
	新線、在来線、廃線 乗車の旅	伊 丹 徳 行	……26
論 考	山を語る二篇	雨 宮 宏 光	……29
	・雪崩学の危険		
	・山をめぐる七章		
随 想	相模野海軍航空隊 山岳部記	小 川 守 正	……50
	この年でスキーなんぞやりだして	安 井 正	……52
	カンリガルポ学術登山隊に参加して	山 本 恵 昭	……55
	山岳部に思うこと	松 下 弘 幸	……65
会 員 短 信			
	その1-秋の集会・出欠はがきから		……68
	その2-総会・慰霊祭・出欠はがきから		……76
ホームページ掲示板より			
	カンリガルポ遠征・出発から帰国まで		……83
	山行・散策		……91
	思いで多い小窓尾根		……107
	想いでの一枚		……111
	荒地山は今?		……114
	書籍などの文化関連		……117
報 告			
	甲南高校 山岳部 5月山		……127
	秋の集会 木曽福島		……129
	定時総会		……130
	慰霊祭		……132

表紙題字:故香月慶太氏
表紙カット:故柏 秀樹氏

＝訃報＝

佐野源一氏（旧 10）が 2010 年 5 月 20 日にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。各氏より追悼の言葉がホームページに寄せられました。

訃報・佐野源一氏 投稿者：越田和男

投稿日：2010 年 8 月 23 日(月)

近着の日本山岳会の会報「山」（783 号）で、去る 5 月に亡くなられたとの記事があり。甲南山岳会の最長老のお一人で、享年 94 歳。

昭和ひと桁時代に甲南から早稲田の山岳部に進まれた。満州で陸軍中尉で終戦を迎えられ、以後 11 年間の長きにわたったシベリア抑留のあと、昭和 31 年に復員された。甲南でも早稲田でも、既に山岳部の OB 名簿では死亡者欄に載っていたところ、生きて還って来ましたとの連絡があり、翌 32 年の山岳会の総会に顔を出された時、大学一年生だった小生らは強く衝撃を受けたことを思い出します。

後に佐野ゲンさんが書かれた「シベリア抑留の思い出」のことを、ごく最近広瀬ポンと話す機会があり、再読し、改めて感銘を受けたばかりでした（山嶽寮・42 号（1986 年））。遙か彼方、今のウズベキスタン、パミール山麓にまで連れ行かれた壮絶な体験談です。ご冥福を祈って再読をおすすめします。合掌。

佐野大先輩の訃報 投稿者：廣瀬健三

投稿日：2010 年 8 月 23 日(月)

ごく最近佐野ゲンさんの「シベリア抑留の思い出」を越田コシに COPY して貰って

読み直しており、どうされてるかなと気掛かりでした。小生の従兄が御影の小学校、早稲田高等学院、早稲田大学山岳部の同期生でした。又””よくぞ生還された””と当該抑留体験のある上司も驚いていました。謹んで御冥福をお祈りいたします。合掌

（無題）投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2010 年 8 月 23 日(月)

佐野 源一先輩のご冥福を祈ります。強制連行されて十年。佐野先輩に戦争が終わったのは敗戦記念日の十年あとでした。佐野先輩から 07 年 10 月に次のような書簡が山嶽寮・編集者・大森雅宏くんに郵送されています。山嶽寮（2007）の三十五ページに小川さんたちが北尾根から下ってきて、徳沢にいた小屋主、中畠 政太郎に甘える遠慮からとあるが、中畠 政太郎は小屋主ではない。当時の小屋主は三代目上條 喜藤次であるという内容です。佐野先輩のご指摘は正しく稿訂正の手紙を出しました。小川先輩にこのことを話したら「サノゲンはまだ頭がしっかりしとる」といわれ、小川さんから中畠はカモシカ猟で小屋に滞在していたと聞きました。

昭和二年穂高岳山荘が旦那衆の失火で焼失した時、案内人・中畠 政太郎は「ワシの責任」といいはり、彼の俠気を感じた信濃の山人、上條は飛騨の中畠が小屋に滞在することを大目に見ていたのです。すみません。

佐野さんのこと 投稿者：大森雅宏

投稿日：2010年 8月 23日(月)

山嶽寮 57号にヨーロッパスキー単独行の原稿をお寄せくださったのをきっかけに、折りにはがきやお便りをいただいたり、62号の早稲田のお話のときは私もお礼に甲東園まで伺ったり、暖かく接していただいたことを随分ありがたかみしています。お便りやはがきの本文はたいていワープロでしたが署名と宛名は手書きで、それが角の丸い大きな丁寧で読みやすい筆跡で、乱雑な文字しか書けない私はこんな字が書けたらいいなあと思っていました。

この1月、前田館から浪川さん達と山スキーに出かけたときに早稲田の小屋の写真を撮って、佐野さんにご披露しようと思っていたのですが何やかやで果たせず、先日残暑見舞いをお送りしたときにその写真を添えました。このたびはいつものようにすぐにお返事がありませんでしたので、ご高齢だし具合がよくないのかなと案じておりました。今にして思えばあの時ちやっちやと書いておけばよかったと思います。

皆さんがお書きのシベリアのこと、生還なさった方のうちどのくらいの方が佐野さんのように抑留生活をまっすぐ振り返ることが出来るのだろう、と思ったことがあります。極限の中で自分が生きるために心ならずも他の人に不利益をかぶせることがあったとしても誰もとがめることは出来ないの

ですが、そういう経験をしていた方はやはり当時のことを振り返りたくないのではないか、と思ったのです。

私が学生するとき、総会でお目にかかったお姿、ロックガーデンに80過ぎておいでの時、「足が弱くなってしまった」といいながらそれでもお元気に歩いておられたお姿、香月さんの会ですっきりしたスピーチをされたお姿、それぞれの佐野さんを思い出しながらご冥福をお祈りいたします。

サノゲンさんのこと 投稿者：平井吉夫

投稿日：2010年 8月 24日(火)

甲南山岳会のいつぞやの会合で、サノゲンさんがわざわざ私の前まで来てくださり、なんともいえない親しげな笑顔でじっと見つめてくださったことがあります。甲南高校出身で早稲田に行った者は少ないので、私が早稲田OBと（たぶん田口さんあたりから）聞いて、上席から私のところに来てくださったのでしょうか。そのとき、私が早稲田では山岳部に入らなかった事情（当時の私には山登りよりもっと大切なことがあった、と自分では思っていた）をお話すると、サノゲンさんはにっこり笑って、それでいいんだという意味のことを言ってくださいました。あのときのサノゲンさんの、いかにも親しげな、優しげな、そして（私の独りよがりかもしれませんが）嬉しげな笑顔が忘れられません。 平井吉夫

伊 藤 文 三（昭和15年・旧文）

小川守正君の『追悼－奥山正雄さん』に次のような箇所がある。――戦争中の奥山さんは大変な苦難の道を歩まれたようだ。昭和6年の満州事変に端を発し日本は急速に軍国主義の道を歩みだしたのであるが、その中であって東大経済学部は反戦運動の、京大経済学部はマルクス主義の最後の拠点となった。奥山さんは、東大グループの中心人物の一人として司直の弾圧に抗する苦しい闘いを続けられたと聞く。――そのへんのところで、かわった小生、黙っている訳にはゆかず筆をとりました。

猶奥山正雄さんは3年先輩になるのですが、小生が甲南に入学以来、オジン、オジンと言っていたので、奥山正雄さんなんて言うとは別人のような気になるので以下オジンと書きます。

戦前 東大経済学部に入學、掲示板を見ていると、オジンがやって来て、これにサインしろと用紙を差し出した。オジンは東大経済学部の学生として左翼の拠点といわれていた学生生活協同組合を専らやっていたのです。そのオジンが差し出した用紙とは「経友会委員立候補届」。経友会とは経済学部学生自治会。どういう仕組みか解りませんが、かくて私は一年生2名の経友会委員となりました。

しばらくすると上級生の委員は治安維

持法違反で検挙されましたが、私は新入生と言うことで検挙されませんでした。ところが、何日もたたない内に、検挙された委員は釈放されました。どうも、いやがらせ、或いは、おとなしくしろ、という警告だったようです。

私は、委員として集会部の仕事をしていました。その道の専門家を呼んで座談会や講演会を開く仕事です。国際問題に詳しいということで、尾崎秀実を呼んで座談会を開きました。参加者は五十名ばかりでしたか。講師には日をあらためて謝礼を持参していろいろお礼をいうことになっていたもので、尾崎秀実さんの場合もご自宅に電話し、先日の座談会の謝礼をお持ちしたいと言うと、本人は居りませんのでわざわざ来て下さらなくて結構です、とのことで礼金は郵送したのであります。本人は居ない筈。その時既に検挙されていた訳です。

朝日新聞の昭和史再訪（平成22年4月3日）『ゾルゲ事件あの日』より

「1941年（昭和16年）10月15日、中国問題評論家として活躍していた尾崎秀実（1901年生まれ）が東京の自宅で警視庁に検挙された。3日後にドイツ人の独紙東京特派員ゾルゲ（1895年生まれ）も検挙取り調べを経て、翌年5月事件公表（中心メンバー5人）。44年11月、治安維持法違反などで2人

は死刑に。尾崎は旧制一高から東京帝大を経て朝日新聞記者に。28年から32年まで上海特派員。38年から内閣嘱託となり対中政策を首相らにアドバイス。政権要人から得た情報から軍部の動きを分析してゾルゲに伝えた。ゾルゲがモスクワのソビエト軍本部に通報した情報は、欧州戦線でドイツと戦っていたソ連軍を側面から支援した形となった」

尾崎が自分の思いを家族に綴った書簡集「愛情はふる星のごとく」は戦後出版されベストセラーとなったので読まれた方もいらっしゃるでしょう。尾崎秀実が公の席上姿を見せ、いろいろしゃべった最後につきあった訳で、大げさにいえば誰も知らない歴史的秘話。これに立ち会ったのもオジンのおかげ？

戦後 進駐軍による占領下、民主化が叫ばれ、労働組合が盛んであった頃、私は大阪で怪しげな大きな声では言えないような仕事で走り回っていたのですが、何時だったか何処だったか何故だったか思い出せませんが、オジンが俺の仕事を手伝えといったのです。当時、社会党系が「総同盟」、共産党系が「産別」といわれていましたが、その産別で中核的な全日本鉄鋼産業労働組合の関西支部事務局長というのがオジンの肩書き。かくして私は労働組合専従者となったのです。

オジンは何時も若い女性といっしょでした。秘書役とのことでしたが。毎日毎日オジンの秘書嬢といろんなことをやり、もう一人で大丈夫と思ったのかオジン秘

書嬢は2～3週間で現れなくなっていました。会議開催、金銭出納帳、参加組合のスト応援、労使交渉立会いなど、いそがしく走り回っていたある日、何日だったか何故だったか思い出せないのですが、オジンのお宅に伺ったことがありました。甲南時代オジンの住んでいた魚崎のお宅でないことは確かで、何でも暗い狭い坂道を登って行った記憶ははっきりしています。どうも仮住まいという感じで、奥山夫人として出迎えてくれたのは例の秘書嬢でした。ああやっぱり思ったのです。

私は組合から給料をもらい組合の仕事をしていましたが、正月休みで自宅にいる時、喀血し、休み明けに組合事務所に行き一番よく顔出ししていた参加組合長にすべて事務的なことを申し送り、甲南病院に入院、以後約6ヶ年に及ぶ療養生活を送ったのでした。

ずっと後になって、何年だったか、春の山岳会総会でオジンに会った時、奥さんお元気ですかと伺ったところ、ちょっと体をこわして寝ているといわれたような気がします。正式奥山夫人とゆっくり話す機会がなかったことが心残りであります。

国府雄次郎さんは、奥山正雄君は80年近くの「珍友」と書かれておられますが、私にとってはオジン奥山正雄先輩は「珍先輩」と済まされない何かを感じるのであります。

＝山行＝ 5月連休登山（小窓尾根～剣岳～早月尾根） 2010/4/30～5/3

大森雅宏（S 5 3 文）・山本恵昭（S 5 6 理）・川野幸彦（S 5 6 理）

川野幸彦（昭和 56 年理）

〔はじめに〕

3月初め、要さん（S 5 5 営）が大阪から松本に転勤となるので山岳部の仲間で送別会を行った。この時、“5月連休はどこに登るか？”が話題になり、山本から『小窓尾根に行こう。』と誘いがあった。私は、5月連休は白馬から朝日。または、遠見尾根を独りで登ろうと考えていたが、結局、小窓尾根に行くことにした。小窓尾根には以前から雪のある時期に一度は登りたいと思っていたが、剣岳周辺でも難しい部類に入る尾根である。今の技術と体力で不安であったが、大森さんも行くことになり即決した。まず、久しぶりのテント山行なので体力を付けなければならない。週に3回は淀屋橋の会社から京橋の自宅まで50分かけて歩き、また土日には10kmのランニングを行った。しかし、これが意外とハードで、出発の1週間前に風邪をひき寝込んでしまった。これまで蓄えた体力が一気にぶっ飛んだ気がした。また、形だけの在阪本部の八木（S 5 7 経）からは「小窓尾根？登れますか？」の一言。こんな不安の残る中、出発の日をむかえた。

4 / 3 0 （土）神戸⇒馬場島

22:30にJR西宮駅で大森さんと山本に合流。山本のクルマで馬場島に向かう。高速道路は予想通り吹田と瀬田で渋滞。連休初日と料金1000円の影響が出ている。馬場島へは夜が明けた5:00に到着。駐車場には20数台。思った以上に入山者が多い。また雪も例年以上に多い。30～40cm残っている。仮眠。

5 / 1 （日）晴れ 馬場島⇒小窓尾根
1912mピーク

県警に登山届の確認。何故か私が送ったものが着いていなかった。室堂へ間違って送られたらしい。県警によると小窓尾根には6パーティが入っているとのこと。ラッセルをしなくてもよいと思うとホッとした。出発の準備をしていると大森さんの知り合いの一本松さんに会った。剣尾根R4に登るという。凄い！（この一本松さんは雰囲気松本さんに似ている。）馬場島からは林道を進む。途中、山本のおじさんの慰霊碑に黙祷。1時間半ほどで、最初の関門である取水口に到着。ここまでも雪が多かったが、取水口付近も雪渓が残っていて簡単に越えられた。資料では雪が少ないとパンツ一丁で渡渉

したとか書いてあったが今回は全く問題なし。タカノスワリも雪渓が大量に残っていて難なく通過。雷岩は半分位埋まっている。ここで水の補給とアイゼンを付け、いよいよ小窓尾根の登りとなる。目の前の急なルンゼを登る。約2時間で稜線（末端台地）に出るのだが、このルンゼ、急で落ちたら雷岩まで止まらない。結構恐ろしい。キックステップに力が入る。今回は雪も多くルンゼを最後までつめたが、冬期は左のリッジがルートとなろう。ルンゼルートは雪崩の危険大。また左のリッジには所々に赤布が見えた。稜線からは幾つかのコブを越え、本日は1912mピークまで。ここには先行パーティの4張のテントがある。目の前には、悪そうなドームが見える。登れるかまた不安になった。ここまで久しぶりの重荷（自分なりに軽量化したつもりだが20kgを超えた。）も加わりバテバテ。テント設営後、水作りと食事の準備。

16:00には食事もあり、明るいうちから眠りに入る。食事の用意は大森さんと山本が行い、私は横でボーっと見ているだけであった。余りの手際の良さに感心した。今日は快晴で快適であった。周りの山もよく見えた。こんな中、県警のヘリがひっきりなしに飛んでいた。後で知ったが、早月尾根で転落事故が起きたそうだ。この人は八ツ峰から早月を下る途中に遭難した。

・馬場島 7:20⇒1912mピーク 1

4:20

5/2（月）快晴 1912mピーク⇒三ノ窓

昨夜は風が強くテントがバタバタとうるさかった。登攀具を付ける。TSから目の前のコブの登りとなる。右側から巻くがブッシュがひどく登り難い。間もなく2121mピーク。目の前にニードルが見える。ここからが核心部の始まりである。ピークから急な雪稜を下り、小さいコルから右のブッシュの急斜面を登る。急な上にザックがブッシュに引っ掛かり登り難い。この後、雪稜から岩稜を辿り、ニードルを右から巻くように進む。この辺り高度感も加わり緊張する。行き着いた所から小さなコルへ斜めに7m程の懸垂。降り立ったコルからは雪稜の左の雪壁を慎重に登る。

急登でノーザイルなので恐ろしい。この後はドームの頭までは易しい雪稜である。ドームからはザイルを出し雪稜を40m下降。アイゼンが団子になり緊張する。痩せ尾根を辿り、右から岩場を登る。ザイルを出す。数ヶ所難しい所があるが、冷たいが素手で登ると問題なし。古いフィックスがある。この後は這松混じりの急な斜面を右上するとピラミッドピーク？コルからザイルを出し左側から雪壁を登る。出た所が馬の背リッジである。このリッジは思っていたよりも“太い”。このピッチは山本がトップで上手く切り抜けた。雪壁を登るとマッチ箱のピーク。

ここで小窓尾根の核心部は終了。ここまで緊張の連続であった。コブを数個越えると北方稜線からのトレースと合流し、小窓の王への登りとなる。



馬の背リッジを行く大森さん・ビレーは山本

雪壁、雪稜をこなすと懸垂下降点となる。ここで時間待ち20分。休んでいると、単独で今朝、馬場島から小窓尾根を1日で登ってきたという兄ちゃんに出会った。この兄ちゃんは明日、R4を独りで登るという。凄い。ピンから50m一杯の懸垂でトラバース点。ここから三ノ窓までは10分位であるが急である。滑落に注意が必要。三ノ窓には数えたら15張のテントがあった。山本が風除けのブロックを積んだ。今日は緊張し非常に疲れた。山本に助けられた。夕食のビーフンが美味しかった。今夜も爆睡。全身の筋肉が痛んだ。

・1912mTS6:20⇒三ノ窓16:00

⇒馬場島15:30

5/3(火)快晴 三ノ窓⇒剣岳⇒早月尾根⇒馬場島

池ノ谷ガリーを登る。途中でキジに行きたくなり参った。急なガリーを登ると池ノ谷のコル。今年は雪が多くリッジ状になっている。ここから長次郎の頭までは雪稜。所々、狭くなっているのと風が強くて緊張する。間違っても池ノ谷側には落ちないようにしよう。助からない。長次郎のコルからは雪壁。稜線直下の数mが悪い。先行パーティはザイルを出していたが我々はフリーで登った。これを抜けると頂上までは10分ほどである。頂上も雪が多くて祠は雪の下でどこにあるのか分からない。快晴の下、360度の大展望。黙祷と記念撮影後、下山にかかる。早月尾根の最上部のルンゼは25mの懸垂。さらに急な雪稜を下り、2700m付近で50mの懸垂。早月小屋を目指す。小屋で昼食後、馬場島へ下る。1500m付近で尾根を外れ右の斜面を下り、白萩川の林道へ出て終了。途中、清流でワサビをゲット。早月尾根も上部が悪く緊張した。大学2年の冬に登った時とかなりイメージが違った。上市で風呂に入り、近くの川原で宴会+仮眠後帰宅した。大阪へ着いたのは、翌朝4:00であった。疲れた!!!

・三ノ窓6:20⇒早月小屋12:00



剣岳頂上・大森／山本／川野

〔後記〕

まずは、大森さんと山本に感謝したい。お二人の力がなければ登れなかったと思う。小窓尾根は結構難しい。ザイルを出すかどうか迷うピッチが多い。落ちたら終わりである。以前、松下さんが冬にこの尾根を登ったと聞いた。40kg以上の重荷を担いでの猛烈なラッセル。雪壁。雪稜。信じられない。我々は、取り付きからラッセルもなく“階段”で、かつ連日の晴天。更に豊富な残雪で、二日で抜けられたが、そうでなければ敗退していたと思う。ラッキーであった。下山から三日経った今でも筋肉痛が取れない。ハードクライムだった。しかし、久しぶりの山岳部のメンバーとの登山。本当に楽しかった。来年は、どこに登ろうかな？

越田和男（昭和 36 年理）

かねがね一度訪ねてみたいと思っていたヨーロッパ・アルプスの南東端、スロヴェニア北部のユリアン・アルプスを垣間見る機会があった。今月初め（2010 年 7 月）のことで、北麓のクランスカ・ゴラという山村に 3 連泊というのにつられてツアー参加したまでだが、それなりの印象を持ち帰ったので書いてみます。

今回は 20 名からなる団体旅行で、このような大パーティでの海外山行の経験がないものだから、気の使い方が分からず少々気しんどい面もあったが、アルパイン・ツアー社役員の芹沢健一氏自らツアコンをつとめ、同行者に今や TV スターなみの岩崎元郎氏、現地ガイドのツヴェート・ポロドガル氏（日本在住のプロ山岳ガイドのスロヴェニア人、奥さんは日本人で日本語堪能）という豪華スタッフの引率よろしく旅を楽しんだ。

最高峰はトリグラウ (Triglav, 2864m)、「三つ頭」とでも訳すべきでしょうか。岩峰で、当地の聖なる山であり、スロヴェニアの国旗のデザインにも取り入れられている一方、クライミングのメッカでもある。

山登りの盛んな国らしく、人口たったの 200 万人のうち 10 万人が山岳会員という。往年の名（或いは疑惑のという方もあるが）ソロ・クライマー、トモ・チェセン揺籃の地でもある。

3 泊 4 日のなか 2 日の内の初日はトリグラウの北壁の直下に通じるヴラタ (Vrata) 谷のどんづまりまで行った。大型バスの入らない未舗装の林道の終点からさらに歩を進めると、高度差 1500m を越える迫力の北壁を見上げる河原に出る。



ユリアン・アルプスの山々

ここで岩崎氏とツヴェート氏が数日後に日本人客 2 名を案内して登攀するという北壁のルートの説明を受け、双眼鏡（持参のオペラグラス）で覗いていると、頂上直下の稜線で幾人かの

パーティが行動中だった。一般ルートからの登頂と稜線の縦走自体はそれほど難しいものではないとのことだが、今やそれも叶わぬ我が体力を嘆いても詮のないことだった。

この河原に、ハーケンとカラビナを組み合わせた巨大なモニュメントがある。第二次大戦中にドイツ・イタリア軍と戦い、この地で亡くなったユーゴスラビア・パルチザン山岳兵の慰霊碑である。この地で実際どのような戦闘があったのかは知る由もなかったが、数日前、クロアチアとボスニア・ヘルツェゴビナ国境近くでネレトバ河を渡った時に思い出した映画「ネレトバの戦い」(1969年、旧ユーゴスラビア)のいくつかのシーンが再想された。山麓によくある遭難者慰霊碑に出くわした時とは違った想いで黙祷した。



トリグラウ北壁基部にある
パルチザン慰霊碑

翌日は、クランスカ・ゴラから南に入る大きな谷 (Vpishnica : 発音不明) を遡り、標高 1611m のヴァルシチ (Vrsic) 峠に向かった。大型バスでも何とかギリギリ通れるヘヤピンカーブの続く標高差 800m の山岳道で、峠は分水嶺になっている。南に下れば景勝地ソチャ溪谷を経てアドリア海にそそぎ、北側の谷はサヴァ河、さらにドナウ河を経て黒海につながっている。かつては軍用道路で、第一次大戦中、一万人のロシア兵捕虜が投入され、300 人の犠牲者を出しての突貫工事だったという。登り口にロシア兵の慰霊の為に建てられたロシア教会がある。小振りな木造建築で、手入れ良く、ひっそりと佇む。規模も背景も勿論異なるが、立場の逆転する第二次大戦後の日本兵のシベリア抑留を思わずには居られなかった。

峠からは登り 2 時間ほどのハイキングで、スレメノヴァ・スピツァ (1911 m Slemenova spica) というピークを踏んだ。途中の鞍部では錆びた鉄条網が残されていたが、何と第一次大戦時のものだとのことだった。こんな平和な眺めのなかで熾烈な銃撃戦があったのだろうか。ドロミテ山中に残されたトレンチ跡を思い出した。

頂上直下の草原での憩いは、まさに至福のひと時であったが、狭い頂上は羊の糞だらけで、足の踏み場もなく、

匂いも強烈。ツヴェートの話では、羊は見晴らしの良いところで用を足す習性があるのだとか。我々はこれを糞山と名付けた。帰路に立ち寄って昼食をとった峠の山小屋 (Ticariev dom) は、造りも立派、サービスも日本の山小屋からは想像もできない。ヴォリュームたっぷりの伝統的なビーフ・シチュウも、巨大なデザートも美味。ビール小瓶は2ユーロ。少し離れた景観抜群のところに立つ立派なヒュッテ (Postarski dom) は、郵政省の職員用の施設だとか。まだ仕分けの対象にはなっていないようだった。

クランスカ・ゴラ滞在の最後の夜は、昔から当地の山家連中の集まる居酒屋だったところに案内された。半地下の一室を借りきって、可愛い美少女を含む男女7名からなるフォークロアのグループを呼んでの飲んで歌って踊っての大騒ぎとなった。土地の人の標準ヴォリュームで供された料理は、決

して不味くはないのだが、残念ながら三分の一くらいしか食べれなかった。トモ・チェセンの近況を聞き逃したのも残念だった。



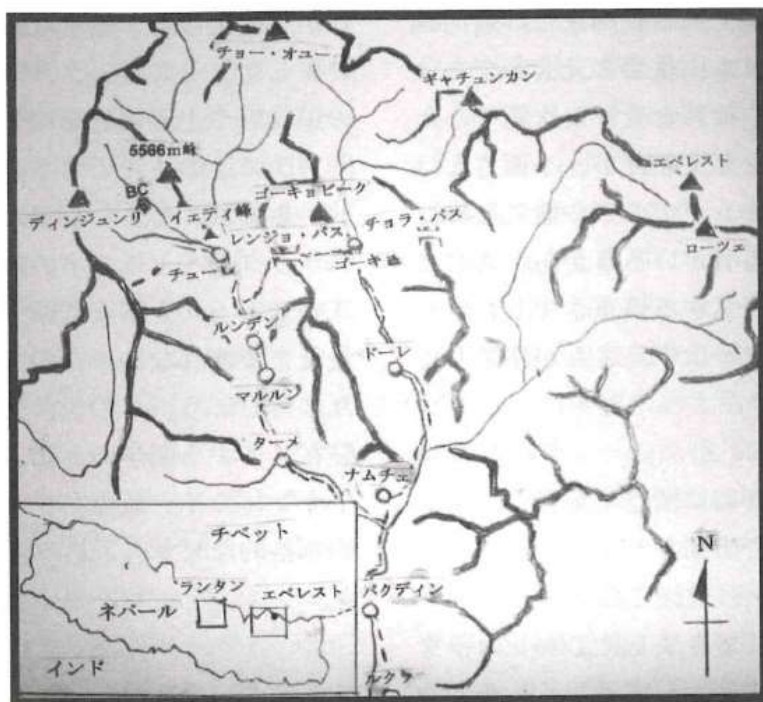
クランスカ・ゴラ村風景

初訪問の、本当に短いスロヴェニア滞在はこれで終わり、翌日一行と別れた私たち夫婦は、次の一週間をオーストリアで気ままに過ごしてから帰国した。旅を終えて一週間も経たないが、また直ぐにでも行きたくなった。

(2010年7月記)



柏 敏明（昭和 41 年経）



チューレ・ゴークョ周辺概念図

去年の暮れに関学の小西さんから、秋に予定していたトレッキングは参加者が足りず中止になったが、来年のプレモンスーンに再度計画をするから行かへんかとの誘いを受けました。関学山岳部が平成 20 年 2 月から 3 月にかけて初登頂したディンジュンリ (6,196m) の BC まで行き、未踏の無名峰 5,566m にアタック、その後レンジョ・パスを越えてゴークョピークに登る計画、あわせて、その時の隊長の中島さんが今回のツアーリストであるウェック・トレックに就職

し、このトレッキングが初めてのツアーリーダーということで、そのお祝いも兼ねていました。

参加者は関学からは田中外治さん、小西啓右さん、甲南からは浪川純吉さんと小生、それにツアーリーダーの中島健郎さんの計 5 名でした。浪川さんは関学の方々と既に面識はありましたが、小生は田中さんとは梅池の雪見会で、中島さんとはこの 3 月の小西さんのヨットでの顔見せが初めてでした。

田中さん 76 才、小西さんと小生がそれぞれ 67 才、浪川さんが 65 才、中島さんが 26 才。中島さんを除けば平均 69 才の高年齢隊でした。ウェック・トレックはその点もあったのか、登山者検診ネットワークの専門医の受診を参加の条件とされ、我々はわざわざ指定病院である長岡京市の新河端病院に出向き、日本山岳会の元会長であった斉藤ドクターの検診を受けた次第でした。幸い全員が問題なしでしたが、小西さんはランタントレッキングでの事や他に心臓に問題を抱えている者がいる事から、AED や携帯心電図を用意する慎重さでした。パルスオキシメーターは中島さんが用意してくれました。

4 月 21 日、夜 10 時に関空に集合、0 時 30 分発のタイ航空で出発。バンコックで 6 時間のトランスファーを経て 22 日の 12 時 40 分にカトマンズに着きました。バンコックでの液体検査は相変わらず厳しく、小西さんの大切なウイスキーは勿体なくも廃棄されてしまいました。空港に出迎えてくれた現地ツーリストのシーガル・トラベルズの車で、ラディソン・ホテルへ向かう。カトマンズは前回来たときの喧噪さが少しやわらぎ、ゴミなども減った感じがしましたが、砂ぼこりの凄さは相変わらずでした。ラディソン・ホテルは前回泊まったチベット・ホテルの斜め向かいにあり、高級ホテルにランクされていました。本通りからホテルに向かう道は、チベット・ホテルと共通なので、前回、滞在期間が長かった小西さんは顔なじみの店が多く、マイフレンド、

お友達と親しげに声を掛けられていました。チェックイン後、中島さんは打合せのためシーガルの事務所へ、我々はコスモ・トレックに行き、大津さんから最近の登山情報と共に、コスモの敷地内にモンベルが来店したことや停電が多く夜の外出には懐中電灯が不可欠など、色々な情報を聞かせて貰いました。その後、タメルへ繰り出し、山の道具店や土産物店を冷やかししました。前回パチモンのレキのストックを購入、使う前から壊れてしまった浪川さんは、今度はブラックダイヤモンドの楕円形をした最新式のストックを割安で購入し鼻高々でした。最後まで壊れなかったのできっと本物だったのでしょう。その後、長年カトマンズに駐在している関学の高田さんと合流し、カトマンズのイタ飯屋、ファイヤー&アイスの本格的なピザ、パスタで前祝いをしました。

4 月 23 日(金) 晴 ホテル 5:10—5:30 空港 6:57—7:30 ルクラ 9:10—11:20 タド・コシ 12:10—14:00 パクディン(2,610)

ルクラ行きの朝一番の飛行機に乗るため、4 時起床、5 時過ぎにホテルを出発しました。満員のタラ・エアー機で 6 時 15 分離陸、シシャパンマやチョー・オユーを遠望しながら、7 時 30 分にまるで空母の様に小さいルクラ空港に無事着陸。シェルパ達の出迎えを受けて、取りあえずホリディロッジに入る。紅茶やビスケットをつまみながら荷物の整理をし、出発の用意をする。9 時 10 分出発、天気はよく、ドウド・コシに沿って緩やかな下り坂をワンピッチほど歩くと、

神の山と言われるクンピラ (5,761m) が眺められた。砂ぼこりに閉口しながらジャガイモ畑をのんびり歩いているとタド・コシに着く。ラーメン・ホットサンド・サラダの昼食。石楠花のきれいな山道を登り降りしながら歩いていくと小さな村パクディンが現れる。村の奥にあるサンライズロッジが今日の宿泊地である。向かいのロッジには韓国の女性を含めたトレッカーが7~8人泊まっているのが見えた。最近日本人よりも韓国人が多いそうである。夕食時にリーダーのミンマ・ソナム・シェルパ (36) (以下ミンマ・サーダー) ペンバ・シェルパ (25) ミンマ・シェルパ (24) (以下ミンマ) とコックのアン・ラクパ (33)、4人のキッチンボーイ、ポーターの代わりをする4頭のゾッキョのドライバーの紹介があった。今回のシェルパはミンマ・サーダーだけが8,000m (チョー・オユー) のサミッターであった。コックのアン・ラクパは三浦雄一郎氏のエベレスト隊のコックを勤めたそうであった。



ナムチェの村(中島氏)

4月24日(土) 晴時々小雨 パクディン

(2,610)8:00—11:30 ジョサレ 12:30—17:15 ナムチェ(3,440)

お粥、梅干、パンケーキ、ヤクバターの朝食後は、高年齢隊だけあってお菓子の飲み比べである。高血圧、心臓、血液、サプリメント等一人5種類から8種類位飲んでいる。涸沢に行く様な道を辿る。3ピッチ目位から右足先が充血したのか痛みを感じるようになる。チェックポイントを過ぎるとジョサレの村に着き昼食を取る。幾つかの吊り橋を渡ってドウド・コシとボーテ・コシが合流する川原にでる。吊り橋はワイヤー製で切れる心配はないが、昔のかずらなどの蔦類で出来た吊り橋の時代は怖かっただろう。高度感のある吊り橋を渡るといよいよナムチェへの高差600mの急坂が始まる。小雨のお陰で砂ぼこりが収まり助かる。ナムチェのバザールを終えて下るヤクやゾッキョとすれ違う。期待していたタムセルク等は小雨で見ることが出来なかった。次第にトレーニング不足を思い知らされ、恥ずかしながら途中からシェルパに荷物を持って貰う。それでもバテバテでナムチェに着く。宿泊地はサクラロッジ。オーナーのラクパ・テンジンは小柄で人の良さそうな人で、三浦雄一郎氏の隊のサーダーを勤めたそうである。余談であるがミンマ・サーダーの実家はナムチェにあるが、本人達はカトマンズに住んでその実家を年7,000ドルで人に貸しているそうである。カトマンズでは子供を私学に通わせ、学資に2,000ドル掛けているとの話から、シェルパの中でも大変なブルジョアである。一休みしてからナムチェ探訪に出かける。いわゆる山

の道具のブランド物は、本物・偽物は別に
してほとんど揃っているといっていいただろ
う。ないのはモンベル位か。ミンマ・サー
ダーお奨めのネパール製のアメリカブラン
ド Sherpa の店でキルティングや土産のT
シャツ・帽子等を買込む。朝のヤクバタ
ーが悪かったのか下痢状態になり、折角の
夕食も食欲がわかずほとんど残す。中島さ
んも調子が悪そうであった。

4月25日(日) 晴 ナムチェ(3,440) 7:30
—10:15 エベレストビューホテル 11:00—
11:30 クムジュン(3,780) 13:50—15:30 ナ
ムチェ(3,440)

高所順化の為のハイキング。高山病の症
状はまだ誰も出ていないが、中島さんと小
生は下痢状態が続く、体調不調のまま出発。
結構厳しい急坂で皆から遅れ、あえぎなが
ら登る。途中、白人の老婦人が乗った馬に
追い越される。150ドルとのこと。乗りたい
と思ったがこの急坂を馬で登る怖さを考
えたと遠慮した方が良さそうであった。エ
ベレストビューホテルの階段を上りきり、
ロビーを抜けるとエベレスト、ローツェ、
アマダブラムの素晴らしい光景が目飛び
込んできた。



左よりエベレスト(8848m)・ローツェ(8516m)
アマダブラム(6856m)

先に着いていた皆は写真を撮りまくってい
る。中には接写用のレンズのまま撮影して
ピンぼけ写真になった気の毒な人もいた。
テラスの椅子に座って一息入れて、いつか
は見てみたいと思っていた山々をゆっくり
と見なおす。アマダブラムの上部の傾斜に
圧倒される。あそこを登るのだから凄い。
何かを注文しないとテラスから追い出され
るので、ビールを飲みたいのを我慢してミ
ルクティーを注文する。タウツェ・チョラ
ツェ・ヌプツェ・エベレスト・ローツェ・ア
マダブラムの山々を眺めながら、石楠花が
満開の道を下ってクムジュンに着く。巻寿
司とそばというコックの心尽くしの昼食も、
中島さんと小生はほとんど手が出ずじまい
であった。食後、ゴンパである有名なイエ
ティの頭皮を一人10ルピーのお賽銭で見
学する。お賽銭を渡す度に坊さんが重々し
く扉を開けるのが愛嬌であった。仏に向か
ってミンマ・サーダーが五体投地していた
のが印象的であった。近くにあるヒラリー
が建てた学校を見学、生徒達は皆制服だっ
た。英語で挨拶してくれる。ナムチェに戻
って時間があつたので、再度 Sherpa の店を
冷やかしに行く。聞くと店主がミンマ・サ
ーダーの甥とのこと、15%程値引きをして
くれた。

4月26日 晴のち曇 ナムチェ(3,440)
7:30—10:40 ターモ 11:45—14:25 ターメ
(3,820)

今日も下痢が続いて食欲はなく体調が悪い。小西さんも仲間入り。今日はエベレスト街道から分かれ、ポーテ・コシに沿ってシェルパの里、ターメに向かう。石楠花や道端に咲いている高山植物を楽しみながらなだらかな坂道を行く。ターメで昼食。大きな岩というか岩壁に極彩色で5~6mの大きさに描かれている3体の仏画の傍を歩いて吊り橋を渡り、高巻きすると視界が開け、クワンデ、テンカンボチェなどに囲まれ、カンテガ、タムセルクが遠望出来るターメ村に着いた。宿泊地のエベレストサミットロッジのオーナー、アパ・シェルパはエベレスト最多登頂のギネス記録更新中で、今年も20回目に挑戦中とのことであつた。壁にはギネスの公認証が6枚ほど色んな写真と共に貼ってあつた。ロッジは2階建てで数棟あり、石壁に白の窓枠、ブルーの縁取り、屋根もブルーで色鮮やかであつた。ランタン谷に比べるとクーンブ側のロッジは一概に裕福なのか、小綺麗で垢抜けしているのが多かった。トイレも便器付きが多く今回泊まったロッジで穴だけのトイレはマルルンだけであつた。若者達が昼過ぎからチャンを大丈夫かと思うほど飲んでいる。それも女性が。聞けばレンジョ・パスから降りてきたポーランドの連中らしい。夕食を同じフロアで取ったが、カレーとかチャーハンのような物を食べていた。ちなみにメニューを列記すると、ダルバード300(Rs) 510円、ヌードル250、焼きめし250、ピザ350、春巻250、モモ200、スープ140、ミルクティー40である。田中さんも下痢状態になり、食欲が湧かず、我々はお粥と梅干

し、ふりかけ、昆布茶といった情けない食事となつた。彼らから見ると何と貧しい食事と映つたことであろう。ストーブを囲みながらシェルパ達と話をする中で、この辺りは20年前位までは1m位積もつたが、今は精々30cm位しか積もらないといつていた。やはり温暖化は確実に進んでいるようだ。

4月27日 晴のち曇 休養日

浪川・中島ハイキング ターメ 9:30—
10:15 ターメゴンパー11:00 ターメ

高所順応に当てていた日だったが、浪川さんを除く4人がゲリラ部隊となり完全休養日となる。天気がよいので中島さんは、ソーラーシートを広げパソコン用電池の充電に努める。ここはターメの水力発電所があり電力は割と豊富で、カメラの電池の充電も1回150ルピーで出来た。このターメに限らず今回のトレッキングで感じたのはエコ化が進んでいる事である。どのロッジでもLED電球が使われており、風力発電機を備えているロッジも何カ所かあつた。道の要所、要所に竹製の大きな屑入れが設置されていたのもランタン谷では見なかった風景であつた。屑入れを置くということは、そのゴミを回収するシステムが出来上がっているという事であろう。皆はシュラフ等を干しながら日向ぼっこを楽しむ。久し振りにトランプの七ならべをするも飽きしているとミンマ・サーダーがウノというゲームを教えてくれる。僅かな金を掛けると皆熱中し、時間が瞬く間に過ぎ去つた。夜もお粥と梅干し。コックが気を利かしてくれた冷や奴、サヤエンドウ(?)の胡麻和え、

サラダや味噌汁もアリアリ（少し）かブギョ（もう結構）ばかり。折角作ってくれたコックに申し訳なかった。夜は便所との往復。ここの便所はバルブ式であったので助かる。下痢でトイレの回数が増えたためか、何人かがトイレットペーパーをワンロール 150ルピーで購入する。高いと文句を言ってもここしか売っていないのだから仕方がない。

4月28日 晴のち曇のち小雨 ターメ(3,820) 7:15—9:50 タルガー 10:00—11:00 マルルン(4,075)

少し急な坂道を登るとボーテ・コシの川原にでる。カルカが点在し、ヤクが草を食べているのどかな風景の中、なだらかな右岸をゆっくりと登る。左手に日本人が初登頂したテンギラギタウやアメリカの親子が滑落死したキャジョリ等が連なり、対岸にはナンパ・ラからの隊商の道が遠望できる。昼前に今日の宿泊地マルルンのリバービューロッジに着く。昼食はうどん、ナン、茹でたジャガイモ、サラダ。この辺はジャガイモの名産地で、確かに塩をふったゆでたジャガイモは下痢腹でも美味しかった。食後、調子の回復しない小生を除いて裏山へハイキング。高度差 150m、4,225mまで往復する。ナムチェを出てからは、午前中は晴れて午後から曇り時々小雨が降る天気が続く。この日も皆が帰ってくる頃は小雨から雹に変わり、日が暮れると共に雪に変わった。夕食後、ヤクの糞を燃料にしたストーブを囲んでダラダラ話をした後、雪明かりの中、ヤクの糞に気を付けながら2～3cm積もった雪を踏みしめながら別棟の寝

室に行く。ここはトイレも別棟で今回のトレッキングで唯一板に穴をあけてあるトイレであった。

4月29日 晴のち曇 マルルン(4,075) 7:30—11:00 チューレ(4,490) チューレ 12:15—裏山ハイキング —13:00 チューレ



チューレ 6000m級の山々に囲まれて

昨日降った雪が朝日に輝いて山々が目にまぶしい。ボーテ・コシの右岸の緩やかな平原のような所を北上する。景色は開放的で山々の上の太陽の周りに円形の虹が掛かり幻想的な光景であった。この辺はヤク・カルカが多く、放牧されて草をはんでいるヤクが沢山いた。ちなみにゾッキョは4,000mが行動範囲の上限で、ヤクは4,000mが下限だそう。また、ジャガイモ畑も多く、収穫したジャガイモを家族で布袋に詰めていた。チューレの手前で関学隊が初登頂したディンジュンリ(6,196m)の頭が見える。中島さんが懐かしそうに説明してくれる。今回の目的地の一つであるディンジュンリのBCからはディンジュンリが見えないそうなので、ここで写真を撮る。幕営予定地の手前の約5m幅の川には一枚の板が不安

定に掛けてあるだけであった。しかもグラグラと不安定なためシェルパ達に手助けをして貰ってやっと渡る。ゾッキョ達はここをどのように渡渉するのだろうか。今日からテント生活が始まる。我々用に三張。食堂テント、トイレテント、シェルパやキッチンボーイ達はカルカを利用して天幕を張っている。ミンマ・サーダーに聞くとテントのポールを忘れて来たらしい。彼らも迂闊なことをするようだ。小西さんは一人用のテントを日本から持参し、得意げに潜り込んでいる。下痢と高度の影響を受け、皆調子が良くない。昼食時話し合っ、レンジョ・パス越えやゴーキョピークが残っていることから、当初の計画であったディンジュンリのBCをベースとせず、ここチューレに3泊してディンジュンリのBCや無名峰5,566mを目指そうということになった。チューレはタンナリやダンクルーなど6,000m級の山々に囲まれ、カルカが点在する景色の良いのどかな所であった。チベットからナンパ・ラを越え、土曜日のナムチェ・バザールに行くのであろう30人位の隊商が対岸に見える。

中島さんがここを訪れたとき、イエティの足跡の写真を撮った話をしてくれる。この辺りの住民は、夏はここでヤクを放牧し、冬になるとターメまで下って越冬するらしい。ところが平成19年の2月末に来たとき、チューレのカルカに向かって2足歩行の足跡を中島さんが見つけ、写真を撮ったそうである。2日程前の足跡のため溶けて鮮明ではなかったが、この時期、住民がうろつくはずもなく、イエティの足跡だった

と信じている。シェルパも間違いなくイエティの足跡であり、ここの住民は良くイエティの姿を見るとの事であったそう。確かにここは人里遠く、イエティが住んでいても不思議のない雰囲気である。写真は彼が提供してくれたその時の写真です。夕食はおでんがでる。漸く下痢も治り、食欲も出てきた。中島さんは下痢の反動で便秘に苦しんでいる様子。夕食後、皆は中島さんの衛星携帯で自宅へ連絡をいれていた。



右側がイエティの足跡(中島氏提供)

4月30日 晴のち雪 チューレ 7:30—11:20 チューレ氷河とパンブク氷河の出合
12:15—14:30 チューレ

握り飯の弁当を持たされて出発。幅広い川原から左岸の高巻きのルートをとる。疲れが出てきたのか傾斜は緩いがパーティの歩みが遅い。トップを歩くミンマのルートファンディングが悪いと腹が立ってくる。ここは中島さんのみが知っている所で、道もなくシェルパにとっても初めての地域であるので仕方がない。4,780m地点で昼食を

取る。ディンジュンリの頭のみ見えるが、BCまではまだまだ遠く、残念ながらここでBC行きは断念し、チューレに戻ることにした。無名峰 5,566mへの挑戦も夢の彼方へと消えていった。正直、今の体調ではBCまでは行けてもその先は無理であった。

5月1日 晴のち曇 2パーティに分かれてハイキング

A隊(浪川、中島)チューレ 7:30—9:45
4,880m地点 10:10—11:30 チューレ

B隊(田中、小西、柏)チューレ 8:00—10:30
イエティ峰(4,750m) 11:00—12:15 チューレ

無名峰アタックが中止となったので休養日となった。浪川さんがナンパ・ラを覗いて見たいと中島さんとミンマの3人で行くことになった。残った3人もどこか登りたいと裏山を目指すこととなった。



左パサムラムチュリ(7350m)右チョー・オユー(8201m)

A隊 ボーテ・コシを渡り、河原を詰めていくと小さな湖に出る。1,000m位の岩壁を対岸に見ながら左岸を詰める。ゴーキョ側から派生した尾根に取り付き、2回ほどコルを越えるとビューポイントに出る。チョー

ー・オユーが正面に、両側にラウンシャー、パサムラムチュリ(ジョボリンジャン)、ナンバイゴズムなどの6,000m峰が見えた。ナンパ・ラは見えなかった。川が氷河となって左にまがっている。そこからナンパ・ラまでまだ1日位掛かるそうである。(浪川さんの談)

B隊 無名峰に登れなかった無念を晴らそうと、小さなピーク(裏山)を見つけ、あそこは誰も登っていないだろうと軽い気持ちで出かけた。結構傾斜がきつく、高度差260mを3時間近く掛かって最後はフラフラになって4,750mのピークに立つ。田中さんはお孫さんが作られた日の丸をおもむろに取り出されて万歳をされる。無名峰だろうから命名をしなければと、途中にあったヤクの糞からヤク峰と名付けかけたが異議が出て、イエティ峰に決まる。頂上からの展望は素晴らしくパサムラムチュリ、チョー・オユーとギャチュンカンの上部が間近に見えた。ナンパ・ラは前衛峰の陰に隠れてここからは見えなかった。



左からラウンジャー(6224m)・タンクル(6425m)
タンリ(6801m)・パンブツク(6647m)等

5月2日 雪のち曇 チューレ(4,490) 7:30—9:40 アリヤ 11:55—14:50 ルンデンとの

分岐点 15:00—15:40 リモラ (4,800)

昨夜から雷と共に降り出した雪が10~15cm位積もっている。私は気づかなかったが夜中の3時頃にシェルパ達がテントを除雪してくれたそうである。周囲の山々も真っ白となっていた。3日間お世話になったチューレも今日でお別れ。いよいよ後半戦、レンジョ・パスを越えてゴーキョピークを目指す。テントを撤収し、ボーテ・コシへ。以前あった橋が流されたそうで、昨日、シェルパ達が近くのヤクパから調達してきた長い丸太を掛ける。昨夜からの雪で濡れておりツルツルと滑りそうで気持ち悪い。落ちれば氷河の溶けた急流に流されてしまう。シェルパの手を頼りに全員がどうにか渡り切る。なだらかな坂道を2ピッチほど下るとアリヤに着く。ナンパゲストロッジは遠征の時に中島さんがお世話になったらしく、主人夫婦と懐かしそうに挨拶を交わしていた。考えてみればこの3日間、トレッカーとは一人も会わなかった事になる。細うどんとポテトサラダの昼食をゆっくりと食べて出発。急な道に取り付く。途中、我々の荷物を積んだヤクとゾッキョに追い抜かれる。4,000mを越えるここではゾッキョは役にたたず、自分の餌(草)だけを積み、隊の荷物はチューレで調達したヤク5頭に積んでいるそうである。時々、遠くに雪崩の音がする。14:50にルンデンとの分岐点に着く。ほとんどのトレッカーはアリヤを経由せず、ルンデンから直接レンジョ・パスを目指すらしい。50分ほどで今日の幕営地リモラ(ツインレイク)に着く。地名の由来である2つの小さな池のそばにテントを張

る。明日目指すレンジョ・パスが覆い被さって見える。既に3人の西洋人がシェルパやポーターと共にテントを張り、我々を興味深げに見ていた。後で聞くとルンデンから登ってきたイタリア人で、明日同じレンジョ・パスを越えるそうである。シェルパがイタリア隊から聞いたのか、カトマンズで無期限のバンダ(ゼネスト)が始まっており、バス、タクシー、車、バイク等の交通機関は全てストップし、店も18時~20時のみ営業を許されているそうである。えらいことになったなーと言いつつもどうしようもない。早期解決を祈るのみである。パルスオキシメーターの数値が68になったので初めてダイアモックスを1錠飲む。他の人は大分前から服用していた。ダイアモックスを飲むとトイレの回数が増えるため、飲みたくなかったが仕方がない。夕食時、日本から持ってきた小豆の缶詰でぜんざいを頼むとちゃんとお餅まで入って出てきたのには驚いた。

5月3日 晴のち曇 リモラ (4,800) 7:30—11:15 レンジョ・パス 11:30—12:20 昼食 12:45—15:15 ゴーキョ (4,790)

イタリア隊は既に出発していた。テントを撤収して出発する頃には、もうルンデンからのトレッカーが次々と登ってくる。彼らは何時頃出発したのだろう。欧米人のピッチは本当に早い。あんなスピードで最後まで持つのかと思うのだが、それが持つので悔しい。一寸可愛い二人連れの女性トレッカーと前後しながら登る。想像以上にきれいに整備された急な階段状の雪道が続く。

5,000mに近づき息が切れ、猛烈にしんどい。戦友 14 番までを繰り返し繰り返し頭の中で歌って歩む。4 時間近く掛かってレンジョ・パス(5,350m)に着く。残念ながらガスでエベレストをはじめローツエ・マカルー等の山々の上部は見えない。ゴーキョへの下りはレンジョ・パスへの登りと違ってほとんど整備されていない。雪の残っているガラ場道を下る。途中急傾斜の雪溪のトラバースがあり、シェルパがステップを切ってくれたがストックだけでは結構緊張を強いられた。ピッケル持参のトレッカーが多かったのもうなずける。大きな湖の向こうにゴーキョの村が見えているのになかなか近づかないのがもどかしい。ゴーキョリゾートロッジは今までのロッジの中では一番大きく、風力発電機を備え、インターネットも可能であった。結構、宿泊客は多かったが、日本人は我々だけであった。ナムチェを出て以来、日本人には一人も会っていない。カレーとマカロニサラダ、なますに味噌汁の夕食を西洋人は興味深げに見ていた。シェルパ、ポーター用に別棟があり、夕食後、彼らはトランプ博打に励んでいた。当初の計画ではゴーキョピークを登った後、ドーレまで下る予定であったが時間的にも体力的にも厳しく、日程に余裕があるので明日はゴーキョピークアタックのみに変更となった。

5 月 4 日 曇 ゴーキョ (4,790) 5:00—
8:40 ゴーキョピーク (5,360) 10:00—12:00
ゴーキョ (4,790)

何時も午後から天候を崩れるのを考慮し、

朝食用の弁当を作って貰い、朝焼けの中を 5 時にロッジを出発。湖の縁から急坂の登山道に取り付く。同宿のトレッカーが次々と追い抜いていく。曇空がどんどん濃くなって行き、エベレストやローツエが見える筈なのに雲に隠れて見えない。あきらめて下降し出すトレッカーが増えてくる。我々はあきらめず、高度を上げていくと徐々に天気が回復しだし、エベレストやローツエ、マカルーがその姿を見せ始めた。頂上に着くと北側にはチョー・オユー、ギャチュンカン、ブモリ、南の方にはアマダブラム、カンテガ、タムセルク、クスムカングルーが望め。西側には昨日越えてきたレンジョ・パスやパリラブチャが見える。我々以外にはフランスのアベックしかいない。暫く岩に寝そべって至福の時を過ごす。頑張って登ってきた甲斐があった。見える範囲の 7,000m以上の山は全て登られているそうである。下りは痛み止めを飲んでいたにもかかわらず右足が痛み、皆から大きく遅れる。ペンパと二人でゆっくりゆっくりと降りていくと、中島さんが心配してワンプッチほど迎えにわざわざ登って来てくれたのです。初めてツアーリーダーを勤める彼は、老人部隊を本当に良く世話してくれました。起床後と宿泊地到着時にパルスオキシメーターで全員の血中酸素飽和度を測り、一人一人に体調を聞き、便の状態まで心配してくれました。又、皆の体調を考えて計画を柔軟に変えて対応したり、日本食の材料を沢山日本から持参したり、細かいところまで気を遣ってくれました。お陰でトレーニング不足で体調の悪かった小生

も最後まで引っ張って行ってくれ、笑いの絶えない楽しいトレッキングを味あわせてくれたのです。彼は初めてと思えない素晴らしいツアーリーダーでした。只、高度障害の対策として水類を飲み飲みと責め立てる水攻めは不評でした。



ゴキョピーク(5360m)よりエベレスト・ローツェを望む

5月5日 雪のち曇 ゴキョ(4,790)8:00—11:20 マッチェルモ 12:30—15:20 ドーレ(4,050)

小雪の中を出発。この天気が昨日でなかったことに感謝しながら、幾つかの湖の傍を通りながら平坦な道を行く。吊り橋を渡ると高巻きになり岩をうがった道を下っていく。高度も結構あり緊張を強いられる。行き交うトレッカーが時々幾つだと聞いてくる。自分が最高齢という自負があるのだろう。大抵は70才前後で小生は負けるのだが、田中さんは76才だと言うと、オーノーとのけぞっていた。今回会ったトレッカーの中では文句なしに田中さんが最高齢だったと思う。その馬力には敬服するのみであった。カルカのある所まで降りてくると1995年に雪崩で日本人、シェルパ、ロッジの主人等計25人が亡くなった現場を通る。「岳人」と彫った石碑と亡くなった人の名

前を彫り込んだ銘板があった。マッチェルモのイエティロッジに着く。狭いフロアはトレッカーで一杯だった。昼食はお好み焼きとジャガイモのバター炒め、サラダ、うどんで他のトレッカーから興味深げに見られる。美味しい昼食とストーブのお陰で雪混じりの雨で冷え切った体が生き返る。午後ドード・コシを1,000m位下に見下ろしながら右岸のなだらかな道を下りる。途中から雨も上がり、石楠花や可憐な高山植物が我々を和ましてくれる。急な坂を登りきるとドーレ村に着く。今日の宿泊はナマステロッジである。小さなロッジなので貸し切りかと思ったが、イタリアのトレッカーが一人同宿していた。ここから見るタムセルク・カンテガの夕景は最高だった。しかし、浪川さんの様に登攀意欲はもう湧いてこない。今夜からアルコール解禁となり、チャンを飲む。どぶろくを薄めた味でもう一つであったので、田中さんがバンコックで仕入れた秘蔵のウイスキーの出番となった。久し振りに飲むアルコールは腹にジーンと染み渡り旨かった。

5月6日 曇のち雨 ドーレ(4,050)8:00—9:05 ポルツェタンガー—9:35—11:15 モン・ラ 12:30—15:00 ナムチェ博物館 15:30—15:45 ナムチェ(3,440m)

ドーンという音で飛び起きる。何と浪川さんのベッドの足が折れたのだ。余程寝相が良かったのだろう。本人は怪我もなくケロッとしている。やはり鉄人である。ドード・コシの右岸を高巻きしながらポルツェタンガーまで緩い坂道を下っていく。ここ

から登り返しとなる。2 時間弱登り続けるとモン・ラに着く。ここはアマダブラムなどが目の前に見える景勝地だそうだが、残念ながら曇って何も見えない。いなり寿司とにゅうめんが昼食に出る。旨かった。午後も緩やかな高巻きの道を下る。エベレスト街道に合流すると一気にトレッカーが増える。浪川さんが壊したせいでないだろうが、木製のベッドを担ぐ歩荷と何人もすれ違う。シェルパに聞くと 80 kg は有るらしい。この辺の相場は 1 kg 40Rs。80 kg で 3,200Rs、約 5,440 円。ネパールでは凄い金額になる。ちなみにゾッキョは 60 kg 位を担がせて、1 日 1 頭 1,000 Rs、1,700 円位らしい。ナムチェ博物館は民芸品館と工芸品と有名なシェルパ達の写真が展示してある歴史資料館の 2 棟からなっていた。ペンパのお父さんの写真も展示してあった。サクラロッジに着くとウェックの別ツアー団体 (T/C 貫田氏) と一緒になる。三浦豪太さんも一緒に、この春、安比で竹中さんが履いていた K2 の三浦クラシックモデルのスキーの話から大いに盛り上がる。今日もチャンとウイスキーで仕上げる。



左から 柏、ラパ・テンジン、田中、小西、浪川
一人おいて ミマ・サダー (ナムチェにて)

5 月 7 日 晴のち曇 ナムチェ (3,440m)
8:50—11:45 チュモア 13:00—14:50 パク
ディン (2,610m)

カトマンズのバンダがまだ続いており、この状態ではカトマンズで土産を買えないだろうと、朝食後土産を買い出してから出発することになった。顔なじみになった Sherpa とマウンテン・ハード・ウェアの店に寄ってそれぞれ土産を買い込む。往路で苦しんだ急坂を下る。明日がナムチェのバザールのため、荷を満載したヤクやゾッキョ、100 kg に近い荷物を担ぐ歩荷と次から次とすれ違う。中には携帯で話しながら歩荷をしている連中もいる。その馬力にはあきれるばかりである。チュモアでの昼飯は天麩羅が出てきた。天つゆの味も良くお代わりが相次いだ。今回のトレッキングはゲリラ部隊であったので、お粥と梅干しのリクエストが多く、折角の腕を振るえなかったコックに申し訳なかった。パクディン村に着いて、若い可愛らしい女性のそばを通った時、ペンパの挙動がおかしかったので、問いただすと先日結婚した 21 才の新妻とのこと。皆に冷やかされる。夜はいつの間にかどこかにしけ込んでしまった。往路で泊まったサンライズロッジに 15 日振りに泊まる。ウイスキーもとうとう空き瓶となってしまった。田中さん有難うございました。

5 月 8 日 晴のち雨 パクディン (2,610m) 8:00—11:30 ルクラ (2,840m)

カトマンズのバンダが終わったとのニュースが伝わる。ホッとした気分になったの

は、直接関係はないにしてもどこか緊張していたからだろう。今日はトレッキングの最終日。坂道を上っていくと途中から雨となる。急坂を登りきるとルクラであった。ホリディロッジで荷を解く。パクディンでちょっかいを出した犬が何を思ったのか、ルクラまで付いてきたのは愛嬌であった。翌朝もロッジの前にいたがいつの間にかいなくなった。他の人について又パクディンまで帰ったのだろう。短くも有り、長くもあったトレッキングも今日で終わった。ターメでは体調が悪く皆と付いていく自信がなくなり、ナムチェに戻ろうか悩んだことや、高度障害と疲労のためか自身の言動が少しおかしいじゃないかと不安になったことも過去の事になった。こうして皆と一緒に無事戻ってこられたのは、皆さんのお陰、感謝・感謝である。夕食まで近くのルクラスターバックスという看板だけは本物とそっくりな喫茶店に入ってコーヒーを飲む。結構美味しかった。浪川さんは時間つぶしに中島さんのパソコンを借りて、無料となっているインターネットで山岳会の掲示板にメールを入れていた。豪華なチキン料理の夕食後、サヨナラパーティが開かれる。SEE YOU AGAINと書かれた大きなデコレーションケーキが出てくる。キッチンスタッフの心尽くしである。全員が集まった中で田中さんが無事にトレッキングを終えられた感謝の言葉を述べられる。ケーキカットを行い、チップや余った装備・衣料等を渡す。その後はビールやチャンで日・ネ歌合戦、開放感に浸りながら、床が抜けるかと思うほど皆が踊りまくった。

最後に全員で歌ってくれたネパールの「レッサムフィリリ」という歌が心に染みた。

5月9日 晴 ロッジ6:15—6:25 ルクラ空港 7:35—8:05 軍空港(給油)8:25—8:45 カトマンズ空港 9:00—9:30 ラディソン・ホテル

搭乗待ちをしていると段々雲が出てくる。早く乗らないと欠航になると気が焦る。やっと3機目の最後に乗り込める。幸いなことにCAと隣同士。「何人乗り」「17名乗り」「山には登るの」「登らない」下手な英語で会話を楽しんでいると、まだカトマンズでないので着陸態勢。そのまま草地の飛行場に着陸し小屋の傍まで滑走していく。CAに聞くとここは軍の空港でどうも燃料切れらしい。確かにドラム缶を横にしたような燃料タンクがある。何時も起きるのかと聞くと流石に滅多にないらしい。ホースでの給油が始まる。CAは乗客に飴を配りに行った。カトマンズ〜ルクラ間は30分位の飛行、せめて往復するぐらいの燃料を積んでいると思ったのに燃料切れとは。軍の空港がなかったらどうする積もりだったのだろう。どうにか無事にカトマンズ空港に着く。一部の荷物が後の飛行機に積み込まれていたトラブルもあったがすぐホテルへ。17日振りにバスに入り垢を落としてすっきりする。昼飯はランタンの時にも行ったスーパー・ブルーバード屋上の中華料理店。冷えたエベレストビールが旨い。コスモに挨拶に行く。大津さんが往路で会えなかった中島さんを息子のように再会を喜んでいた。ランタンのサーダーであったカイラにも会

う。足のことを心配してくれていた。彼はカイラス巡礼へ行く準備をしているとのことだった。その後、ホテルの近辺やタメルでお茶や土産を購入。その足で、チベット語で食べ物の王様というギャコック鍋を食べに行く。中華料理の火鍋のような煙突の付いた鍋にモモ、団子、鶏肉等を入れながら野菜や春雨と一緒に食べる。途中から停電になり、ローソクとなったがワインとトレッキングの話で盛り上がった。

5月10日

カトマンズ市内も前に主なところを見ているので、今日は空港横のロイヤルネパールゴルフへ行く。9ホールをピンの位置を変えて18ホールにしている狭いコース。全くのお遊びだった。ホテルに帰ってから最後のショッピング。バンダが終わってくれ

て本当に助かった。夕食は長い間ネパールに滞在しながら本格的なダルバードを食べていなかったのも、ホテル近くのツシタレストランへ行く。豆を主体にしたスープに鶏肉やヤギの肉など入れ、アチャールという漬け物と一緒にご飯にかけて食べる。お代わり自由とのことであつたが、強いて美味しいと言うほどでなかった。ホテルに帰って一室に集まり、お別れパーティをする。

5月11日 引き続いてチベットへのトレッキングのT/Cを行う中島さんの見送りを受けて、12:50 発のタイ航空でネパールを後にする。バンコック経由で12日 5時30分 関空着。解散。

〆〆田中さん、小西さん、浪川さん、中島さん 有難うございました。〆〆



伊 丹 徳 行（昭和 44 年法）

1997 年 5 月 6 日で JR 東北本線野辺地と青森北部の七部町を結ぶ、南部縦貫鉄道が一時中止との発表があった。この鉄道は珍しいレールバスを使用しており、是非一度は乗ってみたいと思っていた列車であります。再開されるものと思いい見学に行かなかった。

その後 2 度七戸町の車庫に行ったが再開することを待ってか、エンジンを吹かしたまま停車する、さびしそうな列車を見ることとなった。

しかし、その後 2000 年正式に廃線となった。

それ以降、乗車身上として

- (1) 情報が入れば迅速に行動する。
- (2) 出来るだけ往復する。
- (3) 運転室の後ろに立つ。
- (4) 寝ない
- (5) 暗い時間に行動しない
- (6) 目覚時計は持って行動する。

1997 年 5 月

雨宮先輩より電話有り。仙台港で「国際交流ゆめ交流博覧会」が開催され、その際、仙台駅から臨時列車が会場まで運行されるとのこと。早速仙台に伺う。仙台を出発した客車は東北本線肥前山王から貨物専用レール仙台臨海鉄

道を走り、鉄パイプで架設された会場に到着する。仙台駅で見た丸帽子を被っていた東日本鉄道の運転手が、何時の間にか戦闘帽に顎紐を被った。貨物列車担当の運転手に換わっていた。会場では先輩の出店に顔を出しユーターン。何も買わずに失礼しました。

2000 年 8 月 16 日

JR 田辺駅発 7:55 龍神自動車

龍神温泉着 9:19

〃 発 10:23 龍神自動車

護摩壇 着 11:05

〃 発 11:35 南海りんかいバス

高野山 着 12:45

龍神温泉の時間待ちには、紀州の殿様も入浴した上御殿もあり、日本三大美人の湯に浸られてはどうですか。護摩壇山からは高野龍神スカイラインに入り和歌山のすばらしい山々を見ることが出来ます。高野山では奥の院へ参拝されてはいかがですか。

2003 年 8 月 16 日

函館本線深川駅より留萌本線で増毛駅へ向かう。留萌駅で無人駅増毛の「記念入場券」160 円を売っていました。私のよ

うに頭髮の寂しい方、お守りにどうでしょう。

2003年10月22日

立山にトロッコ列車が走っていると言っても、ほとんどの人は信用しないし、黒部峡谷鉄道と同じではないかと思われるでしょう。しかし、本当に走っています。場所は富山地铁立山駅より、美女平へ向かうケーブルカーに乗ってすぐ右下を見るとレールが見えるはずです。これが立山のトロッコ列車です。正式には「立砂防工事専用軌道」と言い、立山カルデラ乗車時間 - 1時間45分、スイッチバック - 42回、前の人との膝間隔 - ゼロ、座高の高い人、足の長い人、身長が180cm以上の人は乗車が難しいのでは。このトロッコ列車は7月から10月に開催される「立山カルデラ博物館」の勉強会に参加することが必要です。

2004年3月6日

北海道石勝線に「楓」と言う駅あり。この駅は6時45分新夕張駅発楓駅行(6時54分着)の終着で、7時2分発新夕張駅行きの始発駅で、1日の発着はこの1回のみ。以後は石勝線を走る特急列車と貨物列車が走るだけです。

3月12日で廃線が決定したので、3月6日乗車する計画を立てる。前日の3月5日新夕張駅についてみるとマイナス31℃。久しぶりに寒さを感じる。

翌日新夕張駅に行ってみると人の多い

こと。無人駅「楓」の入場券や「楓」の付いたグッズの多いこと。辟易する。予定通りの列車で楓駅へ。山間部の20～30戸の小さな村と言ったところ。朝列車を利用した人々は帰りはどうするのか心配します。楓駅の廃駅で、新夕張～占冠間34.3kmが新幹線を除く駅間が1番長い区間となった。

2004年3月12日

3月13日はJRの時間改定が行われる日。最大の行事は九州に新幹線が開通すること。それに合わせて行動することにする。

3月12日 門司港発鹿児島本線大牟田行きに乗車、その後、熊本、八代、水俣、出水と乗り継ぎ19時56分西鹿児島着。

9時間56分の乗車。

鹿児島は明日の新幹線開通を記念し大パレード中。

翌3月13日九州新幹線を横目に見ながら新しい鹿児島線中央駅から人吉を廻って新しい駅、新八代駅へ。ここから開通したばかりの「つばめ」で鹿児島中央駅へ。新車両の匂いをかきながら、少し固めの席に座る。約40分間の旅。あつと言う間に鹿児島中央駅に着く。今日は昨日とは逆に川内から出水まで新しくなった肥薩おれんじ鉄道の新しい列車の乗車する。当日は12時間40分の列車旅でした。

2004年9月30日

別府港発 8 時発のバスに乗車。行先は長崎。しかしこのバス、別府発、湯布院、くじゅう登山口、黒川温泉、阿蘇駅、阿蘇登山口、熊本空港、熊本駅、熊本港(フェリー)島原外港、雲仙、小浜経由長崎行きで通常9時間47分のバス。運転手に頼むと阿蘇登山口でお弁当を受けることができる。全行程乗客1名のみ。ただし、このバス廃線。

2006年8月14日

私も山に行っております。

青春18切符を使用し鶴岡へ。ここから出羽三山の一つ羽黒山の麓、羽黒センターへ。これより2446段の階段を上ります。左に国宝の五重塔を見ながら、鬱蒼とした大木の中をただ登る。疲れを紛らわす方法として2446段の階段の内33段に盃や徳利が彫ってあるとのこと。これを捜して登るのもよいのでは。



8月15日 羽黒センターより月山八合目までバスで。山頂までほとんど木陰の無い道を、スリーピッチで登る。山頂は多数の人が昼食中。月山に登るのは3ルートあるが80%の人が姥沢ルート、15%の人が羽黒ルート(八合目バスルート)、5%が湯殿山ルートに登るのでは。出羽三山の三山とも登るので湯殿山へ行くこととする。湯殿山ルートは鉄梯子や岩場があり、一番難しいルートではないかと思う。湯殿山神社の足湯で疲れを癒し下山した。

最後に、現在乗車したい乗物は屋久島の森林鉄道、インドのダージリン鉄道、他2鉄道です。

山を語る二篇

～雪崩学の危険

～山をめぐる七章

雨宮宏光（昭和33年経）

雪崩学の危険

はじめに

雪崩には多くの研究報告がある。そして結論で言うならそれらは、だいたいにおいて正しくない。雪崩の発生原因を科学的に解明することなどできないのです。(注)

「雪崩学」は一部の実験結果のデータや、自分の狭い経験や先人の言い伝えなど、いわば人間的尺度から見た、日常的感覚に基づいた推測みたいな、ものに過ぎない。人間的尺度では、あの斜面では過去数十年雪崩が出ていない、というような基準で判断する。ところが大自然の尺度はそれよりはるかに大きい。

次のような数百年に一度という雪崩は誰も予知できない。したがって防ぎようがない。

注. 降雪量・雪質・気温・風・斜度・地形……等、何種類もの自然の事系が入り組んだ（複雑系の事象）のメカニズム解明は不可能である。

起こってわかった大自然の怖さ

大正7年1月9日。新潟県南魚沼郡三股村で集落を壊滅させた雪崩（集落民180名中158名死亡）。雪崩の発生した山から村落との高度差約250m、山頂から麓までの水平距離300mはあり、ということは平均斜度30度ほどにすぎず、さらに人家までまだ300mも緩やかな斜面が続いていた。どう考えてもそんな大惨事が起こる場所ではない。（だからそこに集落が形成されていた）

『永遠の未踏峰』・渡部由輝・山と溪谷社

信じられぬ カタストロフィー（崩壊）

昭和13年12月27日午前2時ごろ。黒部ダムの工事現場で雪崩が発生し、鉄筋コンクリート造りの宿舍が吹き飛ばされ、中にいた工事関係者84名が死亡した。5階建ての建物の2階から上が刃物で断ち切ったかのように切断され、そのまま600mも空中を飛ばされ、黒部峡谷を越えた対岸の奥鐘山の岩壁に激突していた。

富士山に逝った 大学生たち

昭和 29 年 11 月 28 日。冬山訓練中の日大、東大、慶大などの大学生が富士山の吉田大沢で表層雪崩に襲われ 15 名が圧死。何百年に一度の大雪崩であった、と報道されている。

梅里雪山で 17 名遭難

1991 年 1 月、中国雲南省の梅里雪山 (6,740m) で京大と中国との合同登山隊が、ベースキャンプで雪崩に襲われ、日本人 11 名、中国人 6 名の合わせて 17 名の隊員全員が死亡。今西錦司の「雪崩学」以来、雪崩に関する研究・知見で屈指の権威といわれた山岳団体のベースキャンプが、雪崩に遭遇した。

予見不可能な巨大雪庇の崩落 大日岳山頂付近

2000 年 3 月 5 日。雪崩ではないが巨大雪庇の崩落に、講師および研修生 27 人のうち 11 人が巻き込まれ学生 2 名死亡。この文部省（当時）登山研修所が主催する大学山岳部リーダー研修に参加していた甲南現役・池内友宏は、その瞬間を、なんだかわけが分からず、ボーッとしていた。「落ちた！落ちたぞ！」の叫びに、いったい何が落ちたのか？仲間がいない。そう、尾根の一部が突然に消えたのです。

彼とは海外 2 回、国内で 4 回山行を共にしたが、この件に関しては断片でしか語らない、というより語れない。あまりにも予見を超えた衝撃、雪の塊が砕けナダレを誘発、仲間はナダレに。池内友宏は運が良かったです。

雪庇の形成と破壊に関する検証現場写真のページ

<http://homepage2.nifty.com/tennenshoku/yamatabi1.html>

この雪庇の形成と破壊に関する詳細な研究報告、事故と事件の顛末は、『北アルプス 大日岳の事故と事件・斎藤惇生編』・ナカニシヤ出版・2007 に詳しい。

追記：2007 年 2 月。名古屋高裁金沢支部は研修会講師らのルート選定に過失があったとして、国（文部省）が遺族に 1 億 6,700 万円を支払うとする和解を勧告。この事故のあと大学部山岳部リーダー冬山研修会は実施されず、2010 年 5 月に再開される。

日本最大規模の雪崩（乾雪表層）

2000年3月27日。岐阜県・上宝村・蒲田川支流左俣谷の穴ヶ谷・標高2,720m地点から発生した雪崩は標高1,125m地点まで押し出して林道を埋め、休憩小屋にいた除雪作業員2名が小屋ごと流され死亡した。小屋付近にあった車両他機材もさらに300m流され右岸側で発見された。高度差、最大到達距離、雪崩発生量は国内で記録された雪崩では最大規模である — と報告されている。(注)

注. 3.27 左俣雪崩災害調査委員会・国土交通省・北陸地方整備局 神通川水系砂防工事事務所の調査概要。流下距離約4.6km、雪崩始動積雪深3.4m、発生量約166万 m^3 、堆積区堆積量約107万 m^3 、推定流下速度約50m/s。

五十年に一度？ の大雪崩

196?年3月○日○時ごろ(記録なく年/日/時/?)後輩・石原浩二君と2人。杓子・小日向から下山中、杓子沢から長走沢と、雪崩発生。(杓子沢鞍部・雪庇崩落が原因で、長走沢の雪崩を誘発か)

途中で合流した二つの沢の雪崩は一本の大奔流となって、雪煙・轟音・爆風が数十秒いや、それ以上？ 雪崩は猿倉樹林帯の樹々をなぎ倒し、猿倉小屋の上部でおさまる。発生から停止までいままでに見た最大の雪崩で、樹林帯をルートとしていたら、あの世いき。それまでの杓子岳登山では、雪崩通過地点をスキーで猿倉小屋へと滑っていたのです。

石原浩二君が次のようなメールをくれましたので、年/日/時間を確定します。

「杓子の雪崩は昭和44年(1969年)3月18日です。時間は12:30頃です。茫然と雪煙をかぶり歩こうと思っても足が出なかったこと 必死で走った猿倉台地 思わぬラッセルでやっと着いた二股発電所 極上のラーメンとりんご 雨さんが鉢の下に置いた1000円 追いかけてきて受け取れないと言われた発電所の人 なぜか途中で会った横山さん。あの時の事を昨日の事のように鮮明に覚えているのが不思議です」 ～原文のまま～

.. ————— ..

白馬のプロガイド 丸山忠昭は、中山沢下流のヘリポートにあった荷揚げ用の小屋は中山沢からの雪崩で押し流された。(注) 白馬^{ねふだいら}葱平で雪庇崩壊、その雪庇と繋がっていた平らな場所 — 小屋が在った — まだが抉りとられ小屋が転がり落ちた。梅池自然公園・南西部付近で発生した底雪崩は、土石流となって岩小屋沢を走り抜け

猿倉小屋に迫った。そのとき大量の倒木が川に流れこみ処置に困った営林署が、地元
に流木を入札して払い下げた事例などを挙げ遭遇した雪崩を、「まあ、それは五十年
に一度、くらいの雪崩だわ」と、言っていました。

注。2000年2月？日。小日向山・1,850m付近で起きた雪崩が中山沢を走り抜け、小山を超えて
白馬館の小屋2棟を50m下の北股入河原まで押し流した。

『雪崩の掟』・若林隆三・信濃毎日新聞社

山小屋は安全か

剣沢に逝ける人々 芦峠の名案内人にして予知不可能

昭和5年1月。立山のガイド佐伯福松・佐伯兵次に案内された学生4人の合計6名
が、剣沢小屋で就寝中雪崩に襲われ圧死。希代の単独行者・加藤文太郎は、この小屋
に同宿を希望したが断われ難を逃れています。

その場所に詳しい山人が建てた場所だから、ここは大丈夫、は危ない

岳沢小屋・槍平小屋・涸沢小屋・剣沢小屋など、雪崩で損傷・崩壊の事例がありま
す。事例をすべて検証したわけではなく、実際はもっと多いと思います。

たびたびの損傷・修復の費用から、白馬尻小屋は毎シーズン小屋の解体・再築を繰
り返している。予知不可能（三股村）のような雪崩が起きたとき、多くの山小屋が損
傷・崩壊にあうかもしれません。

実際に見た事例では大日平山荘の崩壊がある。その崩壊の跡を見たが、地形からは
予知できぬ場所である。（だからこの場所に建造されていた）。

大日平、北側の大日岳 ～ 小大日（2,370m）につながる尾根の南斜面から発生した
雪崩が、大日平との間にあるザクロ谷を乗り越えてきた — と推測。

（地形図・五万図・立山）

山荘は200mほど離れた場所（大日平東端）に新築された。そのとき周囲の樹を伐
採し年輪から樹齢300年位と推測（つまり300年雪崩が起きていない場所）。

崩壊した旧山荘付近の樹齢は200年位と山荘管理人に聞いた。新築の山荘は大丈夫
かと聞いたら「そんなことわからんわ。山に聞いて」と言っていた。

このあたりを熟知した芦峠の佐伯民吉が、ここと選んだ場所が雪崩に遭うとは。旧

大日平山荘の崩壊現場で、解体された木材に坐って休憩していたとき、こんな場所に雪崩がくるとは —— 雪崩はやってきたのです。

旧大日平山荘は何回か雪崩に遭っていた。この地域の豪雪で小屋が埋め尽くされ—自然の防護壁で—損傷を免れていたが、温暖化で小屋が露出し雪崩をうけた。

スキー場は安全か

2008年2月3日16時頃。樺池高原スキー場の林間迂回コースで雪崩発生2名死亡。事故発生時コースには「進入禁止」の標識があった。このコースを午前中に（進入禁止ではなかった）滑っていたパーティが、午後は標識を無視して雪崩に遭遇した。

2000年？ 2月、樺池チャンピオン・コースで雪崩発生、重傷2名。事故前日に記録的豪雨があり水路に流れこんだ雪が排水を邪魔して、コースに水混じりの雪（大根おろし状）が、あふれ押し寄せた。

2008年2月1日。妙高三田原第三高速リフト終点直後の沢対岸で雪崩発生（災害無し）。この地点2007～2008の間、雪崩発生回数3回。

2008年1月2日。新潟県苗場スキー場内で雪崩発生（重傷1名・軽傷2名）。

他福島県のスキー場4ヶ所で雪崩発生（軽傷1名）。以後これらのスキー場は安全のためコースの一部を一時閉鎖。2010年1月16日。北海道ルスツスキー場でガイドに引率されたツアー客9人が雪崩に遭遇し男性1名死亡。

近年スキー場は維持管理費用軽減のため圧雪区域を減らしており、未圧雪の場所で雪崩の危険が予測される。閉鎖されたスキー場はオフピステとして人気あるが雪崩の危険がある。

事例：2010年2月6日。長野県山ノ内町の志賀高原・前山スキー場で雪崩が発生し、国道292号を越えて硯川ホテルの1階ロビーに流れこんだ。ホテル駐車場の乗用車15台が埋もれたほか、観光バス2台が押し流された。同ホテルによると、スキー場は今冬営業していなかった。

事例：閉鎖された八幡平スキー場（岩手県）の旧グレンデ部分は無樹林の急斜面で雪崩が頻発している。

心配ついでに林道を滑走コースとしているスキー場では注意しよう。

林道は造成に際して斜面を削る事から、コース横が急斜面になっていることが多い。この斜面から発生した雪崩がコースに堆積し凍結したとき転倒の危険がある。

1996年、白山一里野スキー場で林道を滑走していたスキーヤーが転倒・スリップして林道からはずれ、下にあった雪崩防護の鉄柵まで滑落し、頭部を強打して死亡し

た。

全日本スキー連盟の年報にスキーヤーの事故（骨折・捻挫・衝突）などの統計はあるが、雪崩の報告は無い。したがって雪崩発生事例の詳細はわからない。

あとがき

『決定版 雪崩学』を読んで「決定」という言葉を盲信してはなりません。現場での弱層テストほか机上の実験のような雪崩研修会で知った雪崩の知識を過信してはなりません。雪崩の発生について「こうだ。・・・である。」という研究成果の正誤は、いまのところシロともクロともいえない。

どうしようもない雪崩は避けられない。だから雪の山など行かないは、新幹線が脱線転覆したら死ぬかもしれぬから乗らない。飛行機はもっと危ないから乗らない、と同じで予知できぬ雪崩との遭遇は、神のみぞ知る ～ 運 ～ としかいえません。

1978 年、ナンガ・パルバート・ディアミール壁。テントで早朝に聞いた雪崩の崩落音。テントから出たメスナーは好運だったと述べている。きのう登ったルートがデブリで埋め尽くされていたのです。

彼はダウラギリでも雪崩に直撃されたが、好運にも本流からそれ助かっている。メスナーが超人だから助かったのではない。ただ運が良かっただけです。

もし山で一度も雪崩に遭遇したことがなかったとしたら、勿論、「雪崩学」を応用したからでしょうが、本当は運が良かっただけです。

2005 年 9 月（2010 年 2 月加筆）

引用 参考 文献

本文中に挙げたものは除く

『決定版 雪崩学』 北海道雪崩事故防止研究会編・山と溪谷社

『ドキュメント雪崩遭難』 阿部幹雄・山と溪谷社

『複雑系とは何か』 吉永良正・講談社現代文庫

『擬似科学入門』 池内 了・岩波新書

山をめぐる七章

第一章 登山の費用

マスメディアとスポンサーから遠征に支援があった 20 世紀の登山界は幸福でした。

1982 年・日本山岳協会主催のチョゴリ遠征（注）は、総費用・約 2 億円。（81 年偵察費用・中国登山協会への諸費用支払を含む）2 億円ものカネが集まった時代でした。

幸福な時代は過ぎ、いま気の合った仲間と、商業公募隊に参加して海外と、その費用の全ては個人負担で、各種山岳会が主催する遠征に会からの支援がある程度。

そんなとき世間に話題を提供し資金を調達された三浦雄一郎氏はさすがです。

注. 中国側からの K2 に 6 名登頂。内 1 名が下山中に死亡。小西 正継・登攀隊長以下、社会人の精鋭を結集した隊。

『精鋭たちの挽歌』・長尾三郎・山と溪谷社・1989

『砂漠と氷雪の彼方に』チョゴリ登頂の全記録・小西正継・山と溪谷社・1983

三浦雄一郎 75 歳 エベレストにいくら

1970 年のエベレスト滑降では 3 億円集まったとか。（三浦氏がそう言っています）

2008 年、エベレスト登頂報道を見たとき、山もカネ次第、が正直な感想でしたが、その資金調達力、75 歳で登頂された気力・体力には敬服しかありません。チベットからのチョモランマ計画がラサの騒乱で仕切りなおしてネパールからと、予定外の出費。それにしても、いかほどの費用がかかったのでしょうか。

百名山にいくら

2007 年 7 月。百名山を 48 日で連続踏破した島津康一郎さん（神奈川県出身・屋久島でガイド業）。彼の HP にその行動日程がありますので興味ある人は検索してください。おそらくもっとも格安での百名山完結者でしょう。

海外登山にいくら

今日、日本国内の業者は当然、どこの国も遠征は大歓迎。現地業者に丸投げで海外登山が出来る結構な時代となっています。ネパール、パキスタンに多くある現地業者との交渉は日本から電子メールで可能です。中国も遠征歓迎ですが、受け入れの商業化はネパールほどではない。

「大衆の目を引きつけ自分のしたいことをするには、マスコミは一つの利用できる手段であった。しかし実際はしたいことをするといったものでなく大衆にかかわりを持った瞬間からそれは強制されたものになってしまう。私は多分プロが名声を求めるあまり陥りがちな罠にかかってしまったのだ。」

そんなとき、デイリー・テレグラフ雑誌社の編集長ジョン・アスディから特派員としてアイガー登攀の撮影と、報道記事の依頼を受けたボニントンは「これは仕事である」と自分に言い聞かせ、ハーリンに承諾の返事をした。

アイガーを舞台とした直線登攀は大衆の注目を浴び、頂上に立ったボニントンはその写真と報道でフォト・ジャーナリストへの道が開かれたのです。

ボニントンは頂上に至る2日前にヘリで頂上付近に行き、雪洞で待機し頂上へ向かうドイツ人とハストンの登頂シーンを撮影している。ボニントン他4人はこの雪洞で一夜を過ごし翌日頂上に立った。

正統派ボナッティ他が眉をひそめたこの登攀にボニントンも内心忸怩たる思いだったのか。1970年アンナプルナ南壁登攀でこのときの経験が役に立ったとあるが、筆致の奥にいささかの弁解が感じられる。

『地の果ての山々』クリス・ボニントン・山崎安治訳・時事通信社・1976

『冒険の達人』クリス・ボニントンの登山と人生 ジム・カラン・倉知敬訳・茗溪堂・2003

第三章 ラインホルト・メスナーと イエジ・ククチカの十四座

ブランドの高峰・十四座完結にメスナーは17年、ククチカは8年。登攀内容においても新ルート、冬季二座でククチカが勝ると評する人たちがいる。

確かに1980年エベレスト登頂以後メスナーの8,000mは、新ルート無し冬季は全て撤退と、ただ十四座完結という呪縛から逃れるためだけに登ったのかもしれない。で、あるがメスナーの十四座という発想とその完結が世界初であること。その登攀を文章で表現したことをみると、ククチカが勝るとはいえない。

更にこの2人の決定的な差は、ククチカは転落死した、メスナーは生き延びた、に尽きる。十四座を完結したククチカはメスナーを超えるべく、メスナーが敗退した難攻不落のローツエ南壁に挑み89年墜死した。メスナーとの競争意識が優先し彼自身の哲学がなかった。幼稚なその哲学は転落死となった。

イエジ・ククチカに登山報告はあるが彼自身の著作はない。登山行為で超人的記録を残したのに、思索で遺したモノはない。

メスナー自身の言を信ずれば 35 年間の登攀活動を通じて、一度も墜落経験がないという。凍傷以外大きな怪我も聞かない。危険回避の能力（勘）・技芸・運に優れていたのだろう。

ククチカは新聞や企業の支援を得て費用の心配なく山にいったが、メスナーは自力で費用を稼ぐため多くの著作（35 歳で 20 冊に及ぶ）を上梓した。（2010 年・65 歳で 70 点に及ぶ著作）

その著作中の異色作『死の地帯』—これは山行記録でなく遭難生還者たちの体験・事例集から、生と死のはざまではどのように反応し、何を考え、どのように行動するものであるかについて考察し、さらにメスナー自身の極限状況での幻視体験、薬物による意識の異常な昂揚を表現した作品であり、知るかぎり生還者の心理と行動に探検的考察をした唯一の本と言える。

『死の地帯』・原稿の一部は、1970 年ナンガ・パルバートから帰国し凍傷治療で担ぎこまれた、インスブルックの大学病院で入院中に書かれている。以後、多くの転落体験の事例を検証し 1983 年、日本で刊行された。

～1978 年・ナンガ・パルバート登攀中に感じたことをメスナーは～

「肉体が、生きたい、助かりたい、という束縛から解放された時、肉体は自然の摂理として、生きるための機能を自然に最大級に発揮する。衝撃に対しても、動物的本能として防衛機能が瞬時に発現しているのかもしれない。人間が人間でなく動物に還ったとおもえるとき、“超能力”を発揮するのではないのだろうか。

全てを放棄したとき、何かとてつもなく大きな存在に全てを委ねてしまったような不思議な安堵感がある」と、涅槃（安らぎの境地）に言及している。

ナンガ・パルバートの頂上に立ったメスナーはその時の感情を文章表現で試みるが「ぼくの知性ではこの時の感情をうまく表すことができなかった」と文章表現の限界を語っている。

『ナンガ・パルバート単独行』 ラインホルト・メスナー・山と溪谷社・1981

～表現者メスナーは、極限での体験を どのように 言語表現に還元させたのか～

メスナーは「これも登山費用を稼ぐため仕方ない」として、手袋をはずし特製の三脚を設置して自動タイマーで写真を撮り、登攀中に感じた内的体験を文章表現に引き戻

すため、食料や登攀具のすべてを残してもカメラとマイクロカセットレコーダーを、チョモランマの頂上まで運び上げている。

極限をいく登攀者は言葉で語れぬ世界を体験するが、メスナーはかなりの程度でその世界を言語表現に還元させた。登山行為を媒介にした文学で、この地点まで到達した作品は、あまりない。これによって彼の文章行為は絶頂に達した。

『チョモランマ単独行』ラインホルト・メスナー・横川文雄訳・山と溪谷社・1982

エスタブリッシュメント

第四章 既成勢力とマスコミに圧殺された登山家

メスナーの著『死の地帯』に、自殺～岩壁での故意の死について～という一節がある。表題は意表をつく岩壁での故意の死はなく、それに匹敵する悲劇的な死、たとえば。

ボナッティとヘルマン・ブールの見た目には「超人的」な成功のあとに、山岳界によって押し込められた出口なしの状況が、二人の死（ボナッティの場合は引退）を早めたとある。逃げ道のない孤立はどんな強靱な登山家をも殺しかねない。どんな理由からにせよ「追い出された」者は、ボナッティのようにはっきりした結論を出して山登りをやめてしまわないかぎり墜落する危険を冒す。しかしこれは自殺ではない。集団による精神的殺害である。

1954年、K2でボナッティ（24歳）は登頂隊員の酸素を荷揚げ中、ポーター、マーディの錯乱で気の狂った相棒と8,000mでビバークする羽目になり、翌朝マーディ1人の下山は無理と判断し無念の下降となる。

マーディの錯乱がなければボナッティも第9キャンプ（8,050m）に入り登頂の機会があったのだ。

登頂の夢を砕かれたボナッティは心の痛みから解放されるため1955年8月、プチ・ドリュエ南西壁をソロ・ビバーク5夜で完登する。

「5日間の激闘の末、私は山と癒着し登頂不可能な頂をめぐる永遠に闘うことが自分の運命であるような気がした。私は初めてプチ・ドリュエ南西壁を征服したのだ。これによって私の胸の中にあった精神的しこりが解けた。私は泣くことと笑うことが同時にできたのだ」。

一人の山で彼は行動の自由と自らが運命の支配者であるというすばらしい気分を満喫したのである。

さらに1965年厳冬季のマッターホルン北壁を単独で完登する。だが冒険をこのように極度まで追う者、およそ妥協を知らぬ者は誰でも批判・批評の標的になるのを避ける

れない。

通常は嫉妬深い同輩の批難の的になるのだ。ボナッティはこういう声をうまくかわし乗り越えるのが苦手だった。マッターホルン北壁を完登後「どんな登攀も行わない」と表明した。

K2 での挫折、やり場ない不満をブチ・ドリュウ南西壁、マッターホルン北壁に。そこで得た慰めは、しょせんたまゆらのものにすぎなかったのです。

彼を追いつめたさまざまな状況をおもうとき、孤立したボナッティの引退は悲しい。

ヘルマン・プールの場合「引退表明」は口に出さなかったが、チョゴリザでの転落死によって劇的に引退を実証した。

ナンガ・パルバート登頂からようやく体調回復したプールは、1957 年 4 人の小遠征隊を組織し未踏のブロード・ピーク (8,047m) を目指す。

この試みにオーストリア山岳会はプールが隊長なら、資金支援はしないと反対する。新たに出現したスターに既成勢力が不信と嫉妬をもっていたのだ。だが世論はプールに味方し妥協案としてマルクス・シュミックを隊長に選び 1957 年春、遠征隊は故国を出発した。

バルトロでのキャラバン早々に遠征業務をうまくこなしたシュミック。登ること以外は苦手なプールの間にリーダー権をめぐって争いが生じ、四人のパーティは二つに分裂しブロード・ピーク攻撃の時は、同じ山で出会った二組のペアにすぎなかった。

二つのパーティは、それぞれブロード・ピークに登頂したが、ベースに帰営してからも別行動のまま。シュミックとシュテラーはスキルブルム (7,420m) に（ベースから往復 6 日間で登頂）。二人がベースに帰ったとき、プールは隊長シュミックにガッシャーブルム基部に撮影にいったディームベルガーに合流する、と書いたメモを置いて出発していたが、行先はチョゴリザ (7,654m) だった。

『現代の冒険・上』クリス・ボニントン・1987・岩波に依拠。

ブロード・ピークの発案はプールであったのに、ことの成り行でシュミックが隊長となりプールに不満があったのだろう。シュミックの著『ブロード・ピーク』には、プールの体調はずっと悪かったとある。だが彼を支持した大衆の期待に応え、大登山家であり続けねばならぬ状況が、オーストリア山岳界既成勢力への反目、シュミックたちへの対抗心からプールは無理な行動をしたのだが、ここはいったん立ち止まって生き抜くため冷静であつたらと惜しまれる。

このことは冒険を売った植村直己と買ったマスコミ、そのマスコミに圧殺された1984年マッキンリー冬季登山での遭難や、ポーランド国民の過剰な期待と圧力、登山界の名声に負け、89年ローツェ南壁で墜死したイエジ・ククチカにもあてはまる。

メスナーの無酸素・ソロ・エベレスト登頂（1980年）に「2年前に登ったエベレストにまたいくなんて勇気の無駄遣いだ」との批判(注)に、メスナーは声高に反論せず、『チヨモランマ単独行』のなかで次のように述べている。

「批判文をじっくりと読ませて頂きました。貴方の主張はすべて正しい。だが、どのようにすればぼくの動機をわかっていただけるのだろう」。

勿論、わからせることなどできないマスコミへの対応を、メスナーは彼の「ことば」でかわしています。

注. ウイーンの週刊誌『急報』で、ライトナー（批判文の筆者）は「無酸素・ソロで登ることの意義はそういう登りかたでこの山がいつそう困難なものになっただけだ。しかしあえていわせていただけなら、私はそこに勇気の無駄遣いがあると思う。人間の勇気は山で無駄遣いされてしまうにはあまりにも貴重なものである」と記している。

1970年ナンガ・パルバート騒動(注)で、メスナーをとりまく風評・中傷に、彼が『死の地帯』に書いた「自殺～岩壁での故意の死について～」という一節は、いかなる圧殺にも屈しない、孤立を恐れぬメスナーの強靱な意志を示した文章で、1986年までの登山行為（14座）と、2010年のいまでも続く活発な文筆行為がソレを証明する。

注. 隊長ヘルリンコフファーとメスナーの裁判沙汰。メスナーは弟ギュンターを見殺しにして、自己一身の名誉欲のためあらかじめ計画していた、ナンガ・パルバートの横断（ディアミール・フェースの下降）を独断専行したという元隊員たちの憶測ほか、根深い論争は2010年のいまでも続いている。

余談だが ボナッティ、プールの二人は幼くして母親をなくし父親の手で育てられている。幼少のころから親に甘えず「自分のことは自分でする」として成年した。このような家庭環境に育った登山家は、わずらわしい集団登山より単独登山に惹かれるのだろうか。ディームベルガーも亦、幼くして母親をなくし父親の手で育てられているが、裕福だった彼に孤立の影は見ない。

『わが生涯の山々』 ワルテル・ボナッティ・山と溪谷社・2003

『現代の冒険・上』 クリス・ボニントン・岩波書店・1987

『植村直己の冒険』 本多勝一・武田文男・朝日文庫・1991

第五章 インターネットと生中継登山

ベースキャンプに衛星通信のウェブサイトを設置し、登山の状況を映像・動画・ブログ、メールマガジンなどで配信します「(注1)」。

登山の実況がグーグルとアマゾンが合併した(グーグルゾン「(注2)」)のような情報構築網が実現し、紙に匹敵する使用感をもつ閲覧ソフトが開発されたとき、大衆が参加したウェブ興行企画のような登山が現れるかもしれない。

遠征隊のウェブサイトに接続してくる多くの登山愛好者は、遠征の進行状況を捉えその進展に一喜一憂しているという現象である。

98年チベットのセプ・カンリに遠征したボニントン(注1)は、インターネット通信の練達者を隊に招聘し、ベースに衛星通信のウェブサイトを設置し「時代の流れに逆らうことはできない。テクノロジーと歩調を合わせてやっていかねばならず、それに振り回されるのではなく使い切ることだ」と語っている。

遠征隊のウェブサイトへの接続が有償となる課金システムができたとき、遠征資金調達の新方式となるかもしれない。

注1. 栗城史多・1982年生。自ら撮影した7大陸登攀の動画映像ネット配信を売りにして、遠征資金を集めている。

注2. メディアの動向を予測したネット上の短編映画で紹介されたが、まだ実現していない。

第六章 山を語るのは 本・映像・ウェブサイト

本は いま――

誰が、どのように山に登ったのか。その記録・状況・背景などの大衆に対する表現は時代とともに大きく変わった。それが「本」のとき書き手が変えたのではなく、山の周辺状況の変化が書く内容を変えさせたのです。

登山の黎明期やアルピニズムの時代に上梓された本の多くは絶版となって、古書目録に名残をとどめている。

シプトンやティルマンの探検登山記。串田孫一、大島亮吉に代表される叙情と思索を中心とした作品。初登攀の状況をなまなましく表現した松本竜雄・吉尾弘などの著作も過去を回顧する古典となり、海外の高峰も登り尽くされて、それに関する出版もない。『山の旅』の編者・近藤信行氏は、もはや我々には古典があれば充分なのか、と現代を慨嘆する。

未知・未踏峰への好奇心が盛んな時代から、好奇心の対象がなくなったのと時を

同じくして、アルピニズムやパイオニア・ワークが死語となり、マラソンを考える事に意味がないのと同じ程度に山を考えることに意味がなくなった現代の登山。

たけうちひろたけ
竹内洋岳や山野井泰史他の先鋭登攀者たち。百名山や裏山と多くの山に関するホームページが開設され、海外・国内の登山報告がデジタルと映像で閲覧できるようになったとき。山を語るのに、本が時代を代表するジャンルではなくなったともおもえる。

映像は いま——

1950年、人類初の8,000m（アンナプルナ）16ミリ映像と講演は、7年足らずの間に欧州各地で700回以上開催され、その入場料収入は 仏・ヒマラヤ委員会のパタゴニア、アンデス遠征、マカルー（8,470m）遠征の資金となりました。

手足にホータイを巻いたエルゾーグやラシュナルの解説は圧倒的な好評を博したのです。途中から商業用35ミリに。テレイのスキー滑降シーンなども加えている。

アンナプルナ映像のあと（星と嵐（注1））や国威発揚のような当時の世相が後押して作られた記録映画に、英国のエベレスト、日本のマナスル、中国のチョモランマなどがあったが、このような大記録映画はこの三作品で終わり、8,000mに大衆を動員する魅力がなくなったあと、登山愛好者を対象として、『花嫁の峰チョゴリザ（注2）』、ボニントンやディームベルガーなどの遠征記録映像と講演が巡業形式で開催されたが、1970年代で終わっている。

注1. ガストンレビュファール監督の岩壁登攀・映像 1955年・仏。やたらと難しいルートの連続。

アブミを駆使してオーバハングを乗越すシーン。アンナプルナ遠征から帰国し当時ヨーロッパ・山岳ガイドのスターにして、映像でもプロだったガストンレビュファールの出世作。

1957年大阪で公開された会場は超満員。スーパーアルピニズムと人口登攀の是非が論議された時代。1967年にも来日。映画『天と地の間』が公開される。

注2. 京都大学学士山岳会・チョゴリザ遠征隊記録映像・日本映画新社

いまテレビで放映の「百名山」シリーズは、映像に語らせる——つまり人が山を語る番組でなく——登山行為と山の風景を紹介するもので、たとえば、

『白夜の大岩壁』

2007年・NHKで放映されたオルカ登攀のドキュメンタリー。クライマー山野井夫妻の登攀シーンに終始した映像で、彼が著作で語る登攀時の心的状況にはほとんど触れ

てない。

登攀シーンだけが山ではない。その意味で極限状況での人間の心理と行動を描いた映画。『運命を分けたザイル』について感想を書きます。

『運命を分けたザイル』2003年・英国 アンデスでの実話を材とした映画

原題: touching the void

邦題: 死のクレバス・アンデス氷壁の遭難。J・シンプソン 岩波・2000

映画: 運命を分けたザイル

【ストーリー】1985年6月。英国人クライマー、ジョー・シンプソンとサイモン・イエーツは、アンデス山脈のシウラ・グランデ峰(6,600m)西壁を初登頂する。下山途中に足場が崩れ滑落したシンプソンは片足を骨折し、パートナーのイエーツは互いの体をザイルで結び救出を試みるが、バランスを崩したシンプソンは垂直の氷壁で宙吊りとなってしまう。落下から1時間、上で確保しているイエーツ。このままでは2人とも死んでしまう。イエーツは運命の決断を迫られる。宙吊りだったシンプソンは、イエーツがザイルを切るのではないかと――

イエーツはザイルを切ったのだ。シンプソンはそのままクレバスの底にたたきつけられた。幸運にも生きていた彼は、クレバスの底を這って脱出に成功しベースキャンプに辿りついた。2人を繋いでいたザイルから解放されたイエーツも生還した。BCが撤収される1日前だった。

―― ザイルを切ったイエーツ 切られたシンプソン ―――

そこにはパートナーへの猜疑、死への恐怖など、極限状況における人間心理の葛藤がある。

登攀のリアルな映像表現、事故発生と極限状況の映像再現。原作者・ジョン・シンプソンと、パートナーのサイモン・イエーツも出演し見ごたえあったが、ザイル切断にいたる極限状況の心理は、映画では描き切れていない。

映画は失敗作ではない。原作に問題もなかった。

限られた映像と表現しかできない映画というジャンルに問題があったのだ。

事は生死に関わる問題だったから、パートナーへの猜疑、複雑な心理の葛藤、ザイル切断者が生涯背負う十字架などに切り込む手法 ――― ザイル切断という核心部の心理の葛藤に、第三者の想像と意見を加え、それをナレーション、字幕で挿入し、心の深層に鋭く迫ったとき、山岳映画の傑作となっただろう。

映画巻末で、ちらりと「この登山は英国山岳会で問題となった」という字幕があっ

たが、イエーツの行為（切断）に山岳会の議論（批判、非難、容認）は、結局つぎのように幕引きされたのではないか。「とにかく二人とも無事だった。もう話し合いはやめよう」。

touching the void という題名に秘められたシンプソンの複雑な心情は、語られぬまま。

～語られるべき 核心部の表現は 映画という手法では 無理なのだろうか～

ウェブサイトは いま——

山を語るのに本や映画が時代を代表するジャンルでは なくなっただとおもえるとき。現代の登山では山を語る主役はインターネットであり、それが本や映画にとって変わるといわれているが果たしてそうなるのだろうか。

山では無いが、ジャーナリストの 魚住 昭 氏がウェブマガジン「魚の目」を始めた。責任編集は魚住さん。多彩な人材の論文、エッセイが無料で読める。毎月2回更新し週刊誌一冊分はあるボリュームだ。デジタル的＝伊藤洋平氏（「岳人」創刊者）が現れて、アナログ誌『岳人』を侵食する一などは妄想でしょうか。

確かに行動速報はネットが優れている。なにしろエベレスト登頂映像がその日のうちにテレビ・パソコンで見られるのだから。だが登山は、登頂映像がその登山の全てを語れるようなものではない。

戦争の悲惨や、アフリカの餓死を表現した一枚の映像、ここでは映像が全てを語る。（勿論、その映像に込められた——たとえば政治的思惑などについて、もう少し深く考える事が大事ですが）

多くのウェブでは登山の行為や映像伝達が先行し、個人の考え方、哲学など無関係である。記録は残せても、心を残すだけの思索は感じない。

それに、である。山と人を語る、出版、ドキュメンタリー映像、劇画は 採算がとれぬと作る人は減るばかりだ。

～そこに氾濫する山の ウェブ～

カーナビにしたがって車を走らせる運転と同じく、餌づけされた家畜のように一切の思考を放棄して、他人のウェブから情報を知り、それに従い山に行く。

それでも山は山、頂上は頂上、ならそれもいいが、ここには山登り固有のロマンや、地図を調べて想像する楽しみはない。

情報につぐ情報の検索に時間を費やすばかりで何かを考える時間など、現代の登山ではもう意味がないのだろうか。

インターネットは安価・利便・速度では本や映像より優れているが、ウェブの記事・内容がいま以上に進化するというのは幻想である。誰にでもウェブ開設の自由があるということは、プロ野球に アマの腕自慢が混じってする野球 となってその内容は退化する。

インターネットは山を語る便利な脇役ではあるが、思考基準から主役ではない。

文章や映像で表現できぬ 自分の知覚の心象風景は、どこまでも自分の心象風景であり、自分にとっての心象風景である。

そんなものをウェブページで表現している人がいたら、ありもしない感動をあるかのように偽って表現しているか、自己顕示の演技をしているだけです。

第七章 山の世界に残されたパイオニア・ワーク 合作ドキュメンタリー

過去の膨大な著作で書き尽くされた山は、もはや「語るべき対象」がなく、古典名著の新訳・復刊や、往年の登山家の懐古録のような出版しかありません。(私家版などは除きます)

いまだ手つかずの対象と次元。それは極限状況から生還した登攀者たちが、生と死のはざまで、なにを感じ、なにを考え、どのように行動したのか、についてであり、そこに 探検的考察を試み、語りきれていない未知の分野を文章で表現する。「書く」ことでのパイオニア・ワーク

—— 合作ドキュメンタリー について書きます。

メスナーの異色作『死の地帯(注1)』に、この探検的考察を感じますが、ほかに読んだ生還者自身の作品は読み方が悪かったのか。どうもなにかが違うように感じるのです。「なにが違うのか」 当たり前だが生還についての記述は、極限状況からかなりの日数をへて書かれたものです。

その時の心的状況を、記憶をたどって正確に書こうとしても、悲惨なビバークをした

時と快適な机の前という状況はまったく違い、いつのまにか事実から離れて浮遊拡散した語りがどうしても多くなる。

『垂直の記憶』(注2) 第七章・生還 — ギャチュンカン・北壁の記述は、山野井夫妻の語りが交互に挿入される手法が取られていて事実には迫るが、現場で感じたであろう極限状況の心理は、語りきれないように感じる。

雪崩に撃たれ「耐えてみせる。絶対に死なないぞ」さらに雪崩が2人を襲い、飛ばされた妙子をロープで支え「妙子、止めるぞ! 止めるぞ!」……などの文章表現は素晴らしい。

生き残ることに必死の状況であれこれ思索したなどを書いていたら、それは事実ではない。だが作品の構成上、取捨されたかもしれぬ山野井夫妻の語りに、こぼれ落ちを感じるのである。

この生還を山野井夫妻に取材して書かれたプロ作家・沢木耕太郎のノンフィクション『凍』。ここに語られるのは、すさまじい生還状況の詳細な記述であり、プロ作家の筆力はさすがだ。

それでも二作を読み比べると極限状況の心理の考察については、ノンフィクションという制約から作家自身の感想・意見・解釈を表面に出すことができず、事実によって本質を描く——事がプロの作家にして、いまの表現方法(ノンフィクション)では限界がある。

その理由はノンフィクションのときその場に居合わせなかった作家は、当事者から部分的事実だけをきいて作品を書くのだから、正確な全体的事実を描くのは難しい。

むしろこぼれ落ちた多くの事実を作家の鋭い想像力や直観力で補う小説のほうが、本質にちかづくのではないか。

山ではないが沢木耕太郎が実父の最期を看取った(無名・幻冬舎・2003)は、1人称で彼の感想・意見・解釈を、独自の手法と文体で表現した作品で、死にいく父の実像に迫っている。

事実によって本質を描くことについて、ノンフィクションか、フィクションか、は(注3)を参照いただくことにして、本文ではこれ以上ふれません。

メスナーは「遠征に関する本を書くということはおそらくすでに在ったもの、消すこ

とのできない体験をありのままに描きだし個人的に感じたものを 1 人称の形式で差し出すことだ」としているが、これは登山家にして思索家・文筆家だったメスナーにしていえることです。

だが 1 人称の形式に善意であったとしても隠された事実がないとはいえない。むしろ 1 人の報告・考えだけで語るのではなく「あの人、この人」の感想・意見・解釈を織りまぜた表現手法のほうが、本質に迫れるのではないか(注 4)。

ここでは特に『垂直の記憶』・『凍』の事例を取り上げましたが、これ以外の作品にみる極限行での語りきれていない心理の探検的考察についても同じです。

注 1. 『死の地帯』・山と溪谷社・1983。過去の文献から転落体験の克明な分析をし、自己の体験と他者の体験から極限状況での考えや、生と死のハザマでの人間の心理と行動、幻視体験や意識の異常な昂揚について語る。

注 2. 『垂直の記憶』・山野井泰史・山と溪谷社・2004。2002 年ギャチュンカン (7,985m) 登頂・下降中 雪崩に遭遇し、奇跡の生還を書いたノンフィクション。

注 3. 『事実とは何か』・本多勝一・朝日文庫・1984 (277 ページ・事実と表現)

注 4. 『生存者』ピアズ・ポール・リード・平凡社・1974。『アンデスの奇跡』ナンド・パラード。ヴィルス・ランス・山と溪谷社・2009。この 2 作は 1972 年アンデス山中に墜落した旅客機から生還した人たちの実話を材とした作品だが、多くの時間をかけて生還者とその家族に取材した内容を織りこみ書き上げた本で、ノンフィクションというより実話を材としたフィクションともいえる。生還者は語り、構成・文章表現はプロの作家という手法です。

合作ドキュメンタリー

だれが読んでもわかる日常の言葉で語り、書かれていること。

生還記は体験をありのままに描き 1 人称の形式で書くのが普通だが、ここではそうではなく生還者自身が当時の状況を正確に表現し (あるいは語るだけでも良い)、生還者以外の登山家・小説家・心理学者・哲学者などが想像・意見・解釈を語る。いわば合作ドキュメンタリーのような作品が、もつとも事実と本質に迫ると考えられ、ここで探検的考察の文章が表現されるのではないか。

部分的事実と想像・意見・解釈を総合した構成と表現は、登山家にしてモノ書きなどという人がいたらピッタリの存在です。

部分的事実の表現と、想像・意見・解釈の部分の表現に明確な境界を設ける、設けない、は書き手の自由です。

登山行為に限るときパイオニア・ワークは死語となりましたが、合作ドキュメンタリ

一は山の世界に残された、「書く」ことでの パイオニア・ワークかもしれません。

あとがき

探検的考察の方法としてどのような手段がよいのか。そのために手段として「ドキュメンタリー、ノンフィクション、フィクション、評論、ルポ、座談編集」とさまざまな方法が選べるのですが、ここでは表現の方法として合作ドキュメンタリーという方法をとりました。

これが文章表現でどのようなジャンルに属するのかよくわからず、他に相性のいい言語（合作論考、生還者との対話・・・）なども考えましたが、どうもしっくりこず仮の言語として合作ドキュメンタリーと表現したこと、ご容認ください。

「documentary」は [虚構によらず事実の記録に基づく作品]・大辞林の意を参考としました。

2004年5月（2010年3月加筆）



小 川 守 正 (昭和17年・旧理)

昭和19年秋、私は海軍予備学生（見習士官待遇）として相模野海軍練習航空隊にあって、朝6時起床、午後10時消灯まで、銃剣術、軍刀術、格闘技、駆足、武装マラソンなどの猛訓練にヘトヘトで国家の前途も戦況にも無関心。ただひたすら耐える日々だった。そんなある日突然『特別外出3日、各人・親家族と最後の別れをしてくるよう。国鉄の乗車券は支給する』との思い掛けない通達があった。

私は3か月前に親戚一同集まって盛大な壮行会をしてもらっていたので、何を今さら最後の別れでもあるまい、それよりも最後の山行をしよう同志を募ったところ3人の応募者があった。私以外の3名は全く山の素人だったが『今生の思い出に日本アルプスとやらの登ってみようか』と軽い気持ちだったのだろう。

海軍入隊中だから山の道具などなかったが、軍用雑のうに将校用のフード付きレインコートと軍用乾パンをつめ込んだだけの荷を背負って、故郷とは反対の方向に出発した。

もちろん、この時局この季節に登山者など1人もいない。島々から中の湯まで一日一本の木炭バスがあるきりだった。このバスも出発して一時間もたたぬうちにエンコしてしまい、それからバス道を歩いて夕方やっと上高地に着いた。

どの小屋も旅館も閉まっていたが五千尺にだけ番人が一人いた。時ならぬときに突然現れた4人の海軍士官に驚いていたが、心よく無料で泊めてくれた上、翌日早朝6食分のお握りも造ってくれた（米は海軍が帰郷用に支給してくれた）。宿帳には相模野海軍航空隊山岳部と書いたら、番人の爺さん『海軍にも山岳部があるのですか』と感心していた。

第2日目、日暮れ前に奥穂高小屋に入った。小屋はきれいに掃除されていたが、食料は勿論のこと寝具もなかった。有難いことに少量の薪と少々変な味だが雨水がドラム缶に溜まっていた。お握りと白湯の夕食をすませ海軍将校用のレインコートにくるまって寝た。3人の戦友は『こんなひどい旅ははじめてだ。来るんじゃない。小川に騙された』とボヤいていたが今さらどうにもならない。

翌朝、（といっても寒さの為殆ど寝られなかった）早く起きて、変な臭いのする白湯と握り飯で朝食をすませ出発をする。

山が初めての3人は小屋裏の岸壁にビビったが、なんとか一人ずつ引っ張り上げて奥穂高3190メートルの頂上に立つことができた。

私は、これが今生の山の見収め、数々の山行、山岳部山岳会の沢山の友や先輩後輩の思い出に浸る。3人の戦友は『山には木があるはずなのに、この山は岩ば

かりだ。何故だろう』すこぶる次元の低い会話を交わしていた。

かくして最後の山行きは成功したが、それからが大変だった。山を降り徳沢から、徳本峠を経て島々まで強行軍をやった。中の湯までのバスが当てにならないと思ったからである。もし3日以内に帰営できなかったなら少尉任官がならず4等水兵に落とされるのではないかとの恐怖心だった。今の若い人にはわからないだろうが、旧軍隊特に海軍における士官と兵の差別は天と地よりも大きなものだった。

4人は死に物狂いで歩いた。そして何とか3日目の夜遅く航空隊に帰着することができた。だがそれから大変なことになる。私以外の3人が歩行不能状態になった。大学出たての若い軍医は『外傷もなく捻挫もないのに何故歩けないのか』と首をかしげるばかりで、とうとう軍医長まで出てきて糾問され奥穂高息がばれてしまった。

隊長の鈴木少佐から『何だ！親と最後の別れの温情だったのに、日本アルプスとは驚いた奴だ、それにしても一番しょぼくれの小川だけが元気に歩いとるのはどういうわけか』詰問され閉口した。

それから3ヵ月後4人とも目出たく練習航空隊を卒業することができた。私は空母搭載艦上爆撃機の724空航空隊配属の荣誉ある命令書を頂戴した。

当時海軍航空隊は空航空隊・基地航空

隊・練習航空隊の3区分があり、空航空隊は飛行機を保有し（パイロット・偵察・塔乗整備兵）と若干の士官（総務・主計・医務・整備）よりなる戦闘部隊であり、基地隊は総務・主計・整備・医務・高射砲隊などよりなり飛行基地（飛行場）にあつて移動してくる航空隊の戦闘を支援し補給し、飛行場の警備と防空を担当する。敵が上陸してくれば全員陸戦隊となって戦う。太平洋戦争で南方の島々で玉砕全滅したのはこの基地航空隊である。

相模野練習航空隊を卒業した309名の行先は、空航空隊に30名、基地航空隊に100名、残り269名は練習航空隊で再訓練という厳しい結果になった。

私の成績は250番くらいで練習隊残留と思っていたのが意外や意外、空航空隊で空母搭載の艦爆隊とは光栄の至りだ。それまでの疲労も劣等感も吹っ飛んで意気揚々と元気回復した。

どうやら、休暇を返上して日本第2の高峰奥穂高岳登頂隊のリーダーをつとめたことが高く評価されたようだった。3人の戦友には気の毒したが、その後63年刊にわたり年賀状をくれるから、満更悪く思ってるようでもないようだ。

以上、部員4名、存在期間5日、登山記録は秋の奥穂高岳（3190米）登頂だけだが帝国海軍航空隊に唯一存在した山岳部の記録である。

（724空航空隊に赴任した後の話は次号のお楽しみ）

安井 正 (昭和 40 年経)

毎日が日曜日の暮らしになるとだらしなくダラダラしそうな自分が想像できたので、毎朝の 8 キロ～10 キロのウォーキングと毎日の三度の飯作りを日課と決めた。以来 5 年余り何とか日課は続けてこられたが、息抜きは時々の飲み会にバイクでのツーリングや JAZZ 鑑賞ぐらいで、我々の年代に大事と言われる地域の人々との交流や世話役といった仕事とは無縁だった。日本の岬巡りも昨秋の九州一周で完了し、今度は日本の名瀑巡りか棚田巡りか宿場町巡り等々どうしようかネットで調べていた。

年が明けてからカンサン、井本君、柏君と鶴木さんを見舞いに西大寺へ行った。その時柏君から「雪見会」へ一緒に行こう、雪を眺めながら酒飲むだけでも」と熱心に勧誘された。昔鶴木さんが前田館へ行った時、車の雪下ろししかせず、退屈だった話や私も 67 歳、かつ人並みはずれて運動神経が鈍い事を自覚しているだけに乗り気ではなかったが、「道具はレンタルできるし、家まで迎えに行くぞ」なんて甘言に乗せられ一歩踏み出した。

「雪見会」

スキー板は飯田さんが貸してくださる(結局頂いた)。短く幅が広くて扱い易そう。塩崎君に案内してもらって靴を借り

に。なんとガチガチでプラスチックの箱みたいで歩きにくい事この上なし。

四十数年ぶりのスキー場はグレンデにスキーヤーが少なくリフトほか乗り物が並ばずに乗れる。昔リフトに乗るまでが大変だったのにえらい変わりよう。緩斜面を選んでちょろちょろしていると雨宮学校に呼んでもらう。びびって前傾姿勢がとれず、太腿前部が痛くて痛くて・・。

翌日は「一度スクールに入れ」という助言により、午前午後 2 時間づつ計 4 時間、偶々マンツーマンで休む間なく、ひたすら斜滑降半制動回転の繰り返し。姿勢もまだまだ悪く今日もフラフラで帰還。斜滑降一つとっても谷足加重、谷足と山足を離さない等関係なく肩幅くらいに足は開き進行方向を向いてすっと立てと。昔習ったより楽なはずがさっぱり上手くいかない。

「雪見会」は解散したが、関学の方々のお世話で後二日間「白馬五竜」と「八方尾根」で滑る。正しい姿勢がとれないので体の節々と太腿が痛みっぱなしの数日間が過ぎた。帰宅後も体の痛みは三日ほど取れなかったが、「もう懲り懲り」とはならず次の機会を待つ気持ちであった。

久し振りの雪山の景観、雪の上を滑る感触、大勢での宴会、少々節々が痛むが

心地いい疲労感までもが今まで味わった事のない充実感だった。すると高遠合宿に空きが出来たので参加が出来る事となった。

「高遠合宿」

2月初め、柏君の世話になり一路高遠へ。「木曽福島」へ行くも寒波襲来し激しい吹雪で新米には誠に厳しい状況だったが稼動しているリフトを利用して斜面に慣れようと頑張ってみた。

翌日は快晴！「鷹山ブランシェ」へ行く。見晴らし最高、雪もいい。スキーは相変わらず急斜面にびびって全く皆についていけないが気持はいい。

この合宿の「売り」の一つが大関シェフの料理との事。十数人分の料理を作るのはそうそう巧く出来ないと思うがすごい一言。焼酎が体の隅々に沁みこみ酩酊。雨宮さん、塩崎君から次回「雨宮山荘」「雫石スキー行」のお誘いを受け二つ返事で同行させてもらう。

「雨宮山荘」

二月下旬「雨宮山荘」をベースとして「木曽福島」「富士見パノラマ」で滑る。

両日とも快晴、へたなりにも気分はGOOD。時々恵昭君の流れるような滑りも見ることができた。だいぶ斜面への恐怖心は薄らぎ、体の痛みも軽くなってきた。

「雫石スキー場」

三月初め飛行機で「雫石スキー場」へ。三ヶ月前には想像も出来なかった事が実現していた。

一日再びスクールに入ったがここでも若い女性インストラクターと1対1で絞られる。他の時間は岡さん（KG・OB）、雨宮さん、塩崎君の四人でよく滑った。急斜面あり、無圧雪地ありだが必死で三人を追いかけた。この頃はもつともつと滑っていた気持ちとなり、時期的に今シーズン最後のスキーと思ったので一段と気合が入った。

「前田館」

帰宅後暫くして雨宮さんから「今年は雪が多くて未だ滑れるから樽池高原へ行こう」と誘っていただき四月初め、雨宮さん、雄さん、塩崎君の四人が前田館にそろった。ところが樽池高原のリフトは上部の木の森、はんの木の二本のみで雪もただただ板が言う事を聞いてくれず、半人前の私には手に負えない。雫石の感触は吹っ飛んでしまった。

翌日は「白馬47」に向かうもガスで視界ゼロ。怖くてかなわない。午前で切り上げ温泉でゆっくりして、前田館でゆっくり酒を楽しむ。スキーの後はなぜかアルコールが良く沁み込む。

翌日は昨夜来の雪が少し積もり天気も上々、再び「白馬47」へ。冬並みの雪質で景色も素晴らしく気分よくして帰途につく。今年の冬が待ち遠しい。少々の斜面でもこけず、疲れ知らずのスキーを身に付けたいものである。

冬の間、寒さに堪えてバイクツーリングする酔狂さを持ち合わせていないので

スキーの楽しさを知った喜びは大きく、
背中を押してくれた柏君に多謝。それに
しても四十数年間のスキー環境の変化の
大きさに驚く。道具にしろ、滑り方（道
具相応？）にしろ、リフト・ゴンドラな
ど設備にしろ宿の数、豪勢さなど素晴ら
しさは目を見張るが、残念ながらスキー
人口は減っているようで、リフトは並ば

ず、ゲレンデ正面の宿でもクローズして
いる所があるし、スキー場の閉鎖すら見
受ける。

皆さん雪遊びをしましょう。どんくさい
安井が楽しんでるんですから大丈夫です
よ

今どきのカービングスキーは。



昭 56 理 山本 恵昭

昨年の秋、神戸大学と中国地質大学が合同で行ったチベットのカンリガルポ山群学術登山隊に参加しました。ひょんなことから、雨宮さんから熱烈に声を掛けていただき、平井先生の推薦を受けて参加することになりました。そのあたりの経緯については、大森さんが「山嶽寮」64 号に書いて下さっています。また、遠征の詳しい内容は、神戸大学山岳会の「山と人」18 号に報告されています。ここでは、1 年ほど経って、また違った角度から感じたことを思い出しながら書き連ねてみました。

遠征を終えて

このたびの遠征では、中国地質大学の若手メンバー2 名と神戸大学の若手メンバー2 名が、未踏の山頂に初登頂した。このカンリガルポ山群における世界で初めての登頂成功である。そして、全員が無事に下山帰国することが出来た。この結果から見るとこの遠征は大成功であり、その成果は新聞やテレビにも大きく取り上げられた。しかし、正直に言うと私の心は達成感や充実感で満たされてはいなかった。下山後、しばらく続いたお祭り騒ぎ一辺倒に違和感さえ覚え

た。なぜだろうか。そのわけを1 年かけて整理してみた。

ひとつは、この遠征が自分の山登りではなかった点にあると思う。このカンリガルポ遠征は、平井先生をはじめとする神戸大の方々が長い年月をかけて練りに練った企画の中で実行された。私がこの遠征に参画した時にはもうすでに目標の山も決まり、タクティクスの根幹は決まっていた。「山と人」18 号に副隊長の山田さんがクーラカンリ遠征において満足できなかった理由について書かれているが、それと全く同じことを私も感じた。

登山には色々な魅力があるが、やはり最も面白いのは、漠然とした無から自分なりの形のあるものと創り上げていくことにある。一から作り上げたものでないと自分の山登りではない。同じ海外登山でも、若い頃独りでペルーやパキスタンを訪れ、試行錯誤しながらすべて課題をクリアしていった山登りの方がはるかに面白いものであった。

もうひとつは、登攀リーダーとして若いメンバーを高いリスクにさらしてしまったことにあるように思う。アタック隊の矢崎と近藤が登頂に成功した日、サ

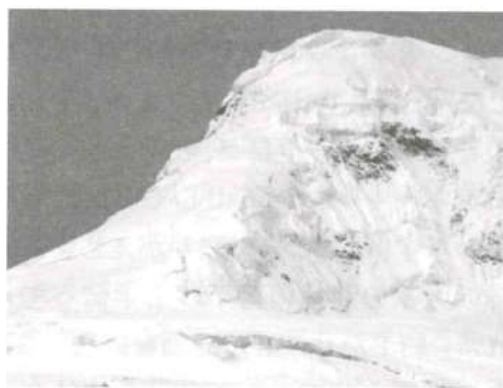
ポート隊の私と石丸は、日も暮れた中で下山中の2人をC3から迎えに行った。そのとき出会った彼らは、常識では考えられない状態だった。彼らは、我々のヘッドライトの灯りを頼りに下山していた。我々も、上部に見える灯りの所に2人がいると思って登っていった。すると急に暗闇に人影が現れて、びっくりした。それは、近藤だった。彼は、ヘッドランプを点けもせずに行動していた。近藤の後ろの明かりのところに矢崎がいるはずである。近藤の後ろに続くロープを目で追いながら登っていくと、その先は結び目となって雪面に転がっていた。そこにいるはずの矢崎は、ロープをはずしてさらに上部にいた。どの辺りからはずしてしまったのであろうか。C3周辺は雪原となってクレバスはほとんど無いが、そのすぐ下にはヒドンクレバスが走り、C2への上山中、先頭に行く石丸は何度も踏み抜いていた。山頂への急な稜線にもいくつかのクレバスはあったはずである。2人がそれらに落ちなかったのは、幸運としか考えられない。彼らは、すでに高度障害で冷静な判断ができなくなっていた。

遠征準備の会議中、偵察隊に参加した中国隊の気力実力に不安があると聞かされていた。しかし、今回の中国隊には、チョモランマをはじめとするいくつかの8000m峰の登頂経験者を含む若くて強力なメンバーが組み込まれていた。す

でに高所順応ができている彼らにとって、問題は荷揚げタクティクスと未知の山でルートをとるかだけであった。それに対して、我々日本隊は一からの高所順応が必要であった。実際、BC（ベースキャンプ：4320m）からABC（アドバンスベースキャンプ：4660m）までの標高が低い第1セラック帯では、日本隊が主体的にルートを開き行動していた。しかし、C1（4890m）から上部の第2セラック帯でのルート開拓とフィックス工作、C2（5680m）へのラッセルは、そのほとんどを中国隊の若手メンバーが行ってくれた。我々は、その高度に荷物を持ち上げることで精一杯だった。

11月5日、中国隊5名はC2から直接アタックし、そのうち2人のチベット人メンバーが登頂した。

我々はC3：5910mを建設して11月7日に近藤と矢崎がアタックしたが、この時点で十分な高所順応はできていなか



ロブチンにアタック中のデチンとダンタ

った。また、古い地図から 6703m と推定していた標高が、実際山頂での GPS データでは 6805m と 100m ほど高かったことも影響が大きかったと思う。彼らの頑張りで登頂は果たしたものの、無線機から聞こえてくる彼らの声はだんだんと危険な状況を伝えてくる。我々も高所順応が充分でなかったため、あまり上部までのサポートは不可能であった。一時はもうだめかと思うこともあった。ロプチン峰は、未知ではあるが高度な登攀技術を要求される山ではなかった。結果的に、日本隊の高度に対する対応が最も大きな問題であった。

中国隊と我々の関係は良好であった。ストレートな井上隊長と粘り強い山田副隊長の組み合わせは高い交渉力を発揮していたし、中国隊の董隊長の誠実な姿勢も評価できた。共同で荷揚げをし、C2 では中国隊のメンバーが我々のテントに泊まったりもした。日本隊のアタック時には、中国隊の他のメンバーが C1 へ下山したにもかかわらず、登頂者のデチンとダンタは緊急事態に備えて C2 に待機してくれていた。また、中国隊の若手メンバー全員が、我々より一足先にデポキャンプに下山していたにもかかわらず、ABC まで登りかえして日本隊の大量の装備の荷下げも手伝ってくれた。約 1 か月の登山活動を終え、お互いに仲間としての信頼関係と築くことができた。彼らがいなかったら当然この

地域への入域は困難であっただろうし、登頂まで至らなかったかもしれない。

しかし、知らず知らずの間に高所順応が完了している中国隊のペースで後半の登山活動が進んだことが、リスクを大きくしてしまったことも事実である。すべてが順調にいつているようで、大きな落とし穴があったのだ。合同登山の本当の難しさがそこにあるのかもしれない。もう一度同じような山登りをしたら、誰かメンバーを失っていても不思議ではないと思う。

「海外遠征でめったに無いチャンスを生かすには、イチかバチかはしょうがない」そう言う人もいるかもしれない。命がけで自分の人生のすべてを山に賭ける人もいるのだろう。しかし、私はそうではない。山に命なんか賭けてはいない。今回、自分でそれがよく分かった。この遠征で、もし 1 人でもメンバーを失っていたら一生悔いだろう。C3 建設後、アタック隊の近藤と矢崎を残して C2 へ戻る時、2 人の表情に違和感を持った。この遠征のすべての期待を背負って、気負いすぎているように感じた。思わず、「絶対に死ぬなよ」そう声をかけて C2 へ戻った。「登頂なんか、命を賭けるには値しない」その時、私はそう思った。

この遠征で面白かったことは、若手メンバーのめざましい成長に立ち会えたことである。日本隊メンバーは、井上隊長・山田副隊長・私という 50~60 歳台

の中高年メンバー3名と、30歳台の矢崎・20歳台の近藤・19歳の石丸という若手3名の構成であった。沈殿日などにはややもすると中高年3人組から若者3人へのお説教となることも多かった。彼らにとっては頭の痛いことだっただろうと思うが、ある程度それを素直に受け止め身につけていくてくれた。

まだ登山活動の初期のある日、第1セラックのたいしたことも無いクラックで、彼らが面倒になってフィックスロープにハーネスのカラビナを掛けずに行こうとした。私はそれが気に食わず、その夜テントできつい口調で叱ってしまった。後日、C3C2を撤収しC1へ下る途中、第2セラックで矢崎がバランスを崩してクレバスに転落した。この時、彼はしっかりとフィックスロープにハーネスを繋いでいて事なきを得た。もし、私とのコンテニューアスロープだけであつたら、無事に止めることができたかどうか。彼はアドバイスに忠実であつたおかげで命拾いをした。

19歳で参加した大学生の石丸は、やる気充分で吸収力が高くトレーニング山行でも着実に力をつけていった。体力もあり、遠征では当初後方で黙々と荷揚げを繰り返していた。その彼が、ある日「ぜひ山頂に行きたい」と言い出した。「その思いは分かるが、現状ではそのチャンスは巡ってこない可能性が高い」と説明すると頭では理解しながらも納得

はできない様子だった。いよいよC3を建設し、アタック隊を残してC2へ戻る時、さっきまで晴れていた天候が急変しトレースが消えてしまった。登りではあれほど元気だった石丸は急にペースを落とし立ち尽くすことが多くなった。先頭を行きながら、C2へのルートが全く読み取れないらしい。仕方が無いので先頭を交代し、わずかな雪面の乱れを読み取ってC2へ戻った。それから彼はもう「山頂へ」とは言わなくなった。彼にとって、自然から学ばなければならない課題がまだまだ沢山あることを悟ったようである。

大学院生の近藤には、「山でも先生をしていましたね」と言われてしまった。自分では元々教師っぽくないつもりであつたが、言われてみればそうかもしれない。実際には、デコボコ三兄弟の親父のような感覚になっていたのであるが。

甲南山岳会と神戸大学山岳会

若い頃、甲南山岳会の活動から離れていた。年会費も払わず行事にも参加しなかった。ストイックな山登りに憧れ、甲南山岳会のサロンのような雰囲気が好きではなかった。しかし、私自身がある程度歳もとって、また、年配の先輩方と山に行くようになって考え方が徐々に変わってきた。まるでレースでもしているかのような一辺倒の価値観ではなく、それぞれの方が自分のスタイルにこだわり山

を楽しまれている。山を通して、人生を豊かに歩まれている。個人として自分の山を追求した上で、集まったときには色々な考え方をおおらかに包み込むサロンが甲南山岳会であった。そのように感じる事ができた。

今回の遠征に際して、沢山の先輩後輩から多大なご支援をいただいた。いままでは山にご一緒させていただいた方々からはもちろん、お会いしたことも無い方々からも援助していただいた。学生時代から20数年間騙し騙し使ってきたような装備を、最新のものに買い換えて遠征に臨むことができた。

出国時には、大森さんが「荷物も多いだろうから」と関西空港まで車で送ってくださり、また、広瀬さん、柏さん、カンさん、平井さんが励ましに駆けつけてくださった。差し入れに頂いた昆布茶やニンニクエキスは、山中で皆で楽しませてもらった。帰国時には、夜遅い時間にもかかわらず、武田会長、塩崎さんが出迎えに来てくださり、塩崎さんは自宅まで送ってくださった。何かの機会に、井上隊長から「温かい良い山岳会ですね」と褒めてもらった。本当にありがたいと思った。

この遠征を通して、神戸大学山岳会の方々と接する機会を得た。名誉会員の一人にも名前を入れていただくことになった。初めて神戸大学山岳会の総会に参加したとき、半分喧嘩ごしのような雰

囲気に驚いた。平井先生からは「あんまり見せたくなかった」と言われた。でも、しっかりと自分の主張を持って議論をぶつけ合う姿勢が、会の組織的な運営に生かされているようにも思う。あらゆる繋がりを辿って同窓会や企業に声をかけ、多額の寄付を集める手法はとても効率的であった。また、中国登山協会や中国地質大学に対する細やかな気配りと相手を理解した上での交渉は、すばらしい。また帰国後、幅広く遠征にかかわった人々から原稿を集めてまとめ、重厚な報告書を作成した。そして、マスコミなどを通じてその成果を広く社会に伝え、自分達の存在を強くアピールするあたりは、甲南ではまねができそうもない。

遠征準備段階で、神戸大学山岳会から甲南山岳会へ協賛の申し入れがあった。これは山形実行委員長を中心とする遠征実行委員会から、私が参加することについて甲南山岳会への敬意を表していただいたものと理解している。しかし、甲南山岳会は、この計画に途中からの参画でもあることとOBの活動はあくまでも個人の責任で行うという甲南の伝統を基に、武田会長から丁重にお断りをした。これはもったいである。先に書いたように、この遠征はやはり自分のものではなかった。また、個人主義に徹することで自由で魅力ある会の運営が行われてきたからである。

しかし、今回の遠征で甲南山岳会の名

前が表に出ないことで、少し残念な気持ちもある。もし、神戸大学山岳会のように色々な成果を社会に強くアピールしていれば、大学山岳部の部員獲得や運営の支援などに少しでも貢献できたかもしれない。甲南山岳会のこの自由な雰囲気が好きであるが、神戸大学山岳会のような組織的な動きにも見習うところがあるように思う。

チベットから自分の周辺を見つめて 職場にて

高校で理科教員をしている。自然の面白さや不思議さを少しでも伝えたいと思いながら、実際には机上の学習や日々の生活指導に追われて本当に伝えたいことがなかなか伝えられない。そんなジェレンマを毎日感じながら仕事をこなしていた。そんなときに、この話が舞い込んできた。面白そうだ。雨宮さんも積極的にお誘いの声を掛けてくださる。でも、10月11月といえ、文化祭などの行事が目白押しで学校現場はとても忙しく、そんな時期に現場を空けることは到底できないと諦めていた。

しかし、何かの雑談のなかで勤務校の校長に「こんな話もあるのですが・・・。」と話してみると、「そんな機会めったにないやろ。行ってきたらええんちゃうか。」という意外な返事。「それならお言葉に甘えて」ということで、具体的なことが進んでいった。

その年は転勤が決まっていた。転勤先の校長は、以前勤めていた学校の先輩教師。早速電話をしてお願いをしたが、その年度で定年退職とのこと。次の校長しだいということになった。

新年度、新任校に赴任してさっそく新校長に「もう決定事項」であるかのように話をし、一応の参加承諾を得た。同じ理科の先生の中に以前科学館ボランティアを一緒に取り組んだ方がいて、私のことをよく理解してくれていた。教科をあげて私がいけない間のカバーをすべて引き受けてくれるという。また、所属学年の先生方も協力姿勢を示してくれた。

いよいよと思っていると、チベットで大地震が起こり、オリンピックをめぐるチベット動乱の影響もあって、この年の遠征は見送ることになった。参加承諾は白紙に戻ってしまった。改めて、教科と学年の先生方の応援のもと、校長に何度も交渉した。また、山田さんたちの計らいで神戸大学学長の参加依頼書を新年度が始まる前に発行してもらったこともあり、再び遠征に参加することが認められた。

出発直前には全校生の前で壮行会を開いてもらい、未知な世界への憧れと魅力についてスピーチをした。また、帰国後は、プロジェクターでスライドを上映しながら登山活動やチベットの自然、現地の小学校で行った交流授業の様子を

説明し、好評を得た。また、就職面接を控えた生徒から、印象に残った出来事として面接で話しをしたいので詳しく教えてほしいと面談を依頼されたりもした。前年度担任をしていた生徒が、廊下で私のかすれた声を聞きつけて、「先生、無事に帰って来たんや。良かった。心配しとってんで。涙が出そうや」と言ってくれたときは、本当に嬉しかった。その後も、知らない生徒からも「山へ連れて行って」とか「今度はどこへ行くのん」とか、よく声を掛けられるようになった。

職場の同僚に支えられて、生徒に自然の大きな魅力を伝えることが出来た。すばらしい経験をさせてもらった。

家族について

妻には「結婚しても山に行くから」と宣言して結婚した。結婚後も、独りで、あるいは妻とも山に行った。子供が小さい頃は家族で北岳や白馬岳にも登った。暇を見つけては、色々好き勝手に山に登ってきた。でも今回は、それまでとはちょっと違ったスタイルの山登りである。リスクも大きいだろう。子供たちも、まだ高校生と大学生。まして高校生の娘は大学受験の年でもある。家族に反対されたら、たぶん参加しなかっただろう。

そんなこともあって、妻には色々なことが決まって、いよいよとなってから話を打ち明けた。ちょうど6月、奈良の息子の下宿に泊まって2人で薬師寺を訪

ねた後、駐車場へ戻るときだった。「今度神戸大の人たちとチベットに行く話があるんだけど・・・」「もう良い歳してんねんから、足手まといになるんちゃうん」これは反対ではないぞ。OKだ。

その後、遠征について聞きつけた子供たちも、「いつものことや」という感じで不安すらないようすである。

出国時にも帰国時にも、妻が空港までやってきた。そんなことは今まで無かったことだ。「いない間、かえって気兼ねせずに気楽に生活できたわ」と言いながらも、妻なりには心配していたのだろう。

出発前のある日の夕食時、チベットのことが話題となり娘たちが冗談半分に「お父ちゃんばっかり好きなことして、ずるい」と。すると妻が「お父ちゃんの好きなようにさせてあげて!」と言った。これには参った。妻の手の平で、ちょろちょろしている自分が見えた。これからも、妻には頭が上がりそうにない。

終わりに

大した海外登山経験も特別高度な登攀技術もない私が、いろいろな方々とのつながりと偶然の重なりで、めったにない機会を得て遠征に参加することが出来ました。出発前には、その未知なる世界への期待で大きな高揚感を持っていました。しかし、実際に遠征が終わって帰ってきてみると、その山登りの充実感よりも、日常の自分の身近な世界への愛

おしさの方が、はるかに大きく感じました。そういえば、井上隊長が口癖のように「よき登山家である前によき社会人たれ」と言っていたのを思い出します。

自分の軸足が、しっかりと家庭や仕事にあることを確認したカンリガルポ遠征でした。

はたして、
最高峰ルオニイは登れるか

今回の遠征で初登頂に成功しロプチン峰と名づけられた山は、カンリガルポ山群で第2位もしくは第3位の高峰（GPS データ 6805m）と考えられている。この山群の最高峰は、その隣のルオニイ峰（推定標高 6882m）である。2003 年平井先生を総隊長とする神戸大学山岳会の遠征隊が目指したが、ルオニイテラス 5850m 地点まで辿り着きながらも連日の降雪に阻まれて敗退している。



C1 からルオニイ：手前の尾根の最高点が石丸峰

最初ルオニイ峰をC1から仰ぎ見た時、ズタズタに荒れたテラスランプや第2セラック帯を前景にして、その威圧感のある存在を見せつけられた。急な岩壁とその上にかかる不安定な懸垂氷河が、人間の接近を阻んでいた。2003 年の神戸大報告書で見た写真よりかなり荒れた状態であった。

しかし、キャンプを進めC2やC3から見ると、その印象は大きく変わった。C2上部に広がるルオニイテラスは広々と安定した雪原となり、ルオニイ峰はちょうどその上に載ったケーキのデコレーションのようであった。威圧感を感じられなくなった。なんとかこの山のパズルを解けば、登頂の可能性も存在するように思えた。

では、登頂の可能性のあるルートはどれか。

台形状の山容の西側は、のこぎりの歯のような尾根に囲まれている。間近で見ると、よくもこのような造形ができるものだと思えて自然の力の偉大さに感心した。この部分から山頂を目指すことは現実的ではない。

確認できる範囲でもっとも可能性のあるルートは、やはり神戸大が2003年に狙った北東稜である。安定したルオニイテラスにキャンプを置けば、容易に取り付くことができるように見える。下部1/3は、約45度の傾斜のナイフリッジで、その上端は懸垂氷河の崩れた部分

に突き上げている。上部は少し傾斜が落ちるが、山頂直下には尾根上に何本ものクラックが走り、最後の関門を作っている。かなりの氷雪登攀技術と体力、そして幸運が求められるルートである。しかし、今回観察できた中ではこのルートしか考えられない。C2から裏山（仮称：石丸峰、GPS データ 5760m）に偵察に行ったときに晴れていればもっと詳しい様子が確認できたと思うが、残念ながらガスが出て上部の視界が無くなり間近での観察はできなかった。

この北東稜ルートの課題は、大きく2つある。



C2 からルオニイ北東稜

第1の課題は、懸垂氷河の乗り越しである。誰が見ても困難な様子を読み取れる。でも、可能性が無いわけではない。我々が上部キャンプにいる間、ルオニイ峰から何度も懸垂氷河の崩落と雪崩が起こっていた。しかし、それはすべて壁中央の凹角状の部分のみで起こり、その

雪崩は壁の直下で止まってルオニイテラスを流れ落ちてくることは無かった。ある部分をのぞいて、思っているよりこの時期は氷が安定しているのかもしれない。実際、我々が登ってきた第2セラック帯の不安定そうに見えた氷のブロックは、撤収下山時にも崩れてはいなかった。リスクは大きいだが、稜線上は壁の中央部に比べるとまだ安定しているようだ。尾根上に聳えている氷塔やセラックに対して、如何にルートを読みスピーディに超えるかが鍵となる。

第2の課題は、山頂直下のクラックである。ロプチン峰の様子から考えると、上部緩傾斜帯はかなりのラッセルを強いられるだろう。昼夜の気温差が大きく空気が乾燥しているために、積雪の内部から昇華が起こっているのであろうか。今まで見たことも無いフレーク上の雪もあった。踏み固めても一向にかたまらない乾燥した雪である。苦労してラッセルした先に、不安定で複雑な尾根上のクラックを処理しなければならない。ここ



C3 からルオニイ：左スカイラインが北東稜

も大きなリスクをはらんでいる。

この2つの課題は、登頂を絶望的なものになっているかのようである。ただ、成功の可能性が残されているとすれば、この山の様子がその年の気象条件によって大きく変化することである。高緯度地域の山やもっと標高が高い山では、一度降り積もった雪は永らくそこにとどまり、安定した山の形を作り上げている。それに対して、奄美大島に近い北緯29度のここでは、強い日差しによって積雪はどんどん消えて行くようである。したがって、その年の降雪量によっていぶんと山容を変化させている。2003年の隊は大きな問題もなく通過したアタ氷河であるが、我々は彼らの写真に比べてそのクレバスの多さに驚き、回避するために右往左往して苦労した。神戸大は偵察も含めてほぼ同時期に何度かこの地域に入山している。彼らが撮った過去のルオニイ峰の写真は、その年度

によって様子が大きく異なる。このことがこの山をより難しいものにしているのは間違いないが、困難なセラック帯やクラックも幸運に恵まれた年には通過できる状態にある可能性を示している。

敗退をしても何度も繰り返し挑戦できるような山なら、成功の可能性は高い。しかし、複雑な許可手続きと高額な登山料をクリアしなければならない現状では、そうはいかない。この幸運に賭けて遠征隊を組むことは、宝くじを買うようなものであるかもしれない。今後、多くの隊がルオニイ登頂を企てるであろう。周到な準備はもちろんであるが、偶然にも幸運な自然条件に恵まれた隊が登頂を果たすのではないだろうか。

多くの困難な課題を要求し続けるこの最高峰ルオニイの頂に立った隊に、カンリガルポ山群における最も大きな栄誉が送られるのだろう。



松下弘幸(昭和54年・新高)

私が山岳部に在籍していたのは、確か甲南中学校3年から甲南高校3年までの4年間でした。その間は、演劇部との掛け持ちでしたが、たまたま顧問の先生は両方とも南里先生で、とてもお世話になった記憶があります。

2輪のレースもその頃から親には内緒でこっそり始め、2輪でも自分の足でも六甲山に通うという時代がその頃の思い出です。私は幼い頃からカブスカウト、ボーイスカウト所属していたのできっと、幼い頃から自然が大好きだったのでしょう。ですから山岳部に入ったのも自分ではとても自然なことでした。ただ、私の叔父(父の弟)の平田恭介が山で遭難死をしているため、父の反対を押し切った形での入部でしたが……。叔父の平田恭介は谷川岳一の倉沢滝沢下部を初登攀した人物で一部では名のある登山家だったらしいです。

山岳部に在籍中の4年間で何度か日本アルプスで合宿を行った記憶があります。夏の暑い道を息を切らせながら登った記憶、また真冬の凍えるテントの中で寒さで30分おきに目を覚ました記憶が今でも時々蘇ってきます。ただ新入りのくせになぜかエッセン長だったので「こいつを怒らせたらメシにありつけない」と思

われていたのか、先輩方は皆さんとても優しく接してくれました。(笑)

一番記憶に残っているのは、何年生の時は忘れてしまいましたが、冬山で下山の際にアイゼンを外してよいとの指令の後、気の緩みか凍った岩の上で足を滑らせてしまい、左足首をひどく捻挫してしまったのです。分厚い山靴を通して中からグチッ!という音が聞こえるほどでしたから、痛いのを乗り越えた痛み。左足は地面につけるのも痛いほどで、自分で歩くことも出来ません。ふもとまで確か2~3kmだったと思いますが、その間は先輩方に自分のザックを担いでいただき、また、自分自身もおんぶして頂くという、なんともみっともない姿です。今でも頻繁に山へ通ってられる山本恵昭先輩おんぶして麓まで連れて行って頂きました。あの時は本当にありがたみ、やさしさを感じたというか私がへまをしたばかりに先輩諸氏に迷惑をかけて申し訳ない気持ちでいっぱいでした。紙面をお借りして、あの時の感謝の気持ちを先輩諸氏、南里先生に再度お伝えしたいと思います。ありがとうございました。

たった4年間の山岳部経験でしたが、そこから学んだものはとても多いと思います。まずやはり一番大切なことは、自

然に挑戦しようなんて思うのはちっぽけな人間の驕りだということです。山に登らせてもらう、そういう気持ちは何よりも大切ではないかと思います。何事でもそうかも知れませんが、驕りを持った人間は必ずどこかでしっぺ返しを食らうと思います。仕事でも遊びでも。それと進むのも勇気、撤退するのも勇気が必要ということです。

自動車レースはレースカーという機械を使って行う競技ですが一般の方々はよく、「あんなスピードで走っていて怖くないんですか？ 勇気がありますね。」と言われます。はっきり言って、怖くないほうがおかしいです。おそらくレースカードライバーでもトップクラスの連中ほど、その怖さを身に染みてわかっていると思います。「この車でこのセッティングでこのスピードなら、次のコーナーは曲がれる」と思って我々は走っているのです。怖いからブレーキを踏む、怖くないところはスロットルを踏むという具合に。おそらく山でも同じだと思います。ちょっと怖いことは試してみよう、でも、もうちょっと怖いことは危ないからやめようと、このやめる気持ちにも勇気が必要だと思います。

山とレースに共通点を見出すのは難しいと思われるかもしれませんが、どちらも普通の人が行っている、歩くと言うことと、車を運転すると言うことの次元が少し違うだけで、やってることはほとん

どおなじです。レースも普通に車を運転するのと同じようにステアリングを切り、スロットルペダルを踏んだり、ブレーキを踏んだり、ただそのスピードのレベルが少し高いだけで特別な技術などありません。ただ、ほかのスポーツと同じようにレースカードライバーとして成功する人はきっと生まれつき与えられた、高い次元で車と対話できるセンスとそれを生かせるようなトレーニングの積み重ねをしてきた人に限られますが。

山に登っているときに、もう疲れて休みたいと思ったことは誰にもあると思います。私も何度も思いました。「あの岩までがんばろう、あの木までがんばろう。」と言うことでした。もちろん、このまま歩き続けて危険なほど疲労しているときは休むべきですが。レースでも本当にしんどい時、足や腕が痛む時、ここで止めたい。」と思うときが時々ありました。そのときに山のことを思い出し、後1周がんばろう、1周がんばったんだからもう1周がんばろう、と思い最後まで走りチェッカーを受けたときの爽快感は山で頂上に達したときの爽快感、達成感とちょっと似ています。ただレースのときは下山は考えなくていいのでその分は楽ですが・・・。

最近、少し時間に余裕が出てきたので、ハイキング程度ですが、私が普段居る、南カルフォルニアの低山を訪れることがあります。2輪や4輪のレースで足や膝

を痛めてしまったので、重い荷物を背負っての山登りは出来ませんが、日帰りの荷物ぐらいなら大丈夫なので、近くまで車で行って山へ入り、写真を撮ったりしています。あまり四季が感じられない地域ですが、山に入るとやはり、四季によって咲いている花が違ったり、気温の違いを肌で感じる事ができて面白いです。

短い間の山岳部経験でしたが、いろいろな自然に触れたこと、そして何よりも暖かい先輩諸氏との関わりが私にとって何よりのすばらしい体験として心に残っています。私もこれからそういう気持ちを若い人たちに少しでも伝えられればと思います。

＝プロフィール＝

ヒロ松下(ヒロまつした、1961年生れ)は、日本の元レーシングドライバー。実業家。本名は松下弘幸(まつしたひろゆき)。パナソニックの創業者の松下幸之助の孫として兵庫県西宮市に生れる。甲南高等学校・中学校時代は山岳部に在籍。甲南大学経営学部を卒業。カリフォルニア在住。



＝会員短信 その1＝

2009 年秋の集会の出欠はがきの近況欄

山本 三郎(名誉会員)

「鶴は千年・亀は万年」と言われますが実際の寿命は、鶴は80～90年、亀は150年～200年ということで私も長寿のシンボルである鶴の寿命を抜いて、もう遠くから山を眺めるだけです。劔岳・ヒマラヤ・・・など映画館で観るだけで若い時合宿や山歩きした写真を整理しているこの頃です。春の集会には必ず出かけます。いつもながら幹事ご苦労様です。甲南高校山岳部も順調に成長し大学に続いていますか？運動部員の衰退・就職難時代に突入して学生も考えているのかな・・・学生時代こそ青春を謳歌してほしいと思うこの頃です。剣道関係の祝宴があり残念ながら欠席です。盛会をお祈りします。

平井 一正(名誉会員)

この度は神戸大カンリガルポ隊に甲南山岳会の方々から多大なご援助をいただき、厚くお礼申し上げます。山本 恵昭 君も頑張っていますので成功を念じております。

神戸 謙司(中高山岳部顧問)

いつもお世話になりありがとうございます

ます。’09年中高の夏山は蓮華温泉キャンプ場から白馬大池・白馬岳アタックでした。若宮（高1）・中瀬（高2）よく歩きました。

P.S. 転居しました。

鈴木 敬吾(特別会員)

今年も残念ですが出席できません。皆様によりしくお伝え下さい。

関 集三(旧10理)

今春満94才となり高齢にて体調不足のため、いつも欠席お許し下さい。

佐野 源一(旧10)

6月満94才になりました。膀胱ガンで相不変3ヶ月毎の検診を受けていますし、腰痛で週3回リハビリに通っています。毎日1,000歩を歩くようにしていますが、歩くのが遅くて女性（それも老）にも追い抜かれるような有様です。電車に乗っての外出も最近した事ありません。

武田 六郎(旧13理)

高齢のため欠席致します。

赤松 二郎(旧14理)

小生も90才です。杖がなくては歩く

のも不安定です。遠出は人様に迷惑をかけるので控えるようにしております。

鷺尾 顕(旧 15 文)

体調不良にて参加出来ず残念の極みです。

伊藤 文三(旧 15 文)

日常生活にはさしつかえない程度に動きまわっていますが、遠出は無理。昨日・今日の事は忘れるのに、昔の甲南山岳部時代に登ったあの山・あの壁をはっきりと思い出す始末。認知症の始まりか、いや好奇心はあるので大丈夫か？というところでは。

小川 守正(旧 17 理)

集会に参加したい思いは山々なれど足が言うことかなくなり残念ながら欠席です。65才から海外登山をはじめキナバル・玉山・マウナロイ・ホイットニーに登りましたが陋屋に蟄居、酒を飲み三文小説を読みふける以外能がなくなりました。ところが思い掛けなくも甲南大経営学部講師を拝命「危機管理学」を講じています。87才最高齢の教師です。山岳会楽しみにしております。

福井 實(旧 17 理)

物忘れは甚だしいも、一応元気です。「ホームページ・掲示板」で皆さんの元

気の様子を拝見して、うらやましく思っています。木曾駒には参加しませんが、次の山岳会の会合に出たいと思います。(関東の会には出席しておりますが、関西の次の会には出来るだけ出るつもりです。)

津田 昌男(旧 18 理)

父 昌男は去る10月5日87才の生涯を終えました。晩年はパーキンソン病の悪化により手足が不自由になりましたが、最後は悪性腫瘍による全身転移のための衰弱死でした。父は甲南山岳部のことをいつも誇りにしていました。

長男 津田 武 アメリカ在住

伊藤 五介(旧 24 文修)

一応元気です。

丸山 照夫(旧 25 文)

齢80となりました。すっかり足腰も弱ってまいりました。

小原 耕治(大 31 経)

諸兄に逢えることを楽しみに参加します。当方まずは元気です。幹事役殿 毎度のこと乍ら御苦勞様です。感謝!!

砂川 彰雄(大 32 経)

集会のご案内ありがとうございます。今年もお世話になりますので宜しく。この3年間に新製の阿部さん・柏さん・柳

沢さんと3人が亡くなり淋しい限りです。特に柳のまあ聞きなはれで始まる数々の硬軟交えてのお話は懐かしい思い出です。

行友 利安(大 32 経)

平素、何かとお世話になり感謝致しております。年が重なるにつれて、体調を崩している時もありますが、地域社会の安全安心の町づくり行事活動が多く多忙です。皆様によろしく。

宮本 侑(大 32 経)

腰痛のため欠席致します。

鈴木 頼正(大 33 経)

やっぱり筋肉が衰え、頑張っても無理です。下りの階段はなるべくエスカレーター・エレベーターを利用しています。月に2回ゴルフをしています、時に年を聞かれますのでエーイ末期高齢者ですと答えています。歩くことも続けなければ維持できません。

雨宮 宏光(大 33 経)

毎年のことながらお世話ありがとうございます。

麻島 重彦(大 33 経)

ご案内賜りまして感謝申し上げます。十一日は十一面観世音菩薩さまの法要日と重なりまして申し訳御座いませんが欠席させて頂きます。思いますに何時も柳

沢先輩よりお誘いのお電話を頂きました事を思い出しております。大般涅槃經に「一切のもの総て生きずるものは必ず滅し寿命無量というも必ず終わりあり・・・」と有ります。次回お会いできますことを、祈らせて頂きましてご案内を賜りますことを、お待ちしております。

田辺 潤(大 34 経)

いつもお世話くださる幹事の皆様には大変感謝しております。集会前日の沢登りのお誘いがかからないのが残念ですが、集会には砂川さんと共に必ず出席します。また諸兄にお会いできることを楽しみにしております。

芦田 匡平(大 35 理)

かつてオニさん・リュウさんと見た五山の送り火(大文字焼きではない)を今年はカンロクの尽力でオトミさんはじめ大勢と見、楽しい時が持てました。では又。皆様に宜しく。

鳥居 威男(大 35 経)

毎日が日曜日ですが近郊の山へは月に2度は登山に！スケッチを習って3年になりますが、個展を開くまでにはあと何年先か？久しぶりの出席、皆様方にお会いできる事を楽しみにしています。

田中 孜(大 36 経)

この6月に単身赴任の秋田から神戸の自宅に戻って来ました。

越田 和男(大 36 理)

5月にペルー観光に出かけ、マチュピチュ遺跡の裏山マチュピチュ山 3051mに登りました。国内では5月の那須・朝日岳、7月には尾瀬・燧ヶ岳などと細々ながら山歩きを楽しんでおります。

廣瀬 健三(大 36 経)

去る8月の日本山岳会[関西支部]の懇親会で神大山岳会の井上氏より山本 恵昭 兄と谷君の活躍と元気な様子を聞き嬉しく存じました。

藤安 賢一(大 36 経)

裏山の十文字山への毎日散歩も最近途切れがちになり、体調とにらめっこしながら行くか行かないかを決めています。最大時75kgあった体重も今は58kgしかなく情けない事になっています。皆様のご健勝を祈ります。

大関 和夫(大 37 経)

夏は孫達と海で遊びました。自然は良いものです。山は天候不順で事故も出ているようですが、皆様はお元気でお過ごしのことと存じます。

二谷 和成(大 38 経)

今年の夏は年寄り仲間木曾駒へ登りましたが、もう3,000mクラスの山で標高差5~600mのところまで乗り物で行

ける山もなくなりました。来年は燕から常念迄歩けたらと思っています。

飯田 進(大 38 経)

孫のアッシー君以外何もやっております。ちょっと家を空けるわけにいきませんので、今回残念ながら欠席します。皆様によろしく。

福田 信三(大 39 理)

山嶽寮64号編集が無事終わりホットしています。多くの皆様のご支援のおかげで内容も充実したと自負しております。是非御一読していただき、御気付の点は何なりと御聞かせ下さいますよう御願いたします。

武田 雄三(大 39 経)

井上サン、いつも乍らの世話役ご苦労様。有難う。今年の天候不順小生の大好きな溪流釣りも、8月末迄は不漁続き行きつけの遠山川以外で遊ぶことが多くなり、行く先々で多くの知り合いが出来ました。

森本 全彦(大 39 法)

いつも御案内いただきありがとうございます。今年1年は癌との闘いで、治療の間を見て、山に出掛けております。残り少なくなってくる人生、好きな事出来るのも少なくなってきたみたいです。

御盛況でありますように。

藤原 邦彦(大 40 経)

年を感じるこの頃です。

井本 洋(大 40 理)

返事遅れて申し訳ありません。皆様
によりしくお伝え下さい。

塩路 晃二郎(大 40 経)

区画整理事業の終了により住居表示が
変更になりました。

鶴木 洋(大 40 文)

月に2回、年寄り用のスポーツサー
クルで体を動かすようにしています。

水渡 清夫(大 40 営)

今年の夏(8/15)神戸から同期の安さ
んがやって来た。二人で大関先輩宅へお
じゃまして昼から夜中まで、大関さん
のおいしい料理をいただき旨い酒を楽し
くやった。酒量は三人とも現役時代と
変わらず元気。楽しく有意義な時間
をもちました。

奥山 正紀(大 40 法)

家内の七回忌も終わり一人生活に
疲れを感じています。10月より長男
夫婦と同居です。

柏 敏明(大 41 経)

幹事様いつもお世話いただきありが
とうございます。当日は兄貴の法事と
重なり、残念ながら参加できません。
ご盛会をお祈りいたします。小生は
皆さんが山やヨット・旅行等色々と
誘っていただきますので、それなりに
日が終わっています。

伊丹 徳行(大 40 法)

幹事さんご苦労様です。お世話にな
ります。今年も利尻富士を見に稚内
に行きました。曇りの日に行った為
立派な姿を見ることができません
でしたがやはり美しい山です。3500
t級のフェリーが往復している為
年間を通じてほとんど欠航する事
なく又五合目まで車で登れるとの
事です。集会を楽しみにしています。

竹中 統一(大 40 経)

先日の妙高登山は終日雨の中無事
登頂。一緒に森本さん・柏・水渡・
浪川氏に感謝。

森岡 宏光(大 43 理)

幹事様ご苦労様です。ここ2年前
から妻の足が長時間歩けなくなっ
たので、最近はJTB・近畿ツーリス
ト等で旅行を

しています。足が良くなれば又山に行きたいと思っています。

國分 廣昭(大 43 経)

元気でやっております。今回も都合で参加できません。すみません。

石原 浩二(大 44 理)

役員の方々にいつも感謝しております。五月下旬に雄山に登りました。みぞれ・強風の中室堂より頂上まで誰にも会いませんでした。後立山の素晴らしい景観は見れませんでした。満足した時間でした。

赤田 友則(大 44 理)

念願の富士山登頂果たしました。7/31 天候も良くお鉢・火口も良い写真撮れました。最高峰剣ヶ峰も到達しましたが下山は失敗しました。ブルドーザー道を選んで下りたのですが降雨視界きかずヤバイ状況になり、結局吉田口のつもりが須走口に下り無事でした。登りも下り道(ブル道)の方がいいですね。

矢吹 操(大 45 理)

元気です。相変わらず時間がある時に武庫川河川敷をジョギングしています。健康維持になっていると信じて、体重はほとんど変わらずですが・・・。

南里 章二(大 45 理)

学校行事のため欠席させていただきます。毎回欠席で申し訳ありません。盛会をお祈りしています。

井上 知三(大 48 文)

事務の世話役の仕事を大森さんから引き継いで早いもので丸 7 年になります。だんだん根気もなく疲れてきました。誰か代わってくれないかな・・・・・・?(秋の集会の担当だけでも)と思う今日この頃です。

西川 けい子(大 50 文)

いつもお世話になっております。夏前、福田氏より原稿を依頼され即(!)我が頼もしい後輩大柳さん(旧制吉松・別姓ポチ)にお願いしました。(ずるい?! いいえすばらしい選択だと自負しております)彼女を始め、いい仲間に出会えて幸せだなとつくづく思う昨今です。

平井 幹男(大 50 文)

前略 春に新型インフルエンザでキャンセルが多く発生して大変でしたが、秋はまずまず順調に申し込みが増えています。しかし秋は一年中で最も仕事量が多く残念ながら出席出来ません。毎回の案内ありがとうございます。いつか出席したいです。

村田 信一(大 50 経)

デトロイトで勤務中の同期の早川 栄

二君と夫婦で揃ってカナダ旅行して帰ったばかりです。少し早い紅葉の中モントリオール・イースタン・タウンシップス・トロント郊外のアルゴンキン州立公園でカヌー・乗馬など楽しんできました。現役の時から思い出深いカナダでした。

中澤 章浩(大 51 文)

御案内ありがとうございます。この時期奉仕しております神社の秋祭りがあり勝手ながら欠席致します。秋の長野の山々の美しさが思い出されます。皆様どうぞ宜しく。

大森 雅宏(大 53 文)

何となく忙しく暮らしています。この春 250 cc の古いバイクを手に入れました。ごそごそ修理をするのが結構楽しい。メカが目に見えるだけ、半田ゴテ片手の電子工作より分かりやすい。半年手を入れてソロソロ区切りです。実は長女と 2 台でツーリングをと目論んでいるのですが、先方のオーケーが出ますかどうか。はて。

要 裕晶(大 55 営)

毎年お誘いいただきながら出席できず申し訳ありません。盛会を祈念しております。

山本 恵昭(大 56 理)

この度、カンリガルポ山群学術登山隊への参加につきまして、沢山の方々から多大なご支援をいただき、誠にありがとうございました。10月10日に出国し、約一ヶ月半の登山・学術活動を行う予定です。また、この冬にはスキー等で、ご一緒させていただきたいと思います。

川野 幸彦(大 56 理)

お元気ですか？10月から下記住所に変わります。約20年住んだ松本から離れます。北アルプスも遠くなり残念です。“秋の集会”には仕事が入り出席できません。皆様によりしくお伝え下さい。盛会となることをお祈りしています。
新住所：

八木 健(大 58 経)

毎回ご案内ありがとうございます。御無沙汰して申し訳ありません。盛会を祈念申し上げます。

西名 俊英(大 61 理)

いつも連絡ありがとうございます。夏は娘がヘルパンギーナという夏風で、家族で楽しみにしていた泊まりがけの海水浴に行けず、がっかりでした。これからの実りの秋が楽しめるようにと思う今日この頃です。

松成 健(大 H8 文)

仕事が忙しくなり、なかなか山に行く機会がありません。たまの休日に裏山に行く程度です。この山は標高は低いですが急登で頂上に着くと北九州や下関の市街や関門海峡が眼下に見え景色の良い山です。

平井 吉夫(新高 S32)

返事が遅れて申し訳ありません。越田の立山に付き合ってから集会に合流するつもりです。

北方 龍一(新高 S34)

7 月より要請されて兵庫県の太陽光発電相談指導員として週 4 日神戸駅前のクリスタルビルにフルタイムで勤務しています。県議会議員を除いては月給では私が最高令者と思います。皆様に宜しく御伝え下さい。

永島 孝男(新高 S37)

「秋の集会」の御盛会をお祈り申し上げます。

川村 静治(新高 S37)

秋の集会に初めて出席させていただき

ます。

福田 裕久(新高 S45)相も変わらず体力の低下を感じています。犬の散歩が健康法と楽しんでいます。

前田 和也(新高 S53)

市内ですが転居しました。知人の結婚式と重なったため今回も欠席します。離れていてなかなか出席できませんが、いつかは出席したいと思います。

松下 弘幸(新高 S54)

海外に居ることが多くなかなか皆様の顔を拝見できず残念です。皆様の安全な登山を心よりお祈りしております。

白川 浩平(新高 H2)

相変わらず、日々波乗りに明け暮れております。今年より、ヤギ 3 頭飼い始めました。10 頭まで増やし、11 頭になったら丸焼きにして食べるつもりです。私の Website をご覧ください。
Koheisansurf.com



＝会員短信 その2＝

2010 年春の総会の出欠はがきの近況欄

山本 三郎(名誉会員)

「晴耕雨読」という生活を心掛けていますが、仲 机に向かってという習慣がなかったのを努めて、外出 歩くことを心掛けています。映画は月に3本、そして神戸市の老眼大学・写経・剣道の稽古、ボケ防止に心がける毎日です。皆様とお会いできることを楽しみにしています。

平井 一正(名誉会員)

なんとか元気にやっています。

鈴木 敬吾(特別会員)

大変申し訳ありませんが、諸用があり出席できません。

関 集三(旧 10 理)

本年5月には満95才になる老人そのものです。昨年の“山嶽寮”には、たまたま大先輩の伊藤 愿さんの御長女 松方恭子 様の御配慮で、老生の想いで話を載せて戴きました。「伊藤 愿 先輩の遺稿集に接して」と題して、昔の甲南時代の山登りを回想しました。これも“山嶽寮”の御蔭です。

佐野 源一(旧 10 文)

6月には95才になります。膀胱がんと何とか生きていますが、耳が遠くな

り・目も視力が衰え・腰痛で週2～3回リハビリ通り、全く年は取りたくないものです。スキーにも行けなくなったのが一番残念です。

赤松 二郎(旧 14 理)

私も91才になる、戦前・戦中・戦後を生き抜いて来てみれば、私と同年の者は8割以上が既に故人となっており、近頃も次々に聞くのは訃報ばかりで、私もその時が来るのが近いもの覚悟している。おや、彼も亡くなったかと云うのはやはり淋しいものです。

鷲尾 顕(旧 15 文)

参加できず残念の極みです。

伊藤 文三(旧 15 文)

胃がんで1/3摘出、寛解(治癒ではない)で12月29日に退院、この年でオペはしんどい。昨日今日のことを忘れるのに、尋常科の時國府・津田両君を連れていったあの山この山を思い出す。

小川 守正(旧 17 理)

山の仲間・旧き友人一人また一人と去り行く淋しさを、山岳会で新人の顔見る喜びでまぎらしてます。今年もその喜びを味わうこと期待してます。幹事の方々ご苦労さま

福井 實(旧 17 理)

在関西の皆さんにも会いたく、今度こそ出席したく思っていました。残念乍ら当日止むを得ぬ用件ありまして！徳末・國府・津田の三君の銘板設置にも参加できませんが宜しくお願い致します。小生すっかりボケてしまいましたが、足腰は手の割には元気にしております。4月10日の在京の山岳会の会には出席するつもりです。皆さんによろしく。

伊藤 長次郎(旧 21 理)

毎々御案内を頂きながら失礼しております。何とか元気に過ごしております。慰霊祭にはお世話になった先輩 同窓生の事として参加させて頂きます。よろしく。

丸山 照夫(旧 25 文)

80才になりました。気力も体力も衰えてまいりました。今は昔読んだ新田次郎の山岳小説を読み返したりして無聊を慰めています。

伊藤 五介(旧 26 文)

年並みに元気です。皆様によろしく。

小原 耕治(大 31 経)

去る3月6日(土)平生会館で行われた甲南学園歌唱祭に、宮本 侑・鈴木 頼正・芦田 匡平 3君と共に参加、部歌の「山の歌」を歌ってきました。楽しい夕べで

した。

砂川 彰雄(大 32 経)

総会御案内有難うございます。幹事の皆様にはご苦勞に感謝申し上げます。後期高齢者になりますと、急に体の節々が痛みだし、治りが悪くなり驚いております。極力ウォーキングやサイクリングで体力を維持するように心懸けています。御出席者の皆様に宜しく。

宮本 侑(大 32 経)

腰痛に悩まされています。

行友 利安(大 32 経)

体調悪く申し訳ありませんが欠席させて頂きます。

鈴木 頼正(大 33 経)

いつもお世話頂きありがとうございます。ゴルフ月に2回、フィットネス週2回は続けています。飲む友人が少なくなり少々困っています。近郊の山里に時折出かけています。3月6日(土)第6回甲南学園歌唱祭に小原氏・宮本氏・芦田氏と小生4人で山岳部部歌「山の歌」を大声で歌いました。浪高・姫高も参加され旧制20人新制50人ばかりの参加でした。

田辺 潤(大 34 経)

いつもいつも幹事諸兄にはご苦勞様で

す。小生3月15日をもって社長業を退きました。当面、後片づけ、引き継ぎなどで4月一杯くらいまで、常時出勤し5月連休以降非常勤になり、高遠生活を始めようと現時点では考えております。皆さん遊びに来て下さい。お待ちしております。ガチャ

伊丹 弘忠(大35 経)

元気しておりますが、先約があり欠席します。皆様によろしく。

鳥居 威男(大35 経)

元気しております。用事の無い時は午前中に約1時間六甲の麓まで散歩、スケッチと酒で楽しんでいます。

藤安 賢一(大36 経)

このところ政治や日本の近現代史に興味を持ち、現政権のでたらめさかげにうんざりしています。鳩山内閣など早くつぶれて欲しいものです。安心して寝る事が出来る様お祈りしています。子供や孫の為に。

越田 和男(大36 理)

香港へハイキングに行ってきました。意外と思われる方が多いと思いますが、香港には周辺の島々を始め九龍側にも豊かな自然が良く保全され、ハイキングを楽しむ方が多いようです。今回は九龍北部のサイクン半島と香港島の南のラマ島

を歩いて来ました。

伊藤 久三郎(大36 経)

毎日病院通いしております。皆様に宜しくお伝えください。

廣瀬 健三(大36 経)

乗鞍岳・位ヶ原山荘が今年創立70周年を迎える由 甲南ルームも残っているとの山荘管理人の六辻氏からの連絡有りインターネット上の甲南山岳会掲示板で知りました。甲南の人から写真・資料など提供して欲しいと(旧制甲南高校山岳部の部報からでも資料が見つければ良いのですが)

牧野 宏(大36 経)

誠に勝手乍ら欠席させていただきます。

大関 和夫(大37 経)

今シーズンはスキーを大いに滑りました。諸先輩を見ていれば80才までは続けたいと思います。新しいスキー仲間も加わり甲南のスキー愛好者は皆元気です。雪山は本当にすばらしい。

柏木 宏文(大37 経)

平成二年の事故後重度障害二級となり、その後大手術二回の後入退院を繰り返し、現在労健に入所いたしております。現在は落ち着いた日々を送っております。御

盛会をお祈り申し上げます。柏木 内
二谷 和成(大 38 経)

相変わらず月 2～3 日六甲中心に近郊
の山へ行ってます。年 2～3 回は信州方
面へ出掛けたいと思います。

森本 全彦(大 39 法)

この 3 月二年ぶりにスキーをしました。
安比高原・八甲田と東北地方に連れ
て行ってもらいましたが楽しく過しま
した。昨年は病に悩まされましたが、健
康体にもどり山にもスキーにも全開。そ
ろそろ自分なりの山行をしようかと。

武田 雄三(大 39 経)

何時も乍ら幹事役ご苦労様お世話にな
ります。スキーシーズンも終わり、溪流
釣りのシーズンイン各地を放浪するのが
楽しみです。

福田 信三(大 40 理)

特に変わりなく少しの仕事、多くの遊
びに精を出しております。総会の御案内
が山嶽寮編集開始の合図でもあります。
皆様からの原稿をお待ちいたします。

井本 洋(大 40 理)

まだ現役です。忙しく毎日を過ごして
おります。皆様によろしくお伝え下さい。

鶴木 洋(大 40 文)

最近足元がふらつきがちです。大コ

ケしないよう気をつけます。

奥山 正紀(大 40 法)

昨年 10 月より長男ファミリーと同居
を始めました。

水渡 靖夫(大 40 営)

数年前から始めたスキーが楽しくて、
今冬は 4 回出かけました。カービンぐス
キーの面白さを教えてくれ、スキーを始
めるように言ってくれた同期の柏君に感
謝しています。

伊丹 徳行(大 40 法)

幹事さんご苦労様です。二日とも楽し
みにしています。

柏 敏明(大 41 経)

幹事様何時もお世話を頂きありがとう
ございます。先日、安比と八甲田へ車で
スキーに行ってきました。安比は日本有
数のコースだけあって初級・中級・上級
と選択の巾が広く自分に合ったスキーを
楽しみました。その分皆さんと足前のレ
ベルがあわず一緒に滑る時間が少なかっ
たのですが……。八甲田は自然を生かした
コースが多く中級以上向きでなかなか
手強く、皆様にご迷惑をかけてしまい
ました。

井上 徹(大 41 営)

山岳部に入部と共に出会った最愛の妻
洋子(彼女はワングル部)が 1 月 3 日、私

を一人置いて天国に旅立ちました。今だにそのショック・悲しさ・寂しさから立ち直れぬ毎日を伊豆山中の草庵にて暮らしております。暖かくなったら伊豆の山々を歩きたいと思っています。

森岡 宏光(大 43 理)

2/11(木)～2/14(日)八重山・宮古周遊7島めぐりに妻と二人で参加しました。あいにくの天候で寒い小雨の中予定どおりまわりましたが期待したエメラルドの海・珊瑚礁が見られませんでした。山も海も天候しだいですね！

國分 廣昭(大 43 文)

今年も参加できることを楽しみにしております。

石原 浩二(大 44 理)

役員の方々に感謝しております。時々山に登っています。

赤田 正和(大 44 理)

当日出勤のため欠席します。いつもすいません。社有林の関係で先週は新宮(熊野)の山行でした。日本の山林は荒廃していると言われて久しいですが弊社の山はちゃんと育林しています。補助金を活用して作業道施設していますが民主党が向きを変えるのが心配です。皆さんによりしく。

南里 章二(大 45 理)

いつもながら、御連絡ありがとうございます。昨年暮れ、体調を崩し入院していましたが、回復し今のところ順調です。三月末には危払いの願かけてタヒチへの旅行を考えています。総会でのOB諸氏との出会いを楽しみにしています。

矢吹 操(大 45 理)

健康維持のつもりでしているジョギング今年に入りあまりしていません妻の母親の介護で休みの日の時間が、この方にとられています。義母の世話をしながらいろいろな事を考えさせられています。

伊藤 辰之(大 45 営)

S 4 8 年卒業後は山とは無縁で、一昨年定年退職後、再就職をしております。そこも来年3月に退職予定です。子供は独立し、夫婦二人で休日は、奈良の仏像鑑賞や大学等の教授と一緒に臨地学習をして楽しんでおります。

平井 幹男(大 50 文)

今年こそは、山本君に影響されて、ちょっとは山登りもまじめにやろうと体力作りを開始しました。又、山行報告できたらお知らせいたします。

高橋 けいこ(大 50 文)

いつもお世話になっております。昨年

10月恒例行事の同期の平井 由美子さん(ヒコ)の墓参りの後、西村夫妻と大柳でカナダから帰国したばかりの村田家へお邪魔しました。玄関に入ると、そこはもうカナダ！現役時代に彼が登ったカナディアンロッキーがそこにありました！いいなあ いいなあ～ ごちそうさまでした。

中澤 章浩(大51文)

昨年、山岳会に入会を許可され乍ら、当日都合によりキャンセル誠に失礼いたしました。今年は今のところ参加できそうです。日々多忙でここのところ山歩きもしていません。久しぶりの登山宜しく願います。

大柳 香代子(大51法)

高齢の親のサポートにあっちこっちと走っております。中々山への時間はとれそうもありません。半径1Kmの世界にいます。

大森 雅宏(大53文)

ご案内有難うございます。この春、6年勤務した診療所から事務部門に異動、書類とハンコの「役場のおっさん」のような仕事に戻りました。総会・慰霊祭、あいにく両方欠席します。ご盛会をお祈りします。

住友 健時(大55法)

ご無沙汰しております。1月末に20

年勤めた会社を退職し、今はインドネシアバリ島で居酒屋とアパート経営をする為の準備を進めております。経験の無い事にチャレンジしていくので毎日が勉強の連続ですが、なんか楽しくて・・・。

要 裕晶(大53文)

盛会を祈念しております。

川野 幸彦(大56理)

皆様お元気ですか？大阪に転勤して1年になりました。松本とちがって北アルプスが遠くなったのが残念です。今回は仕事が入り欠席します。皆様によろしくお伝え下さい。この連休には大森さんと山本と剣岳小窓尾根に行く予定です。

八木 健(大58経)

ご無沙汰して申し訳ありません。山本さんはじめ、皆様のご活躍を羨ましく思っております。今回も出席できませんが盛会を祈念申し上げます。

西名 俊英(大60理)

いつも連絡ありがとうございます。先日、娘の幼稚園の行事で17年ぶりにスキーに行ってきました。20回以上はこけて、いまだに筋肉痛が残る始末です。盛会となることを祈っております。

森本 寛之(大H19理工)

最近、お酒が増えて太ってきたため、

健康とダイエットの為山登りを再び始めました。日帰りから1泊程度ですが、良いリフレッシュになっています。九州にも由布岳や九重連山など登りがいのある山と温泉が沢山ありますので是非お越し下さい。

ご遺族＝

横山 嘉壽子

ご案内ありがとうございます。慰霊碑までは少し自身がありませんので、高座の滝まででも参加したいと思います。

本田 依子

友人と参加させていただきます。

乾 恵美子

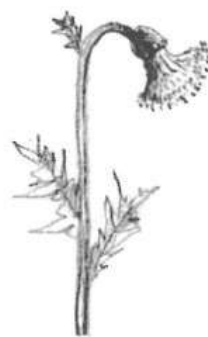
今年も新緑にミツバツツジ満開のロックガーデンで皆様と御一緒に慰霊祭に参加させて頂くのを楽しみにしております。体力年々衰えてきておりますが、頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

津田 みゆき

慰霊祭のご案内ありがとうございます。私も高齢なので欠席いたします。

徳末 悦子

いつまでも御心におかけ頂き誠に恐縮に存じ上げます。私も84才と相なりどちら様にも失礼を重ねており今後はご放念下さいませ。永年にわたります御温情を心より感謝しております。悦子



山岳会ホームページ掲示板より、カンリガルポ遠征、出発から帰国まで

山本君出発間近 投稿者：福田信三



投稿日：2009年 9月28日(月)

カンリガルポ山群登頂隊の壮行会開催の
新聞掲載をアップします。

GO, GO! 山本登攀リーダー

これからの情報が楽しみです。

カンリガルポ登山隊 投稿者：廣瀬健三

投稿日：2009年 9月30日(水)

壮行会の写真や神戸新聞の記事などを拝見してます。KACのエース山本恵昭登攀リーダーへの期待は、井上隊長も先般のj a cの懇親会で言われておられました。常に勇気ある撤退も念頭に、活躍を祈念!!

Re: 山本君出発間近 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2009年 9月30日(水)

壮行会には、武田会長、雨宮さん、大森さん、谷くんに出席いただきました。お忙しい中、有難うございました。

新聞の影響は大きく、山関係以外の沢山の方々からも「新聞見たよ。気をつけて。」と電話やメールで励ましのお声をいただきました。有り難いと思っています。9月後半になって仕事が忙しくトレーニングもままならない状況ですが、何とか無事に出発できるように10日まで調整を心がけたいと思います。

Re: カンリガルポ特集 現地からのブログ 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2009年10月 1日(木)

励ましのお言葉、有難うございます。

以前にも記載しましたが、ソーラーパネルと衛星電話、パソコンを持っていますので、現地からのブログを見ることが出来る予定です。よろしければ時々見てみてください

い。 <http://kangrigarpo.blogspot.com/>

明日出発です 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2009年10月 9日(金)

先ほどやっとパッキングが終わりました。

このたびの遠征に関して、沢山の方々からご支援や励ましをいただき、本当に有難うございます。神戸大山岳会・甲南山岳会をはじめ、いろいろな方々との出会いがあり、山を通してまた私の人生が豊かに広がったことを実感しています。いよいよ明日出発です。安全第一で、思いっきり楽しんできます。

山本君の出発 投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年10月10日(土)

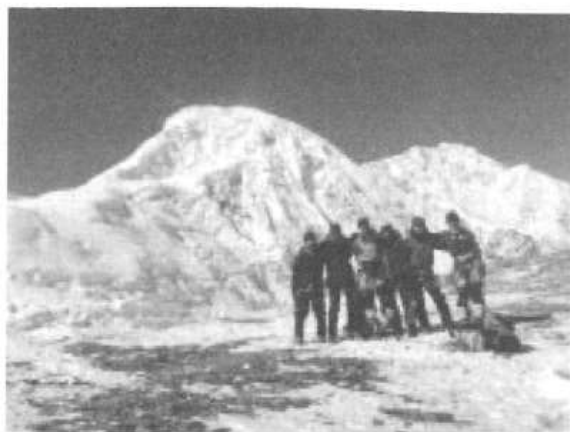
山本君がチベットへ出発しました。甲南から、廣瀬さん森本さん柏さん平井さん大森の見送り。写真を貼り付けます。



左から二人目は神戸大の居谷さん。事務局井上さんと同時期の方で、「知三さんによろしくお伝えください」とのことでした。(香月さん・横山さんの慰霊祭にもおいででした) 右端は山本令夫人。当の山本君はいつもどおりにこやかに通関に向かいました。

登頂現地通信転載 投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2009年11月 7日(土)



本日(7日)16時50分に井上隊長から電話がありました。

本日、現地時間15時36分(日本時間)16時36分、矢崎隊員と近藤隊員がKG-2に登頂しました!!!!おめでとうございます。

一行はC3を午前8時に出発しました。朝は天気良かったですが、午後から曇りとなりました。6,440mまでは順調でしたが、その後、難しいルートで頂上直下の雪庇を先ほど突破し、登頂しました。

登頂時は天候が悪く、現在、下降を始めています。約3時間でC3に到着すると思われます。サポート隊の山本隊員、石丸隊員はC3で待機しています。

中国隊5名は朝4時半にC2を出発しましたが、1人が膝を痛めたために全員がC2に戻り、さらにC1からABCに負傷者を降ろし

ています。

デチンとダンター は、万一のときの日本隊のサポートのためにC2に 残ってくれています。

その後、山田副隊長と話しました。

「全員が持てる力を精一杯に発揮した。1人が欠けても登頂できなかった。隊長も10日間、連日荷上げで頑張った。自分も精一杯やった。山本隊員は上部で 皆を指揮してくれた。石丸隊員も精一杯やった。中国隊とも助け合って登頂できた。」とのこと。

頂上アタックはこれで終了し、明日から撤収を開始します。今後の予定は、追ってまた連絡するとのこと。

Re: 登頂 現地通信を転載

投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年11月 8日(日)

雨宮さんの掲示を見て神戸大学隊の成功を知りました。

仲間としては山本君もピークに立てればよかったのになあ、と思いますがまずは登頂おめでとうございます。

学術調査や現地での交流授業など残りの仕事もありますが、大きな目的は達成ですね。

全員無事に帰国されることを祈ります。

下山報告の転載 投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2009年11月11日(水)

皆様

先ほど14時30分に、拉古に待機しているチベット登山協会のMr. Dawaさんの携帯に電話し、何か情報を知っているか尋ねたところ、「本日16時頃に日本と中国の隊員全員が無事に拉古に戻ってくる予定になっている」とのことです。

Dawaさんは、登頂に成功したことも知っていました。今日は然鳥のホテルに宿泊する予定だそうです。

色々皆様にご心配をおかけしましたが杞憂でした。本当に良かったです。取り急ぎ、ご連絡します。 山形裕士

(しばらく連絡が途切れ やきもきしてました。良かった。 雨宮)

連絡の転載です 投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2009年11月11日(水)

先ほど、6時前に拉古に着いた井上さんと山田さんから電話がありました。

今後は携帯が通じるので、いつでも双方から連絡できます。

日本人はけがなど一切なく、全員元気と

のことです。中国人が1人捻挫しましたが、古傷が再発したとのこと。

祝賀会のことですが、20日の午前中に中国地質大学で式典、午後にパーティーをするとのこと。

”苦闘 未踏峰制した” 投稿者：福田信三
投稿日：2009年11月16日(月)

朝日新聞 神戸版に掲載されていた。
した。やはり”甲南”の名がないのは……



連絡の一部 転載 投稿者：塩崎将美
投稿日：2009年11月16日(月)

皆様、本日夜刻 拉薩に戻ってきました。
途中、日多温泉という7世紀ころからの古い歴史のある温泉の温泉プールで日中いっしょにわいわいと賑やかにスイミングを楽しんで?来ました。なにせ標高4350mでしたので25m泳いだら温泉当たりか高度の影響か、ふらふらしましたが。

さて、いろいろと報告が遅れて申し訳ありません。Batteryの問題で万一の場合を考えて衛星電話は極力使わないようにしました。充電の問題は反省点ですので今後のためにまた詳しくReportしたいと思います。



1) 登頂の写真

(See attached file: KG-2頂上_矢崎雅則.JPG) (See attached file: KG-2頂上にて2009-11-7-15時36分_近藤.JPG) 実はなかなか大変な登頂でした。二人が午後8時、C3に帰還できたのもぎりぎりの線でした。登頂もリミットと考えていたPM3:00で頂上を目前にして退却指示を出しかけた山本登攀リーダーを遮ってあと30分頑張れ、と鬼の隊長命令を出しました。高度障害が明らかな矢崎を死に追

いやったかも知れない、と今思うと本当にぞっとします。二人が無事でいるのが本当にうれしく思います。

また、ガスで視界も悪く、Videoで360度ぐると廻し撮ってくれていますが、他に高いところがないので登頂の証拠にはなりますが、こちらも映像としては使えそうにありません。

2) 登頂の知らせ

11/5の中国隊の攻撃はずば抜けて強いデチンとダンタが食料、燃料の補給が心配な点と天候の不安定から、この日がbestと考えた結果です。日本側は高度順化と攻撃時間の点からC2からは頂上には達し得ない、と判断しC3建設にもう一日かけました。董さんは合同隊だから是非いっしょに登頂しようと、実に協力的でしたが、我が隊員の実力に照らして先に中国側に登頂してもらうように私が提案し、納得してもらいました。

そして中国側の登頂直後に衛星電話で登頂の報告を武漢にするように勧めました。董さんは日本側の登頂を待って電話する、とその日には武漢へは報告していません。そして7日の登頂後、武漢に衛星電話で知らせてくれました。それから山形先生に私が電話を入れた次第です。中国側の面子を大事にしたつもりです。彼らと一

緒でなければ今回の登頂成功はありえなかったと思っています。

山本 帰国日 投稿者：雨宮 宏光
投稿日：2009年11月16日(月)

山本 恵昭君は神戸大の皆さんと11月27日に帰国します。

フライトは以下で フィックス。

11/18 CA4404 Y ラサ〜成都11:10-12:55
11/18 CA4587 Y 成都〜武漢 8:40-20:25
11/24 CA1342 Y 武漢〜北京 8:05-10:00
11/27 CA161 Y 北京〜関空 16:05-20:10

カンリガルが登山隊 投稿者：廣瀬健三
投稿日：2009年11月16日(月)

先日の日本山岳会関西支部の飲み会の時、神大山岳会の方に”何故、第二次アタックが出なかったのか”と礼を失しない程度にお聞きしました。

食料の残り具合とか、色々背景が有ったようです。

神戸新聞外の多くの新聞報道に、山本兄の字がないのは寂しいですが、無事登山活動を終了出来た事、これが何よりと思います。(プロの登山家グループのPARTY成れば別でしょうが。)

武漢から電話 投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年11月20日(金)

登山活動が無事終了した山本君から電話がありました。

のどを痛めている様子で、声がかすれていました。「若い(神戸大の若手のメンバー)に付いてゆくのは大変骨が折れた」とのこと。「皆さんによろしくお伝えください」とも。

雨宮さんの書き込みのとおり、彼からも27日関空へと伝えてきました。私も迎えに出たいのですが仕事の都合でその時刻にはムリで申し訳ない、と話したら、「いいですよ」との答え。

神戸大の山田さんによると「上部の行動を大きく支えてもらいました」「神戸大隊のアタックパーティの帰着は山本さんのサポートなしでは難しかったです」

「声のかすれは激しい呼吸による喉の乾燥が原因のようです」(高所の大気は湿度が極端に低い)

通信の状態がベストではなく、あまり沢山の情報は得られなかったのですが、うれしい電話でした。

お帰りなさい 投稿者：kannroku

投稿日：2009年11月27日(金)

恵昭さん 登攀隊長の役目御苦労さんでした。神戸大の方々から恵昭さんの活躍

を聞き、うれしく思いました。混成部隊での難しい事もあったのだと思います。KG2初登頂本当におめでとうございませう。楽しい事、しんどかった事、等々の話楽しみにしております。

恵昭くん帰国 投稿者：武田 雄三

投稿日：2009年11月28日(土)

関空へ出迎えに行ってきました。塩崎君が山本夫人を連れて、車で出迎えに来てくれました。

35分ほど到着が遅れましたがゲートから出て我々を見つけると、アノ特徴あるハニカンダ様な笑顔を見せてくれました。高所での影響か気管支を傷めた様子ですが、日毎に良くなって来ているとの事で一安心。

関テレとサンテレビのクルーが取材に来ていましたので、今日明日中にも放映されると思われます。報告会は12月26日(土)神戸大学内にて行われる予定との事、楽しみにお待ち下さい。

無事、帰国。 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2009年11月28日(土)

本日、武田会長、塩崎さんのお迎えを受けて無事帰国しました。また、塩崎さんには妻とともに家まで送っていただき有難うございました。

長期の遠征のつもりが、実際の登山活動期間はあっという間に過ぎ、あっけなく終了してしまった気がしています。下山後は、武漢地質大学での様々な式典や北京での中国登山協会の方々の接待続きとなりました。

このたびの遠征におきましては、沢山の方々からご支援をいただき本当に有難うございました。いろいろな方との出会いの中で、新しい世界をのぞき見ることができました。また、山を通して世界が一回り大きくなったように思います。

祝 目標達成と帰国 投稿者：越田和男
投稿日：2009年11月29日(日)

山本君お疲れ様。

登頂の知らせから下山の知らせまでの時間が長く、いささか心配して気をもんでいました。夜間になって悪天候下での登頂隊員の収容に手間取り、貴君が苦労しているのでは、などと想像していました。

聞くところでは、貴君の奮闘があって無事に下山が出来たとのこと。貴君自身の登頂がかなわず残念だったでしょうが、登攀リーダーとしての務めを十二分に果たされたことの方が価値ある経験だと思います。

帰国報告の文末に「山を通して世界が一

回り大きくなったように思います」との感想を見て大変嬉しく思いました。帰国後の勤務も年末にかけ多忙となることでしょうが、なんとか暇をつくって温泉にでもつかってください。

奮闘を祝う 投稿者：廣瀬健三
投稿日：2009年12月 1日(火)

昨夜は、祝いの酒を飲みました。恵昭登攀隊長の奮闘サポートなくして、登頂者の無事生還がなかつとの事。登頂後のアクシデント回避がもっとも重要なり。リーダーの模範的行動を示したようで、嬉しい限りです。

KG II 登頂祝賀会 投稿者：鈴木頼正
投稿日：2009年12月 8日(火)

来る12月26日に登頂成功の報告会、祝賀会が神戸大学であります。出発前の会にも案内状を頂いたのですが神戸大学だけの会に出てゆく気にはなりません、今度は甲南として別に報告会、祝賀会はなく神戸大学の会で終了なら甲南の名前も入れて欲しいと思います。前回の同志社大学の谷君とかなり立場も違うのかなーと思います。掲示板で甲南も積極的に参加すべきかご指示頂きたい、

カンリガルポ報告会 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2009年12月27日(日)

26日、神戸大でカンリガルポ合同登山隊報告会が無事終了しました。私は、主に小学校での交流授業について報告しました。これでとりあえずひと段落というところですが、後は、3月末頃に発行予定の報告書作成に取り組むことになります。

年末のお忙しい時にもかかわらず、武田会長、雨宮さん、広瀬さん、鈴木さん、森本さん、芦田さん、塩崎さん、浪川さん、平井幹男さん、大森さん、谷くんが参加してくださいました。有難うございました。神戸大学山岳会の様々な方から、甲南山岳会の暖かさ、やさしさにお褒めの言葉をいただいています。本日、芦屋

の横池で、生徒とイノシシ観察をしてきましたが、帰国後ほとんど運動をしておらず、筋肉痛になっています。

中国隊のメンバーが報告会に合わせて来日中です。昨日は平井先生と共に中華街で中華料理を、本日はハーバーランドからコンチェルトという船でナイトクルージング、明後日は、六甲山と有馬温泉、連日付き合うほうも正月前からご馳走続きです。面白かったのは、チベット人隊員ダンタです。日本に来るまで海を見たことの無かった彼には、意外にもシーフードが口に合うようです。彼にとっては、大きな食文化ショックかもしれません。今日も、昼は寿司に、夜はバイキングのカニにむしゃぶりついていました。



山岳会ホームページ掲示板より、山行、散策、紀行の抜粋

黒部下の廊下 投稿者：kannroku

投稿日：2009年10月17日(土)

紅葉時期に黒部下の廊下歩いて見たく思っていたのを、今回実現のはこびとなった。

駒王の例会の時期を避けようとも思ったが、混みそうな事と11日全行程黒四～樺平までが、整備されたとの事で、12日からの出発とする。

10月12日(月) 晴れ

大阪8時発の高速バスで松本に(13:30着)。

松本～(JR)大町～(バス)扇沢～(トロリーバス)黒部駅16時16分着

これよりダム湖を見ながらロジックろよん(・・・・)に(17時過ぎ着)。宿泊者12名、テント泊3名? これらの人達は皆、下の廊下を歩くようだ。

10月13日(火) 晴れ後曇り

5時30分出発。黒部ダムの堰堤を渡り、トロリー駅を10分程阿曾原よりに登山道の目印があり、トンネルの外に出て一気に180mの高低差を降る。ちゃちな100m程の橋を左岸に渡る。これより樺平迄ほとんど左岸沿いを歩いて行く。

高い所で100mを優に超えてる所もあり、切り立った道は緊張の連続であった。内

蔵助谷出合いから小西さんの初登攀した別山尾根、また大タテカビンが前に迫っている。(黒部三大岩壁 上流より*丸山東壁*大タテカビン南東壁*奥鐘山西壁)

最後まで雪渓が残る黒部別山谷出会で阿曾原から登って来た2パターと出会う。最近付けられた梯子を上ったり降ったりと。岩壁のへつりでは、人の交叉もままならず、どちらかが譲ることに。この辺りから下流の白竜峡までが一番の難所と言える。ここを過ぎれば十字峡・S字峡と荒々しい渓谷が見られる。あと10日もすれば紅葉と重なり美しい自然美が見られるだろう。

S字峡の下流の東谷吊り橋を渡り仙人ダム、高熱隧道を過ぎれば100mの急登して、しばらく水平に歩いてから降りきれば阿曾原温泉小屋。きょうは68名の宿泊客。仙人池からと樺平からの人達で満杯。紅葉最盛期は100人から来るらしい。

5:30出発～15:30着

10月14日(水) 晴れ

6時出発小屋の出だしの登りを過ぎれば後は水平道の名前の通り、黒部本流の150mほどの高さを本流の蛇行通りの道を黙々と歩くのみ。昨日の緊張感はなく安

心して歩ける道である。右岸にある400mの奥鐘山西壁は逆スラブ状でおおきな岩壁である。

6:30出発~11:10着 11時45分のトロッコ電車で帰阪する。

今回学生時代に足跡を残された小西さんの見識ある各箇所の説明をして頂き楽しい山歩きが出来ました。ありがとうございました。

また現役時代牧野さん、大関さんで行った内蔵助平から下の廊下への岩壁に進めなかったのが悔やまれます。

参加者 小西(関学)・Donnkichi・森本

奥多摩・御前山 投稿者：越田和男

投稿日：2009年10月29日(木)

10月27日(晴)、奥多摩湖の南岸、奥多摩三山のひとつ御前山1404mに登りました。前日もうひと山予定してましたが雨の為中止し、午後に奥多摩湖畔の温泉民宿「あたま荘」に。風呂上がりに窓際の炬燵で、雨に煙るダム湖と対岸の山々を眺めての一杯は格別のものでした。@¥6,500-。旦那に先立たれて一人で宿を守る女将さんの気立ても良く、翌朝は車で登山口のダムサイトまで送ってくれた。

ダムサイトから稜線づたいにサス沢山940m、惣岳山1341mと縦走して、標高差900m、3時間余の登りで御前山に。今年

の紅葉はもう一つパツとしないが、北に奥多摩湖と東京都の最高峰雲取山、南に丹沢山塊などが望まれ眺望には満足。

静寂の頂上と思いきや、何と21名のおばさん中心の賑やかなガイド付き後続パーティーあり。一行は到着するや、ここで休憩20分です、その間に食事をして下さい、の指示あり、景色を楽しむ暇もなくそそくさと下山して行った。スケジュールより遅れていたのか、勿体ないことです。

そして再び静寂に。

下りは、ダムより下流の境橋バス停へと1000mを2時間で下ったのでバテバテ寸前だったが、奥多摩駅2階の食堂での生ビールで生き返った。同行はJACの大橋(国学院OB)、絹川(学習院OB)の2氏でした。

トルコへ行って来ました

投稿者：越田和男

投稿日：2009年11月29日(日)

山本君が帰ったのと同じ日にイスタンブールから帰って来ました。機上のスクリーンではニューデリー、カトマンズなどの上空を飛んでいた様でしたが、すっかり寝ていて気がついた時は既に上海の上空でした。残念！

トルコは観光旅行でしたが、期待していたアナトリア高原のいくつかの雪の高峰

を眺めることが出来ました。同行の観光客は誰も山などには興味がなく、迷惑だったかも知れませんが、何度も小生の希望をいれてバスを止めてくれたお陰で何とか写真撮影出来て満足しました。見えた山はエルジエス山（3916m）、ハサン山（3268m）、ベルベル山脈など、追ってアルバムに送ります。

観光客向けのベリーダンス付きのディナーショーなどにはまるで興味を感じず

（いやほんと）、ボスポラス海峡にかかる巨大な吊り橋をかけたのが三菱重工とIHIだとの現地ガイドの説明を聞いて感激するのは歳のせいですね

稲荷山233m 投稿者：kannroku

投稿日：2010年 1月 6日(水)

1月4日東山36峰の一番南にある稲荷山に行ってきました。JR稲荷駅から2時間半の散策で本殿にお参りした後、千本鳥居ぐり、三の峰、二の峰、一の峰と。一の峰が稲荷山で233mです。稲荷神社はどんな信仰をも受け入れているとかが、にぎやかなるゆえんなのでしょうか。ここまで来て伏見の酒を飲まずに帰られないと4人で酒蔵探訪。美味しい酒をたらふく飲んで解散。 次回は2月3日頃に12番吉田山、8番瓜生山、9番北白川山に

今回の参加者 鈴木・芦田・廣瀬・森本

マイナス35度での疑似ロッククライミング 投稿者：米山悦朗

投稿日：2010年 1月 8日(金)

モンゴルに鷹狩りの撮影に行って来ました。 マイナス35度、標高差500メートルくらいの岩山の頂上に鷹を連れて行き、狐やウサギを捕まえます。岩山はロックガーデンをもっと急にしたようなものでここにあがる為ガイド三人に手取り尻を押されて上り下りをして、必死の撮影でした。最後に時間が余ったので、ロシアとの国境近くの山岳地帯に行き、マルコポーロシープをみて来ました。そのときは立っていられないくらいのブリザードでハードした。稜線まで上り遥か一キロくらい遠くでえさを食べているのをみましたが写真には写せませんでした。



写真はそのときのブリザードの様子です。



雪見会のお礼 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2010年 1月25日(月)

飯田様、雪見会参加の皆様

大変お世話になりました。おかげさまで、充実した2日間を過ごすことができました。

相性抜群のゲレンデ用スキー靴が割れてしまったことは残念でしたが、長年愛用したので寿命だと諦めます。

土曜夜のカンリガルボ遠征スライド上映の折には、石原さんをはじめ色々な方にご協力いただいて、皆様に無事スライドを見ていただくことができました。有難うございました。

日曜日には、小西さん（関学）、浪川さん、大森さん、谷くん、私の5人でツアーに。ヒヨドリ峰の西のピークから親沢源流に下り、登り直して黒川沢を下りました。膝ほどの新雪と輝く樹氷を堪能し

ました。

氷河の山も良いけれど、雪の森の中を徘徊するのも良いですね。

また、遊んでやってください。

やはり、「スキーは楽しいです。

投稿者：柏 敏明

投稿日：2010年 1月28日(木)

飯田様、雪見会ご参加の皆様、色々とお世話になり有難うございました。

3年振りのスキーと云うことと足の事もあり、心配をしていましたが

雨宮さんや飯田さんにご指導頂き、どうにか滑れることが出来ました。

山本さんのカンリガルボ遠征のスライド、又、ヒヨドリ峰ツアーの動画をその日に前田館のテレビで見れるなんて、凄い時代になったものです。



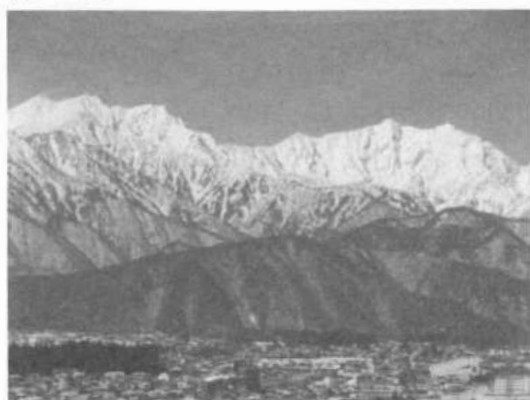
それにしても、膝まである雪の斜面をスイスイと滑る姿をみて感心するのみでした。

この掲示板にも動画が載せれたらいいですね。小生もこれからの課題、板に乗って急角度でなく大きく回れるように頑張りたいと思います。

今後もあきらめずご指導の程をお願いいたします。

皆さんと別れてから、田中さん、青木さん、小西さん、安さん、ドンキチさん達と25日は五竜・遠見、26日八方で滑り、小生は最後に八方池山荘から黒菱、リーゼンスラロームと滑って仕上げとしました。

最終日の27日は快晴無風。最高の天気でしたが4日連続滑ったので、節々が悲鳴を上げており（無駄な筋肉を使っているため）未練の残るドンキチさんを説得して、大町の山岳博物館を見学し、うまいそばを食って、サラダ街道経由で帰りました。写真は山岳博物館から見た鹿島槍、爺ヶ岳です。



新しいメンバーも増え、昼も夜もますます楽しくなってきました。

これからも宜しくお願いします。有難うございました。

有馬 氷結滝散策 投稿者：山本 恵昭
投稿日：2010年 2月 7日(日)

有馬温泉銀の湯のタダ券があったので、ついでに妻と有馬の氷結した滝の散策へ行ってきました。

まず七曲滝を下の谷から詰めて見学。ハイキング道から下りてきた中高年の団体さんが30人ほどいて、七曲滝下は大賑わい。横の氷結したルンゼをアイゼンを蹴り込んで登り、ちょっと満足。

七曲滝の落ち口へ出た後、踏み跡をたどり尾根ひとつ超えてクモ滝へ。これも横の凍ったルンゼを登り、谷を詰める。滝までは沢山の人が見学に訪れていましたが、滝の上には誰も上がってこないの、静寂そのもの。最後は藪をこいで紅葉谷のハイキング道に合流し、下山。

有馬温泉で暖まって、帰ってきました。

六甲も、雪に包まれると一味変わって面白いですね。

猿にドラヤキやられた 投稿者：越田和男
投稿日：2010年 2月12日(金)

先日（2月8日）雪の三ッ峠を仲間と4人

で楽しんだ時のこと。頂上南側の尾根上で富士北面の絶景に杯を上げたあと、ザックをデポして空身で頂上往復した。小一時間後に戻って来たところ、4人の内3人のザックの外ポケットのジッパーが開いており、中身がそこらじゅうに散乱していた。

てっきり人間の仕業と思った。全員貴重品はザックに残していなかったことに先ずは安堵したが、非常食のドラヤキとチョコレートが無い。ドラヤキのポリの空袋を見つけ大いに憤慨しながら下りにかかった。やがて雪中に猿の姿を認めてやっと猿の仕業だったと思い至ったが、近頃の猿はジッパーもポリ袋も簡単に開けるのにただただ感心。チョコは個包装なしの業務用棒チョコだったので猿には好都合だったかも。友の煙草ケースは爪痕を残してポイ捨てされていた。人間より賢いから煙草などに興味なし。

ザック本体はジッパーでなく、プラの留め具だったのでセーフ。人間だったらステン製のテルモスやチタン製の二重カップなど持っていくだろう。ジッパーの開けられていなかったザックは、ジッパーの上に布のカバーが付いていたために猿には開け難かったに違いない。ご参考まで。

香港のハイキング 投稿者：越田和男
投稿日：2010年 3月13日(土)

アルパインツアー社が香港へのハイキングツアーを出しており、興味があったので先週行って来ました。一行11名、たまたまJACでよく見る顔のF氏夫妻も参加しておられた。生憎の天気で眺望がもうひとつだったが、結構豊かな自然が残されており、大都市香港のイメージとはひと味違った一面を楽しませてくれた。居留外国人のみならず土着の香港人にも山歩きを楽しむ文化があるようです。

初日は、大陸側、九龍の北東の西貢（サイゴン）半島に槍ヶ岳の如く聳えるシャープ・ピーク（468m）。標高は低いが、海岸沿いに着けられたアプローチの遊歩道が結構アップダウンがあり、合計では1,000m位登った感じで最後にはバテバテ。海岸には廃村跡があったり、白浜に面してひっそりと数軒の集落があったりで風情もある。山小屋のようなところで食事を出す、さすが香港、ちゃんとしたコースで供されてびっくりした。野生の牛の群れにも遭遇した。

二日目は、香港島の南に浮かぶラマ島へフェリーで小一時間。ここは小さな漁村が二つあり、海鮮料理を食わすので、それを目当てに訪ねる人も多いとか。現在住民の9割が香港で仕事を持つ欧米人で、優雅に暮らしている。島内に車なし。適当なピークもあり遊歩道が張り巡らせて

いる。一行は海拔250mの菱角山（リンコックサン）というのに登ったが、小生は前日バテたので、海鮮料理屋のある麓の村で一行を待った。頂上近くでデカイ蛇に出遭ったとかで、行かなくて良かった。盛り沢山の蒸し海老とビールに満足して帰りの香港島へのフェリーから見る大摩天楼の景観を楽しんだ。

小生は香港始めてだったので、3日目にはツアー一行と別れてもう3泊して香港の下町やマカオも覗いてみた。滞在中ずっと曇天で、ビクトリア・ピークも、空港のあるランタウ島の長いロープウェイもずっとガスの中だったので、天気にはあきらめがつき、変な話だが納得して帰って来た。

南会津の山 投稿者：越田和男

投稿日：2010年 8月 1日(日)

皆さんも夏山を楽しんでおられる様子が嬉しく存じます。

先週の南会津2泊行では、先ず松枝岐に泊まって、会津駒ヶ岳2132mを目指しました。去年の夏、燧ヶ岳に登った時に見た会津駒の容姿に惹かれてのことですが、標高差1000mを越えると小生には一寸きつかったです。頂上手前の湿原帯がすばらしく、頂上行きは簡単にギヴアップ。駒ノ小屋2055mで仲間が空身で頂上を往復するのを待ちました。小屋には電気も来ていないのに、缶ビールが冷えており

(480円)、格別の美味さでした。

湯ノ花温泉でもう一泊した翌日は、これも頂上湿原のきれいな山ですが、田代山1926mに登りました。こちらも猿倉登山口からいきなり急登でしたが、標高差550mの登りは何とか着いて行けました。キンコウカが咲き乱れる雲上の頂上湿原は、忘れ難いものとなりました。写真は、駒ノ小屋直下です。



東北の山 投稿者：kannroku

稿日：2010年 8月 1日(日)

今年も海の日を迎え、慣例の夏山登山。山本様(ぼっぽの会)の周到な計画のやり取りの結果、福島西吾妻山・安達太良山に決まる。

7/17(土曜) 夕方5時頃裏磐梯高原ホテルにて落ち合う。東京組 山本・水渡・竹中 関西組 小西(関学)・柏・浪川・森本 計7名

7/18(日曜) 西吾妻山

7/19(月)安達太良山 東京組と別れ関西組は佐渡島に。

7/20(火) 佐渡島 金北山1,127m 佐渡金山・島巡り

7/21(水) 佐渡島 シーカヤック・釣りで過ごす

7/22(木) 山形に移動。山寺(立石寺)拝観。 交流の館・八幡に泊

7/23(金) 福島 磐梯山

7/24(土) 帰阪

土、日の休日高速代1,000円を利用して往復約2,600kmの暇人のやる旅をしました。



元気が何よりも謳歌している少し馬鹿に見える、元気な老人達です。

面白い企画お持ちの方、誘ってください。おまちしております。

(8/2往復2,600kmに訂正)

南ア、聖岳と光岳 投稿者：山本 恵昭
投稿日：2010年 7月27日(火)

南アルプス最南部、聖岳と光岳に行ってきました。豊かな森に包まれた良い山でした。

7月24日長野県側登山口の易老渡9:00に車を止めて、聖平小屋へ14:00。水が使い放題なので、シャツとパンツを水洗いして干し、のんびりくつろぐ。

25日4:30発で聖岳を往復し、7:45にテント場着。のんびりとテントを撤収し、8:30発。遥か遠くに見える光岳目指して長い道程。いくつものピークを超えてひたすら歩く。光岳小屋への登りは、なかなか劇的で面白い。うっとうしい樹林帯から石だらけの歩きにくい道を登ると、急に視界が開けて静高平の水場に到着。救われるように喉を潤した後、もう少し登ると、緑の絨毯のような草原の向こうに光岳小屋が控えている。光岳小屋16:00着。

夕食後、暇なので小屋の書籍を見せてもらおう。小屋番のおじさんお婆さんは気さくな人達で、小屋泊まりの女性も交えて四方山話に花が咲いた。この女性の息子さんは同志社大の山岳部員とのことでした。

26日5:00発で光岳と光石を往復。南面リンチョウ谷の大井川源流原生自然環境



保全地域の眺めが素晴らしい。イヌワシ
になって飛んで行きたい気分。ハイマツ
の南限自生地とのこと。6:45テント場発、
ガタつく膝を騙し騙し急下降を続けると、
12:00易老渡の駐車場の辿り着いた。

お盆休みには、妻と飯豊・朝日連峰に行
こうと思っています。

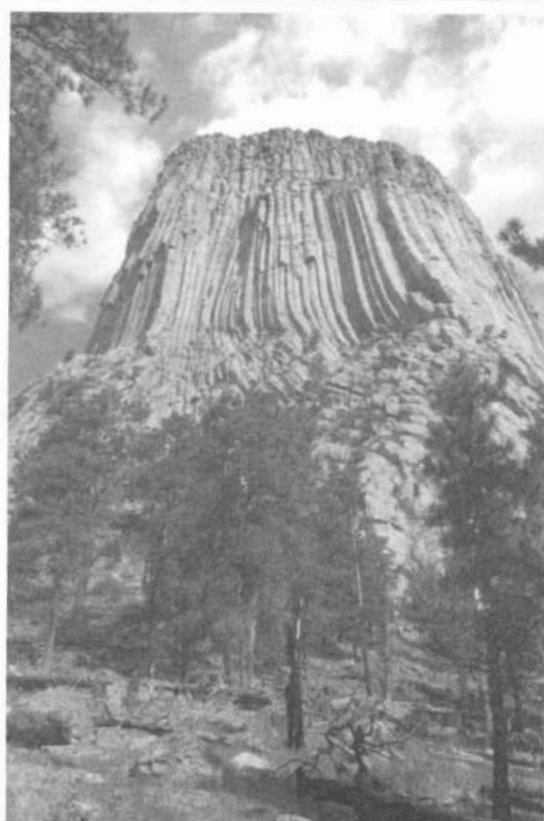
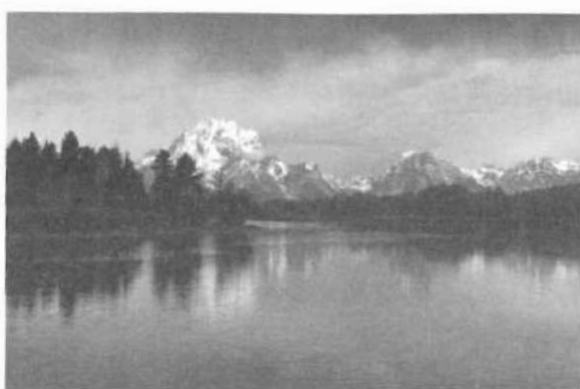
アメリカ旅行 投稿者：米山悦朗

投稿日：2010年 7月10日(土)

ソルトレークシティーからイエロー
ストーンを回りサウスダコタのラピッド
シティーまで3,000キロドライブし
て来ました。

写真を貼付します。

上はグランテイトン、下のデビルタワー
は岩登りのメッカだそうです。



ヨセミテ国立公園 投稿者：福田信三
投稿日：2010年 6月26日(土)

ヨセミテ国立公園にいます。
何度来ても岸壁、溪谷、森林等々のスケ
ールの大きさには驚きです。

2年前には秋でしたので滝に水はなし、今回は噴出すほどの水。

無数のトレイルは整備され、私のような横着もんでも、毎日2, 3時間の歩きを楽しんでいます。

ヨセミテフォールをご覧ください。



日本国に登ってきました

投稿者：越田和男

投稿日：2010年 6月20日(日)

「日本国」これ山の名前です。新潟・山形県境日本海寄りに聳える標高555mの山で、ちゃんと国土地理院の地形図にも載っています。山名の由来は諸説ありますが、結構古くからのもので、日本海からの航海の目印でもあったらしい。新

潟県側の登山口である旧出羽街道沿いの山麓の集落小俣宿は、今は小学校の分校も閉校となった寂れようだが、戊辰戦争で焼き払われた後も見事に復興して栄えたという風格にロマンを感じた。

そんな山に先週末の梅雨入り直前のタイミングを狙って、東京から2泊3日の旅程で、いつものJACの仲間と5人で出かけた。小俣登山口から登り2時間弱で、登路には蛇逃（じゃのげ）峠だとか、鷹待場とかの嬉しい地名が残る。眺めもよし、残雪豊かな朝日・飯豊連峰も印象的でした。日曜日だったので、地元の人もちらほら。この季節にまだ蕨がとれて、アッと言う間に両手いっぱい収穫を見せてくれた。東京や横浜からわざわざ来たというと珍しがられた。

宿は勿論温泉付き。JR羽越本線の勝木（がつぎ）駅近くにある、廃校となった中学の校舎を改造したもので、素泊まり3000円で、2000円出せば夕食も出て、今やシーズン真っ最中の岩ガキつきの豪華版でした。酒は地域限定の「日本国」。

帰りがけの駄賃で登った新保（しんぼ）岳852mも良かった。この山は新潟県の最北部日本海沿いにある葡萄山脈の最高峰。林道が高くまで通じており、登りは1.5時間と楽勝。見事なブナ林を経て、天辺から日本海側を眺めると、近くに粟島、遠方に佐渡も望めなかなかのもの。

帰路は朝日村の「道の駅」にある広々とした露天風呂で大満足したあと、関越道の長いトンネルを抜けると、関東平野は既に梅雨入りしていました。関西の方には馴染みのない所ばかりの話でどうも済みません。

のんびりハイキング；清水山 東大谷山 霊山など 投稿者：廣瀬健三
投稿日：2010年 6月10日(木)

歴史と文化を辿り乍らのJACの東山三十六峰を6回に分けての歩き会に参加、昨日は其の二回目。

予期せぬ好天、山歩きとしては、多少物足りなかったが、京都がいにしえの都だった事を再認識するウォーキングは、これまた良し。（東京は東のみやこと言われていたとか）MAILして貰った軌跡図／断面図／鳥瞰図を見たり、京都新聞社編集の「東山36峰を歩く」をひらい読みしてます。今回は一応11-12峰をめぐるしました。この峰峰のピークハントはなかなか厄介、頂上がどこか分かりにくいです。最終回は12月の比叡山を中心とした縦走のようで、これは登山に成りそうです。

新聞によると：昨年の山の遭難事故は統計を取り始めた1961年以降 最悪、死者行方不明者317人、原因の43.5パーセントが路迷いで、これが最も多いと、山歩きはどんな低山でも気を緩め

ては成らぬ。頂門の一針に致したし。

スズコキャンプ 投稿者：山本 恵昭
投稿日：2010年 6月 6日(日)

スズコキャンプご参加の皆様、お疲れ様でした。

スズコを採りながら登っていくと、神戸大ヒュッテが開いていて中にヒュッテ担当理事の土山さんと矢崎くん、大学職員の方がおられました。休憩がてらコーヒーをご馳走になりました。

天滝東屋でのメニューは、クレソンのお浸し、ウドとスズコの天婦羅、スズコの水煮のマヨネーズor味噌付け、焼きスズコ、豚と野菜の鍋、色々持ち寄っていただいたキムチや鮓寿司など、盛り沢山。皆さんの笑顔と四方山話を肴に、美味しいお酒で楽しくほろ酔いさせていただきました。

今年は天候不順のせい、時期が少し遅いせい、硬くて虫入りの物も多かったように思います。お土産の持ち帰られたものはどうだったでしょうか。次はそろそろ沢登りでしょうか。

スズコキャンプのお礼 投稿者：井上 知三
投稿日：2010年 6月 6日(日)

山本 恵昭さんのお誘いのキャンプに5日・6日と参加しました。

5日早朝に森本さん柏さん浪川さんと私

の4人が芦屋に集合。一路集合場所の氷ノ山 山麓の大段ヶ平に10時到着。前日からの大森さん山本さんと友人の検見川さんの7人で氷ノ山 山頂に登りながら登山道脇に入りブッシュコギをしながら根曲がり竹ノコをとりました。初めての参加だったので少し苦労しました。

下山後は兵庫県で落差(98m)一番の天瀧にも行き充実した日を過ごしました。夜は天の滝の東屋にて昼に採ったスズコを食材に恵昭さんの手料理と美酒で小宴会楽しい一夜でした。

参加の皆様には本当に何から何まで色々お世話になりありがとうございました。

最後に今夜の我が家の夕食の一品にスズコの天ぷら昨日の様においしいかな？

大和葛城山 投稿者：廣瀬健三
投稿日：2010年 6月 4日(金)

予てから行ってみたかったので、昨日地元の人のお案内をえて、登ってきました。つつじが綺麗な筈が、少しの遅れで一小生歯痛でドンピシャの花の時期を逃すも、少し冷気を感じる、杉の樹林路歩きもよし、鶯／ほととぎす／カッコウ鳥のさえずりも賑やかで楽しみました。又、途中で清流を掬って飲みました。良くこの山を知っている人が”飲んでOK”と申すので、心配なく、久しぶりに山での水をがぶ飲み。山本恵昭KAC会員が山の

清流で山草を見つけ”美味しいですよ”との事で、安心して食べた事を、思い出しました。余談：今日、テニスコートで山登りの話が出た時、山靴の紙の「ムガー」成る言葉が出てきて、「トリコニー」と共に響きがとても懐かしかった。小生以外誰も理解できず。

スズコキャンプのお誘い

投稿者：山本 恵昭

投稿日：2010年 5月28日(金)

来週末、6月5日6日に氷ノ山にスズコ：根曲がり竹タケノコを採りに行きませんか。

5日土曜日10時頃に大段ヶ平に集合し、氷ノ山に登りながらスズコ採り。

その夜はどこかで1泊小宴会。日曜日は適当に解散。

今のところ参加予定は、森本さん、柏さん、浪川さん、大森さん、私の5人です。

私は金曜夜に出発し現地で朝を迎えようと思います。

参加希望の方は掲示板等でご連絡ください。

六甲山越え 投稿者：福田信三
投稿日：2010年 5月28日(金)

昨日は六甲山越えで有馬温泉へ

中高の同期会でした。久しぶりで歩けるかなと思いましたが、なんとか。

しかし、頂上付近は風、ガスと寒さで冬のように、せっかくのビールが進みません。

それでも、山つつじとぶなの新緑は見事でした。そして、最近の多雨で有馬の鼓の滝の勢いが良く、ドードーと。鼓の音には聞こえませんでした。



扇の山野遊び 投稿者：山本 恵昭
投稿日：2010年 5月23日(日)

土曜日、急に予定が空いたので風邪気味の大森さんに付き合っていていただいて、扇の山周辺へ。

ヘルメットをかぶりハーネスをつけて、ロープも使って沢遊び。



自宅で飼っている生ごみ処理用ミミズに登場してもらって、糸を垂れるとそれなりに。ワラビなどもお土産に、

ミソサザイやアカショウビンのさえずりを聞きながら、まぶしい新緑の中、野遊びをしてきました。

高尾山登山 投稿者：飯田 進
投稿日：2010年 5月23日(日)

川野君や大森君がハードな登山をやっているの、こちらはちとソフトな登山を、と思って高尾山に行ってみることにしました。高尾山と言えば 八王子市にある高尾山599mがあるが、今回目指したのは、我が家から歩いて行けるところにある高尾山。町田市にある唯一等三角点のある山である。国道246号線を渡って畑の点在するなかを歩いて行くと、旅装深草がある、一度は訪れてみたいが連れがいないので実現していない。その

深草の手前を東に曲がって少しのぼると鳥居があって、その奥に古びた祠がある。江戸時代に建ったものらしい。飯縄神社高尾様 100余メートルと書いてあって、その前に一等三角点があった。

東には大樹がかぶさっていて景色なく、北には東京工業大学の学舎が聳え立っていた。

南から西には富士さんが、その手前には丹沢山塊、そして本物の高尾山、その向こうに

秩父の連山が一望のもとに見渡せ、東側の古木が邪魔をしなければ360度の一大パノラマが展開していることだろうと思った。一等三角点があるのもうなずけるところ。

これで甲州高尾山 町田の高尾山 辞書にも載っている高尾山と三つの高尾山に登った。

行って帰って10720歩、ああ疲れた年取った。

ヒマラヤトレッキング 投稿者：浪川純吉
投稿日：2010年 5月14日(金)

昨日トレッキングから無事戻りました、メンバーは関学(田中様・小西様) 柏さん・浪川の4人とウエック・トレック中島君(関学) 総勢5人。

4/22カトマンズ 23ルクラ～パクディン

2610m 24パクディン～ナムチェ3440m
25ナムチェ～クムジュン～ナムチェ高度順化 26エベレスト街道と別れボーテコシ川沿いにナムチェ～ターメ3820m 27高度順化為タメー滞在タメーゴンパ訪問 28ターメ～マルルン4200m

29マルルン～チューレ4490m テント泊途中で昨年関学初登頂したデイジュンリ 6198mが見える

30チューレ～メルング氷河の入口4780m～チューレ4490m テント泊 5/1中島君と私はナンパラ峠(中ネ国境) 見える処まで行く4880m 田中さん小西さん柏さんの三人はヤク峰4850m初登頂チューレテント泊4490m 5/2昨夜から積雪5cm チューレ～アリヤ4360m～レンジョパス手前レモラテント泊4950m /3レモラ～レンジョパス (5340m) -ゴーキョ4750m

/4ゴーキョ～ゴーキョピーク (5360m) 頂上に着く頃から晴れエベレスト・プモリ・ローツエ・ヌプチェ・マカルー・チョーユー・ギャチュンカン等々360° パノラマが楽しめた～ゴーキョ4750m泊 5 ゴーキョ～ドーレ4050m ロッジの目の前にタムセルク・カンテガ見える

6ドーレ～ナムチェ3440m 7ナムチェ～パクディン2610m 此处まで来ると空気が濃く感じられる 8パクディン～ルクラ 2840m 9ルクラ～カトマンズ

今回のトレッキングは軽い気持ちで参加しましたが、16日間歩きばなしに高山病・下痢・風邪（喉）等の悪条件の中平均70才皆様の頑張りに驚かされました、特に田中様（76才）には驚嘆いたしました。なんとか全員完走できたのもウエック・トレック中島君の気遣いと感謝します、彼は今時珍しい好青年です今後素晴らしいガイドになると確信してます。

詳しい報告は柏さんが今年の山岳寮に掲載されますのでご期待ください。

四国の山旅 投稿者：山本 恵昭
投稿日：2010年 4月25日（日）

土曜日の朝、ふと思いついて妻と四国へ。三嶺と剣山、ジロウギウと登ってきました。

11時に家を出て1000円で本四道路を抜け、ウロウロしながらまずは三嶺の麓の名頃へ3時に到着。約2時間の登りで山上の三嶺小屋へ。異常な寒波の影響で大変寒い。山上部の枝には霧氷が付き真白、足元には霜柱がサクサクと。小屋にはすでに先客が9名。内部も綺麗でトイレもあり快適な一夜を過ごす。

日曜日、山上の小屋だけあって小屋のすぐ横からお手軽にご来光。ゆったりと朝食後、15分で三嶺山頂へ到着。快晴の中、360度山また山のすばらしい展望。太平洋も見えているように思う。小屋へ戻って

すぐに下山し、車で移動。



今度は四国最高峰の剣山へ。登行リフトの誘惑に負けそうになるが片道1000円の料金を見て諦める。剣山山頂は人が一杯で早々にその先のジロウギウに足を運ぶ。こちらは静かな笹山。相変らず北斜面の木々には霧氷が付いているが、日向は暖かい。コヒーを沸かして優雅な昼食。のんびりと車に戻り、巨樹をいくつか巡りながら、神戸へ帰ってきました。

四国というと遠いイメージがありましたが、意外と近くて案外安く行けました。どちらの山も自然度が高く、広葉樹と針葉樹のバランスが取れた立派な森がありました。まだまだ良い山が有りそうです。一緒にいかがですか。

秩父の山 投稿者：越田和男

投稿日：2010年 4月24日(土)

先日は総会、慰霊祭と大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

今週は天気のコイミングに絶妙に恵まれ、秩父の山で二日間。初日は芦ヶ久保・二子山 883m 翌日は群馬・埼玉県境の諏訪山 1207m. 泊まりの宿は小鹿野地区・赤谷温泉「小鹿荘」。適度な山歩きと花盛りの山里めぐり、ひなびた鉱泉宿の組み合わせを堪能した。同行はJACの大橋夫妻と家内。

二子山頂からは西に巨大な武甲山、やや

遠くに秩父の名峰両神山。諏訪山山頂からは、北に荒船山の台地の向こうに雄大な浅間山（噴煙は認めず）、遙か西方には懐かしの鹿島槍、北東には日光・男体山などの雪の諸峰、まじか南に両神山の岩峰群などが望めて大満足。この春の天候不順のせいか、山里では桜が長持ちして満開。紅白の花桃、菜の花、れんぎょう、山吹、こぶし、芝桜・・・などなど、色とりどりに一斉に咲き誇ってました。

来週は連休の混雑前に会社仲間と丹沢を歩く予定。結構忙しいです。

みなさん連休は何処へ？



山岳会ホームページ掲示板より、思いで多い小窓尾根

おっさんたちの小窓尾根

投稿者：大森雅宏

投稿日：2010年5月4日(火)

連休の小窓尾根、風がきつくて寒めでしたが好天と、トウがたっていますが好メンバーに恵まれました。先行パーティのトレースにも助けられ、無事に終了。三人一盛 160 歳、おっさん連中で結構楽しく日に焼けてきました。

写真を添付します。(余裕のあるときだけ撮影・ということで核心部ヌキです)



ワタクシ個人的には、雪稜でバランスさっぱり、登りも下りも息と足がついて行かんワ、でした。

小窓尾根 投稿者：山本 恵昭

投稿日：2010年5月4日(火)

久しぶりのメンバーでザイルパーティを組んで、小窓尾根に。
皆、昔とった杵は健在で、体力以外は完

壁。そこが一番問題かも。なにはともあれ、好天にも恵まれて予定通り3日間で行動を終え、無事下山しました。



昨夜は上市の川原で、下山中に採った葉ワサビとコゴミ、スーパーで購入した惣菜を肴に、小宴会。仮眠後、渋滞にも会わず今朝帰宅しました。程よい緊張感を楽しんできました。

懐かしの小窓尾根 投稿者：塩崎将美

投稿日：2010年5月6日(木)

現役3年の春山合宿、同期の鈴木と2年の浪川の3人で登りました。小窓王からのトラバースぎみの下りがかなりヤバかった事だけが記憶に残ってます。今回の写真を見せてもらいましたがこんな所登ったんかいなと思うばかりです。なんせ45/6年前の事ですから。三の窓で雪洞に寝ましたが計画にあったチンネは登った記憶無し。本峰までたどり着き、直下で雪洞を掘りましたが激しい雪で埋まりサ

ブザックだけ持って夜中に逃げ出しましたが吹雪で歩けずツエルト被りビバーク。幸い翌日天気回復し早月を下りだしたら今わ亡き同期横山達サポート隊が上がって来てくれ無事生還できました。天気回復しなかったらと思うと今でも恐ろしい。私の山登りの中で一番ヤバかった出来事です。もうひとつの思い出は早月のBCまで下るとどこの大学かは忘れましたが大学山学部の人サポートに来てくれた6年生の鶴木さんに家からの電報を届けてくれました。”卒業できぬすぐ帰れ” 鶴木さんはただちに下山、無事卒業されました。

懐かしい懐かしい思い出です。

塩崎

懐かしの小窓尾根 投稿者：横山 咲子
投稿日：2010年5月9日(日)

(塩崎将美さんへのお返事です。)

その節は大変お世話になりありがとうございました。

時々、山岳会ホームページ楽しみに拝見しております☆。

父の山現役時代の様子が、皆様山仲間の方々の話題の中に、時々ちらほら、出てくるのでうれしくて(´-`)。山の絆はすごいな☆と思いながら、楽しく拝見しております。

鶴木さんの”卒業できぬすぐ帰れ”の電報のお話は、小さいころ、父が何度も話していたのを思い出します(´-`)。懐か

しく、思わず、メール投稿してしまいました☆。

ホームページ・アルバムの山写真もきれいです☆。

皆様のパワフルな山登り、すごいですっ(´-`)。

ホームページの元気な画像楽しみにしておりますっm(..)m(´-`)/。

横山 咲子

懐かしの小窓尾根 投稿者：塩崎将美

投稿日：2010年5月11日(火)

横山 咲子さん。投稿ありがとうございます。貴女のような会員以外の読者がおられる事はホームページの管理をしている者にとって大変うれしいです。これからもこのHPを楽しんでください。



懐かしくてパソコンの古い写真を見ていたら散骨にご一緒した時の写真が残っていました。(2003年9月29日、室堂乗越でケルンを積みました。)

塩崎

懐かしの小窓尾根 投稿者：越田和男
投稿日：2010年5月11日(火)

小生いつも思うのですが、やっぱり「山の思い出は人の思い出」と繋がっていきます。

実は昨秋のこと、石原浩二君の案内で始めて室堂乗越に行き、横山ケルンにお参りしてきました。その日は生憎の天気で剣も見えず、写真もうまく撮れなかったのでそのままになってましたが、ここに添付する次第です。



懐かしの小窓尾根 投稿者：大森雅宏
投稿日：2010年5月11日(火)

小窓尾根から横山さんのこと、書き込みが続いています。蛇足ですがちょっと。以前会報の担当をしていましたので、その頃の資料がありました。

1枚目の写真は横山さんと香月さん。



私のイメージ通りの横山さん。髪の毛短め、気も短かめ。(実はそうではなかったでしょうが・・・)

私のイメージ通りの香月さん。温和な感じ。(実はそうばかりではなかったというご意見を某上級生から聞いたことがあります・・・)

香月さんと咲子さんにも不思議な接点が。

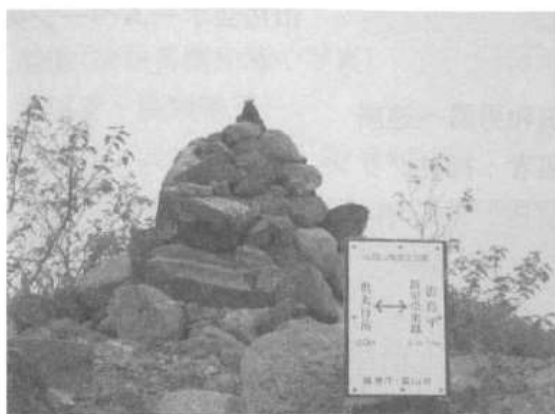
「咲子さんのお勤めが西宮の病院、お仕事はリハビリのお手伝い。香月さんがでリハビリをなさり、その係りがなんと咲子さんだったことを知りました。咲子さんは香月さんのことを、よく山の話をし時にはスキーの格好をしたりと大変明るくやさしいお爺さんだったと話され、名乗り会えば良かったと残念がっていました。何と言う奇遇／不思議な縁を感じました。」

(山嶽寮 58号掲載の塩崎さんの書き込み・一部省略)

30 年近く前のことですからみなさん若い。

「ロックガーデンの写真は昭和 57 年 10 月 31 日、山岳部創立 50 周年記念行事”家族ハイキング”の時のものと判明しました。集合写真の後ろの真中で腰に手をあてた香月さん、その右のサングラスが横山、右端が横山の奥さん嘉寿子さん、その左赤いショートパンツが横山の娘咲子さんだと思います。咲子ちゃんの左、あぐらをかいて座っているのはガチャさん？左端は越田さん？」

(山嶽寮 58 号掲載の塩崎さんの書き込み)



3 枚目は横山さんのケルン



越田和男君へ連絡

投稿者：福井グリーン

投稿日：2010年8月6日(金)皆さんの活躍を「山岳会掲示板」で毎週拝見しています。貴方の投稿を見て、先月の初めの中欧旅行でお返事するのをを”スッカリ”忘れていたことを思い出して貴宅に電話をしましたが、お留守だったので、又忘れないうちにと思って、これを使わせてもらいました。

拡大して送って頂いた「涸沢の写真」の後列の4名は津田、北川、国府（三郎）の3君と人夫（何度も一緒したんだが名前が出てこない）です。皆さんの元気なご活躍を羨ましく見守っている次第でした。

昭和15年夏の涸沢の写真

投稿者：越田和男

投稿日：2010年8月6日(金)



アルバム掲載の写真は福井グリーンさん所

蔵のもので、当時のOBと高校生が尋常科（中学に相当）の山岳部員を引率して涸沢に合宿した時のものと思われます。故人の方が多いですが、今もお元気な赤松、福井、小川の諸先輩のお元気な雄姿が写っています。

グリーンさん有難うございました。酷暑の中お元気なご様子で何よりと存じます。89歳の大先輩がHPの掲示板を楽しまれているのが嬉しきかぎりです。これでほぼ全員のお名前が確定しましたので、塩崎君にアルバム掲載方依頼しました。お名前はキャプションに入れてもらいます。

Re: 昭和15年夏の涸沢の写真(訂正)

投稿者：越田和男

投稿日：2010年8月10日

涸沢の古い写真の年代に間違いがありましたので訂正します。

島、赤松両OBの参加されたこの涸沢合宿は昭和14年夏のもの（昭和15年は間違い）です。参加者の学年は小川（アヒル）さん、福井（グリーン）さんが高1です。尋常科の方々の学年はそのまま間違いなようです。

赤松さん、アヒルさんとグリーンさんはこの合宿の前に、剣の池ノ谷に入り、小窓尾根の池ノ谷側バットレスの初登攀に成功されています。

以上、「時報」創立40周年記念号に小川さんが書かれた文章に依りました。塩崎さんご面倒ですが、写真のキャプションの訂正方おねがいします。

ちなみに、小川さんの上記文章には、ノンキさんや、グリーンさんの活躍ぶりや失敗談などが描写され、今読み返しても実に愉快。OB、現役が一体となって初登攀を含む大一级の登攀を続けていた戦前最後の自由な部活動や山行の様子がうかがえます。一読お勧め。

写真電送、阿部純一さん関連

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2009年10月28日(水)

塩崎W. MASTER殿、亡き阿部純一さん、故福永隆一さん、弟の故福永コブクが写ってる写真一枚を送りましたので、掲示方、宜しくお願いします。



S27年1952年の八方尾根黒菱平での集合写真。阿部純一さんは後列右から二番目。chief leaderとして苦労されたとぞんじます。

追憶(故柏秀樹先輩の写真)

投稿者：廣瀬健三

投稿日：2009年10月25日(日)



アルバムにUPして貰った写真は1979年(s54年)10月20日、馬場島にてのもの。亡きデカプクさん(福永隆一さん)の23回忌の時の記念写真。カシワさんとは一緒に山に登った事がなく、記憶に有るのは全て下界でのことです。

あるKACの集会で；時報か何かの原稿集めの為に、カシワさんが中心に成られた集いが有りました。其の席で言われた言葉を思い出します。

「原稿に誤字、脱字が多すぎる、もっとシッカリ書いてくれ」この様な事を言われました。心当たりのある小生は、国語の先生に注意された様な気に成ったものです。昔の先輩は叱るところはキッパリト叱られた。

先輩は「KAC40周年記念号」と故福永隆一さんの「追悼号」の編集責任者として

大変な労力を費やされた事と拝察申し上げます。感謝です。 合掌

お三人の思い出 投稿者：廣瀬健三
投稿日：2009年10月22日(木)

KACの写真を見ていると、亡き阿部（純一）柳沢 柏（秀樹）先輩の在りし日のお姿／話しぶりが鮮明に浮かんで参ります。夫々にお世話に成っているのです
記する事は沢山ありますが、今日は柳沢正さんと過ごしたサンフランシスコの楽しかった一タの事に触れます。塩崎W. MASTERどの、写真送りますので宜しく。



1986年10月、米国出張の際SFに

泊まり、彼の地の丘の上の、マークホップキンスと言う由緒あるホテルの最上階のラウンジで、奢って貰いました。素晴らしい夜景も印象的でしたが、リュウさんが” ジャック ダニエル” と大変個性的な発音でこのウイスキーを注文され事、車を運転して40分程先の自宅に帰られるので、心配した事、思い出します。” 何の なんの” と云われながら、いきよい良く車を発進されました。

ラウンジからの下りのエレベーターの中で、大阪弁でワイワイ喋っていたら、同乗の正装の風格のあるアメリカ人らしいレデイが、何やら厳しい口調で文句を言っているの、先輩に内容を聞くと” 「此処はアメリカや、騒ぐならアメリカ語で話さない」と云うてまんねん、このホテルは戦後、吉田茂総理率いる講和条約締結全権団が泊まった名門のホテルなんや” との説明でした。流石のリュウさんも、この時ばかりは” しょうが おまへんナア” と、ヤヤ照れた表情で話されたものです。写真を見ていると、ついこないだの出来事のような錯覚に落ちいります。皆様の御冥福をお祈りします。 合掌

荒地山岩小屋探し 投稿者：山本恵昭

投稿日：2009年4月21日(火)

総会では、いろいろご配慮いただき有難うございました。

その後、住吉駅前で一杯飲んだ後、高座の滝の上の堰堤で大森さんとキャンプ。浪川さん宅でいただいた差し入れのビールとスモークタンで再宴会。浪川さん、美味しかったです。ご馳走様でした。

日曜日は、しばらく広瀬さんの来訪を持つものの来られる気配が無く、越田さんから教えていただいたブラックロックの上の岩小屋探しに出発。

大岩ゴロゴロの荒地山を右に左にウロウロ徘徊し、やっと見つけた岩小屋は4人は泊まれる立派なものでした。最近使われた雰囲気もありました。ついでに食べ頃のコシアブラを手に入れ、皆さんと合流。楽しい一日でした。

慰霊祭より荒地山の岩小屋

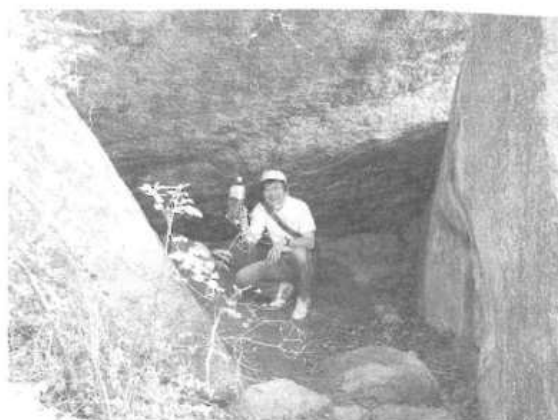
投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年4月21日(火)

慰霊祭の前夜(つまりは総会の夜です)越田さんから「荒地山の岩小屋、君ら知ってるか」。存じませんでしたので探しに行きました。

ありました。

思ったより広くて、今も良く使われているみたいです。



手に持っているのは山菜のはいったペットボトル。(ほかに入れ物がなかった・それから「何で唐突に山菜や」という方は、しばらく読み進んで山本君のカキコミをご参照ください)

カキコミ1件に複数の写真を入れる方法がわからないので、1枚ずつ。紙芝居風。

荒地山の岩小屋 投稿者：越田和男

投稿日：2009年4月24日(金)



大森、山本両君が岩小屋の存在を確かめてくれたので、懐かしくなり、昔の写真を引き張り出して眺めました。頑丈そう
で大地震にもびくともしなかったようです。

写真は、昭和34年9月に、伊藤ノンキ、大関、カンロクと2泊した時のものです。眺めが良くて涼しくて快適なるも、水はブラックの下（当時は水が流れていた）まで汲みに行かねばならず不便なのが玉に傷でした。塩崎君に頼んでアルバムに載せてもらいますのでご覧ください。

Re: 荒地山の岩小屋 投稿者：山本 恵昭
投稿日：2009年4月25日(土)

越田様

貴重なお写真を有難うございます。

岩の重なり具合など、写真とまったく同じ状態でした。皆さん、若い！

ただ、周辺の木が大きくなり、写真ほど開放的な雰囲気では有りません。

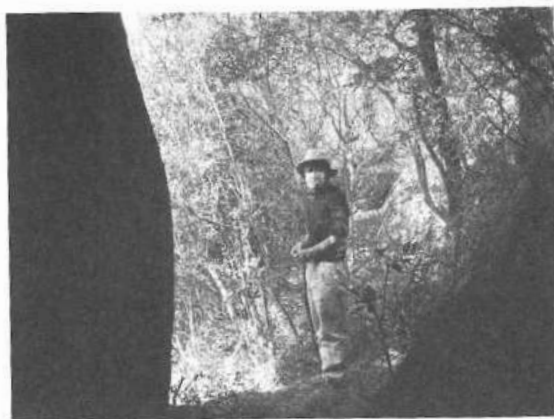
特に入り口付近は木陰となり、もっと暗い感じになっています。当時は本当に展望が良かったのですね。暑くなるまでに、時間ができたら泊まりに行ってみようと思います。

岩小屋 投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年4月25日(土)

木の育ち具合が違いますが、岩は同じ。

中から外を眺める、の図を貼り付けます。



大関さんと森本さんは面影あり、です。ノンキさん、3名おいでと聞いたことがあります、そのうちどなたですか。

私思うに、収二さんでは。

甲南山岳部のノンキ 投稿者：越田和男

投稿日：2009年4月25日(土)

大森君

50年も前の写真でしたが、大関、カンロクは感じは今と同じですね。

ノンキさんは計4名です。旧制の3兄弟は新一（故人・昭和10年卒）、収二（故人・昭和11年卒）、文三さん（今もお元気・旧制昭和15年卒）。更に弟さんが居られて五介さん（旧制昭和25年修）はノンキでなく、もっぱらゴスケさん。

写真に写ってたのは新制で小生と同期の伊藤久三郎。旧制4名とは姻戚関係なしですが、入部と同時にノンキを拝命。

荒地山 投稿者：飯田 進

投稿日：2009年4月26日(日)

大森君 岩屋に鶏の羽落ちてなかったですか。現役の時 ニワトリ一羽持ち込んで、鳥鍋で一杯やりました。岩屋からの眺めは遮るものがなかったように思いますが。

荒地山の岩小屋 投稿者：廣瀬健三

投稿日：2009年4月26日(日)

はずかしながら、この岩小屋、全く記憶に御座いません。越田コシあたりから”” なに言うてんねん、一年一月にだれそれといっとるやん”” との声が聞こえてきます。ノンキ久三郎、どうしているのやろう。ノンキ伊藤文三大先輩、尚、お元気の御様子、大慶至極に存じます。

岩小屋のまわり 投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年4月26日(日)

飯田様

岩小屋の周りは背丈より高い木々が生えていました。西宮方面の視界はきいてなかったと思います。ホームページのパノラマは少しはなれたところから撮ったと思います。

40数年の歳月、木は茂るものですね。(毛は抜けます・・・この頃雨がすぐわかるようになりました)

一度ゆっくりおいでになって、六甲山イマムカシをご覧ください。

私が子供の頃よく行った六甲の東はし、大平山から塩尾寺あたりも「へえ」と思うくらい変っていました。

追伸 鳥の羽根は気がつきませんでした。



山岳会ホームページ掲示板より、書籍などの文化関連

米山さん、おめでとうございます。

投稿者：福田信三

投稿日：2009年8月27日(木)

越田さん、米山さんの朗報 ありがとうございます。
ネットで見せていただきました。
3枚の写真、やはり最初の「父子」
心にきます。

関西での展示が無いとは残念。というより、いつも「やっぱ、関西は田舎やなあ」です。

去年、縁あって中村哲医師を教会へ招き講演をしていただきました。

その風貌は米山さんと良く似ていらっしゃいました。

小柄な、声の小さい、腰の低い方で、あのパワーがどこから出るのか不思議な方です。

多分、米山さんもそのタイプ？

生涯をかけてやる事のある方、うらやましい限りです。

米山悦郎氏の秋の出展・受賞のお知らせ

投稿者：越田和男

投稿日：2009年8月26日(水)

バブさんの写真家活動益々お盛んです。
この秋の出展予定を頂きましたのでお知らせいたします。ご興味のある方は是非。

①神奈川県美術展（写真部門）

9月23日（水）～10月4日（日）

神奈川県民ホールギャラリー（山下公園の前）電話045-662-5901

出展作：「記憶・パキスタン大地震」ドキュメンタリーの3枚組写真 本作品で”大賞”を受賞されました。



②二科会写真部門展

9月4日（金）～10日（木）

富士フィルムフォトサロン/東京（赤坂のフジフィルムスクエア2F）

電話 03-6271-3351

出展作：「家路」ゴビ砂漠の夕日を背景にしたラクダの映像

③ブルーベイ横浜展

9月7日（月）～13日（日）

横浜教育文化センター内横浜市民ギャラリー

リー（関内駅南口前）

電話：045-224-7921

出展作：「パッション」3人のダンサー
の踊り

なお、上記①②③とも米山さんの個展では
ありませんので、出品者としての会場
常駐ではありません。念の為。

彼方へ 投稿者：福田信三

投稿日：2009年9月21日(月)

越田さん

実はネットで検索の結果です。便利な世
の中なんでしょう。ついでに、映画の一
部も見ることが出来ます。

http://www.youtube.com/results?search_query=Scream+of+Stone&search_type=&aq=f

どうぞ

Re: 「彼方へ」 投稿者：越田和男

投稿日：2009年9月21日(月)

福田さん、有難う。良く覚えてましたね。
小生まったく「忘却の彼方」でした。検
索したら1991年、独、仏、加合作
原題「Scream of Stone」

ストーリー：

『ニュー・ジャーマン・シネマの旗手、
W・ヘルツォークが登山の世界に生きる
男たちにスポットを当てた人間ドラマ。
現代登山の父とうたわれるラインホル
ト・メスナーをモデルに、自然と人間の
壮大な物語を生み出している。垂直の岩

壁に覆われたセロトーレ山は、地上で最
も登頂が難しいといわれる山。ロッチャ
はこれまでに二度、この山に挑み失敗し
ている。それだけに彼は慎重になってい
たが、ライバルのマーチンはそんな彼の
態度に苛立ち、ロッチャの盟友ハンスと
ともに登頂を決行。だが雪崩でハンスが
帰らぬ人となり、マーチンだけが下山。
彼は登頂の成功を主張し、一躍名声を手
に入れ、ロッチャの恋人の心をも奪って
しまう。友人と恋人を失ったロッチャは
傷つき、現地にとどまる。やがて登頂に
疑惑を持たれたマーチンが再び、セロト
ーレ山に登ることを知り、ロッチャは一
人ザイルを手に巨大な岩山へと向かう…
…。物語さながらの過酷な状況下で撮影
された、壮大な大自然の風景が圧倒的に
素晴らしい。』

とありました。題はともかく、頂上直下
の登攀、パタゴニア独特の掘っ立て小屋
の生活など、いろんな画面が思い出せま
す。平井の書評さっそく本屋で読んでみ
ます。

「彼方へ」 投稿者：福田信三

投稿日：2009年9月20日(日)

越田さん、

「彼方へ」ではありませんか？

Re: メスナーの書いた『トーレ 石の叫
び』について 投稿者：越田和男

投稿日：2009年9月20日(日)

セロ・トーレは凄い山です。山と云うより岩峰で、その上にソフトクリームを乗つけたような感じで近づきがたく、10年前に雨さんや大関と出かけたパタゴニア行の最後のハイライトでした。

その前に、映画は確かに観たし、頂上直下の宙ぶりの場面など良く覚えているのですが、映画の邦題が思い出せません。ご存じの方教えてください。

たしか、ドイツ、フランス、カナダの合作で、英語名は「Scream of Stone」でした。

メスナーの書いた『トーレ 石の叫び』

について 投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2009年9月20日(日)

『孤独の山』トモ・チェセン 近藤等訳
1998・山と溪谷社 補遺『疑惑の系譜』
トモ・チェセンをめぐる論争にかかれた
池田常道さんの文章を紹介します。

歴史上偉大な登攀の真偽が疑われた1990年トモ・チェセンのローツエ南壁登攀がはじめてではない。もっともよく知られているのは、1955年・マエストリ事件である。

イタリアのクライマー、チェザレ・マエストリはオーストリアのトニー・エガーと2人で

パタゴニアにある未踏の岩峰セロ・トーレを北壁から初登頂したが、頂上からの帰途エガーは雪崩に打たれて行方不明となり、カメラも彼とともに失われてしま

った。

マエストリ自身、気を失って取り付けの雪の中に倒れていたところを、ベース・キャンプから上がってきた仲間に発見されて助かったのである。

帰国後、彼の登攀は新聞紙上に派手にとりあげられ、手記も出版された。しかし、ルートの最後の部分に関する記述は具体性を欠き、写真もないことから疑惑が生まれた。とりわけ他のクライマーが疑ったのは、それまでにパタゴニアの同じように難しい岩峰——たとえば

リオネル・トレイとギド・マニョーヌによるフィッツロイで行われた登攀と比べてマエストリたちのスピードが異常に速かったことであった。セロ・トーレでは彼らの前に（ルートは違うが）ボナッティとマウリという当時世界最高のコンビも敗退していたことが、疑念を増幅する結果となった。

批判にさらされたマエストリは、それを黙殺するだけではおさまらなかった。

約10年が経過したころ突然再挙したのである。こんどはもっと難しい南東稜をルートに選び、固定ロープをベタ張りしながらヘッドウォールまでの登りつめてみせた。この岩峰の頂上を覆う氷のマッシュルーム自体は登られずに終わったが、登攀自体はべつの意味で批判の的になった。マエストリは手がかりの乏しい岸壁におびたらしいボルトを連続して埋めたばかりか、そのための穴をうがつのに圧

搾空気を動力とするドリルを使ったからである。

その強引な手法はあたかも、かつて自分を疑った登山界全体に実力を誇示し、復讐するためのものであるかのように見えた。

クライミングの自由と人口手段の乱用の相克と言う意味で、この登攀は当時の登攀界を二分する論争に発展した。セロ・トーレの「フェアな手段による」初登は1974年のカジミーロ・フェラリの隊のよるものとされている。

表題『トーレ 石の叫び』の「石の叫び」とは、ドリルで痛めつけられた岸壁の悲鳴に対しフェアな登攀を主張するメスナーの批判の意が込められているのでしょうか。

メスナーの本 投稿者：平井吉夫

投稿日：2009年9月19日(土)

今日から発売の『ハヤカワ・ミステリ・マガジン』11月号の141頁(海外ミステリ情報)に、メスナーの書いた『トーレ 石の叫び』という本をノンフィクション・ミステリとして紹介しました。パタゴニアのセロ・トーレ初登攀の真偽をめぐる読物です。興味があれば立ち読みでも結構ですからご一読ください。 平井吉夫

ガチャから褒められた 投稿者：平井吉夫

投稿日：2009年10月16日(金)

ガチャから過分なお褒めの言葉をもらって恐縮しています。中学1年から高校3年までガチャにしごかれ続けた私としては、ガチャからこんなに褒められるなんて、めったにない欣快事でありまして、最難関の岩場を登りきったような気分です。70歳まで生きていた甲斐がありました。いま私はメスナーの本を翻訳中ですが、おかげでぐんと気合が入りました。感謝、感謝。 センキチ

ノーチラス 投稿者：田邊 潤

投稿日：2009年10月15日(木)

仙吉訳のノーチラス全12巻を読み上げました。

もともと私はSFはあまり好きではないので、最初は少しうんざりしながら読んでおりましたが、途中から作者ホールバインの思想に気が付き、それから大変面白く読み進むことができました。特に最後の第12巻のほぼ最後に出てくる「過去を変えることはできない」という言葉にこの訳本のすべて、そして作者、訳者の哲学のすべてが凝縮されているように思いました。仙吉には失礼かもしれませんが、ドクトルマゼブでは少し横道にそれたものの、彼の学生時代からの一貫した思想(哲学)を理解することができました。それに気がつき始めたのは「ジンメル」の各小説からですが、それまでにいただいた彼の訳本から、そして今回取りそろえたノーチラスまでを振り返って、彼が選

んで訳本していることに気がついたのです。その底流にあるのは「人類愛」ではないかと考えます。こんなに、えらい人物が友人に居ることを誇りに思いますし、哲人仙吉に敬意を表します。ガチャ

小川さんの講演 投稿者：大森雅宏

投稿日：2009年11月22日(日)

小川さんの講演会に行ってきました。

平生さん(やはり「さん」で通されました)のこと。

山岳会で伺った話のほかに、甲南病院の設立理念、川重のこと、社会事業家、財界人としての話など。

平生さんと松下幸之助氏との共通点は、と言う質問には「正義を基調とするぶれない視点」と。

87歳とは思えないくらいお元気な様子でした。



一応公開講座でしたが、主催の自治会OBメンバーのほかはどうも山岳部関係、二谷さんと高橋さん(ごんちゃん)と私だけみたいでした。

(高橋さんは新入生歓迎行事をお手伝いされたとかで、半分くらい自治会寄りのスタンスみたい)

小川さんの写真貼り付けます。

摂津本山駅のレールの駅舎はおまけ。

平生さんの業績に、終戦まで500万トンの鉄鋼生産を維持したことがあるとの事。レールは鉄道以外に炭鉱の坑道の落盤防止などに使われ戦後復興の基盤に。レールつながりで。

いま、平井 吉夫君が翻訳の本

投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2009年12月15日(火)

1970年、メスナー初の著作「赤い のろし」は発刊禁止となって久しい。この公的翻訳が40年をへて平井 吉夫君の訳で来年 刊行されます。版元は山と溪谷社。

1970年、兄弟でナンガパルバットに登頂、未知のディアミール壁を下降中、冰雪雪崩で遭難死した弟ギュンターの遺体が2005年、35年ぶりに見つかりました。その火葬の画像は、ナショナル ジオ2006年11月号に掲載されてる。ヒゲ面のメスナーも写ってます。

ナショナル ジオ・日本語版のページ
http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/feature/0611/f_4_zoom10.shtml

(無題) 投稿者：平井吉夫

投稿日：2009 年 12 月 14 日(月)

いま訳しているメスナーの本の映画化作品の予告編です。

<http://74.125.153.132/search?q=cache:JyAoBhlppq8J:movie1.search.biglobe.ne.jp/video/watch/53e04ec477726337+reinhold+messner&cd=344&hl=ja&ct=clnk&gl=jp>

セブン サミット 極限への挑戦

投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2010 年 1 月 2 日(土)

1 月 4 日 NHK テレビ 19:30
栗城 史多(くりき のぶかず)が 登攀の様子を動画映像で伝えます。

<http://kurikiyama.jp/profile.html>

(無題) 投稿者：平井吉夫

投稿日：2010 年 1 月 19 日(火)

どたばたして申し訳ありません。0 時 35 分のアドレスを出して、あれこれクリックすると、動画を含めて素晴らしい映像が見られます。平井

(無題) 投稿者：平井吉夫

投稿日：2010 年 1 月 19 日(火)

<http://www.spiegel.de/kultur/kino/0,1518,672209,00.html>

ナンガの映画 投稿者：平井吉夫

投稿日：2010 年 1 月 19 日(火)

メスナー「裸の山」を映画にした「ナンガ・パルバート」が今月欧州で公開されました。その一部がネットで公開されているので紹介します。メスナー騒動の関係者(ヘルリヒコフファーの息子を含む)がメスナー寄りの見方に、たちまち抗議の声を上げて、またもや泥仕合が再燃しそうです。 平井

Tragödie am Nanga Parbat: Das Schicksal der Messner-Brüder

ナンガの映画 投稿者：平井吉夫

投稿日：2010 年 1 月 19 日(火)

メスナー「裸の山」を映画にした「ナンガ・パルバート」が今月欧州で公開されました。その一部がネットで公開されているので紹介します。メスナー騒動の関係者(ヘルリヒコフファーの息子を含む)がメスナー寄りの見方に、たちまち抗議の声を上げて、またもや泥仕合が再燃しそうです。 平井

メスナー「赤い信号弾」再刊

投稿者：平井吉夫

投稿日：2010 年 1 月 15 日(金)

1970 年のナンガ・パルバート遠征直後に書かれ、長年発禁になっていたラインホルト・メスナーの「赤い信号弾」が今年の 1 月、40 年ぶりに刊行されました。メスナーの序文と多数の写真で増補され

てます。

お知らせ 投稿者：武田 雄三

投稿日：2010年2月18日(木)

此の程京都大学学術出版会より創立20周年記念として、DVDブック「カラコルム／花嫁の峰チョコリザ」 梅棹忠夫 監修
税込み3,990円＋送料300円

DVD2枚組&ブックセット函入り

が発売される事平井一正先生より案内あり、JAC会員割引 20%オフ 3,192円(税込み、送料300円別)で入手できるとの事です。

既に雨宮・田邊両氏には申し込み頂いておりますが、他にご希望の方が居られれば小生より取り纏め発注いたしますので、掲示板活用連絡下さい。

尚デリバリーは送料の無駄を避けたく、4月17・18日開催予定の山岳会総会 OR 慰霊祭にしようと思っています

Re: 映画「ノース・フェイス・アイガー北壁」 投稿者：越田和男

投稿日：2010年2月11日(木)

福田さん紹介の映画「アイガー北壁」、お勧めです。是非ご覧になって下さい。小生は一昨年の秋に東京であったドイツ映画祭で既に観まして、いづれ一般公開されるだろうと思って、この掲示板に以下の投稿をした次第です。今回は横浜でも上映されますので(3月20日より「横浜ブルグ13」にて)、もう一度観ようかなと

思ってます。どなたかご一緒に、そのあとビールでも如何ですか。

以下は2008年10月31日付の投稿です。

＞ ドイツ映画祭というのが東京・新宿であり、トップバッターの標題の映画を観て来ました。

＞ ハインリッヒ・ハーラーらによる北壁初登攀の2年前、1936年夏に起こったの悲劇をセミ・ノンフィクションとして描写したもので、ハリウッド映画とは一味違った、さすがドイツの山岳映画(久々だが)と思わせるものでした。

＞ トニー・クルツ、ヒンターシュトイサーなど実名で登場します。ヒンターシュトイサーのトラヴァース・ルートとして今も知られている有名な振り子トラヴァースの場面もうそ臭くなく迫力に富み、トニー・クルツの壮絶な宙吊り死の場面なども史実を忠実に再現しているのではないかと感じました。

＞ ドイツで封切られたとこで、まだ日本での一般公開の日程は決まっていようです。本映画祭期間中にはもう一度上映されますので、在京の方はどうぞ。

＞ 上映時間2時間10分位

アイガー北壁 投稿者：越田和男

投稿日：2010年3月21日(日)

映画「アイガー北壁」に関しては、今店頭販売中の4月号「山と溪谷」「岳人」ともに関連記事を掲載しています。映画ご覧になる方は、立ち読みしてから観るの

も一興かと。

山と溪谷：フィリップ・シュテルツェル
監督へのインタビュー記事

岳人：江本嘉伸さんの「トニー・クルツ
を知ってますか？」

アイガー北壁 投稿者：柏 敏明

投稿日：2010年3月19日(金)

アイガー北壁の映画。明日より公開です。
シネ・リーブル梅田（神戸もあるよう
です）タワーイースト3F

（大阪駅近くの上がつながっているツイ
ンタワー）

上映時間 11・45 14・10 16・35 19・00
26日までの上映は確定、それ以降は未定。
シネ・リーブル梅田のHPに映画の紹介
が詳しく出ています。

小生は月曜日の11・45からを見に行くつ
もりです。

山岳 マンガ 投稿者：雨宮 宏光

投稿日：2010年3月19日(金)

マンガ『岳・ガク』石塚 真一作 が映
画化されます。4年前大関に聞いて本屋
で立ち読みし一冊だけ買いました。この
山岳マンガ・シリーズは、なかなか良く
出来ています。

現在までに累計発行部数 240 万部を突破
した大ヒットコミックで、映画『岳・ガク』
として2011年に公開されるそうです。
撮影は2010年3月14日に八ヶ岳でクラ
ンクイン。今後は八方尾根、奥穂高岳、

立山連峰など標高 3,000 メートル級の日
本アルプスを舞台に雪山ロケを行い、6
月クランクアップ予定。

山岳小説（フィクション）としては夢枕
獏 『神々の山嶺』・集英社・1997 は傑作
です。

物語は、エヴェレスト登山隊に参加した
日本人カメラマン深町誠が、カトマンド
ウの街で偶然、一台の古いカメラを見つ
けたところから始まる。

そのカメラが1924年、エヴェレスト山頂
を目指したまま帰らぬ人となったジョー
ジ・マロリーが持って行ったカメラでは
ないか、という書き出しにつられて最後
まで一気に読みました。

この小説を材として谷口ジローが山岳漫
画をビジネスジャンプ（集英社）で連載
中です。12本アイゼンの（爪）が精緻
なペンタッチで描かれているのに感心し
ました。

ゴーストタウンの決闘 投稿者：平井吉夫
投稿日：2010年3月16日(火)

ロバート・テラー（善玉）、リチャード・
ウィドマーク（悪玉）、監督はジョン・ス
タージス。もったりしたストーリー展開
だけどバックの山が綺麗な映画。50 数年
ぶりにビデオで見ました。そのなかのウ
ィドマークの台詞。「ロッキー山脈はアル
プスより美しいと言われている。アルプ
スに行くつもりだったが、行けなかった
な。ジンクスがあるんじゃないか。銀行

強盗をやりすぎるとアルプスにいけない
っている」。コッシンたちと映画を見まく
った時代を思い出して、ついこんな投稿
をしてみました。

写真展 投稿者：米山悦朗

投稿日：2010年 5月 3日(月)

今月22日から、写真展 風に吹かれて
と題しモンゴルの写真を27点展示しま
す。

場所は横浜港大棧橋付近山下公園前のト
ヨタのショールーム2階ギャラリーで良
いところです。

ポスターを添付しますので御暇の方はお
いで下さい。 判らなければ小生にメー
ルで御問い合わせ下さい。



中井久夫氏の新著 投稿者：越田和男

投稿日：2010年 6月 27日(日)

中井久夫先輩(昭和27年新高)の新著
「私の日本語雑記」(岩波書店・2100
円)の書評が今朝の朝日新聞の読書欄に

出ていました。先日新聞広告で見て、買
おうかどうしようか迷っていたところで
した。

中井氏にはかつて、高校時代の夏の潤澤
合宿中、仲間とドイツ語で喧嘩したとの
伝説もありますが、精神科医・斎藤環氏
による優れた本書評にもいくつかの語学
にまつわる伝説が紹介されています。や
っぱり買って読みなさい、と背中を押さ
れたような気分です。この書評だけでも
十分読む価値あり、ぜひどうぞ。

(無題) 投稿者：平井吉夫

投稿日：2010年 6月 28日(月)

中井さんの本、商売柄、絶対に買って読
みます。

この間、60年安保闘争50周年に関して三
度ほどテレビに顔を出し、保守的地域で
人気の合気道指導者にして老人登山リー
ダー・平井先生の正体がばれてしまいま
した。50年前の「政治的犯行」への町内
市民の評価が意外に好意的なことにびっ
くりしています。

<http://www.arekara50.org/>

中井久夫の文章 投稿者：廣瀬健三

投稿日：2010年 7月 3日(土)

此处に記します題名は去る5月の日経
(夕刊)の「プロムナード」と言う欄に
出たのを転記したもので、敬称略です。
この欄からほんの一部を引きます。(筆者
は小説家 久保和志)

”” 中井久夫は精神科医だから科学側の人間だ。科学者と言うのは必ず人間を高みから見下ろすような事を言う。氏はそのような高みから人を見下ろす感じが全く無い。氏の本を何から読めばいいか？私にはどの本も素晴らしいとしか言えない。””

小生も何冊か読んでます。中には登山に

触れられたものもあります。専門書は一冊だけ買いました。中学／高校同期のS先生も著者の一人として中井先輩と共に名を連ねていましたので。これは難解もので手に負えませんが。



1. はじめに

兵庫県の氷ノ山(1,510m)で、5月3日(月)から4日(火)にかけての登山も、好天に恵まれ、おかげさまで無事に下山できました。今回の氷ノ山登山は、初日、氷ノ山国際スキー場から、東尾根、神大ヒュッテ(千本杉ヒュッテ)に宿泊しました。

神大ヒュッテの利用に際しては、神戸大学山岳部の平井一正先生、山形裕士先生、神戸大学学務部の仲満様、神戸大学山岳会の土山様にたいへんお世話になりました。部員一同たいへん感謝しています。

ヒュッテでは、夕食の牛丼と海草のスープを皆で作りました。ご飯も芯が残らずに上手においしく出来上がりました。なによりも、小屋近くの水場のお水のおいしいこと！部員たちは何度も水場に通り、炊事や洗顔を楽しみました。

一段落の後、まきストーブに火を起こして、ストーブの上で豆餅を焼いて、楽しい一夜となりました。(まき木4本を使わせていただきました。持参したカセットコンロ用のガスカートリッジを2本置いてきました)

翌日は氷ノ山に登頂し、氷ノ山越えより、仙谷を下り、山桜と新緑の中に映える不動の滝、布滝を眺めつつ親水公園に下山しました。

2. 参加メンバー

H2D 若宮 康佑 H2D 織田 直宏 H2E 森本翔太郎 H2D 原 侑也 H2E 水野正嵩

付き添い教員 神戸謙司



3. 行動報告

日付	行動概要	行動時間
5月3日(月)	甲南高校集合(8:00) 氷ノ山国際スキー場東尾根登山口(14:00) …千本杉ヒュッテ(16:00) 水汲み・炊事・牛丼食べ終わり(18:20)	6時間 徒歩2時間
5月4日(火)	起床(6:00) 炊事・ラーメン食べ終わり(7:00) 整理整頓・小屋の掃除・出発(8:00) 氷ノ山頂上(8:20)…頂上出発(8:50) …氷ノ山越えのコル出発(9:50) …赤岩山右俣の谷(10:30)…不動の滝(11:05) …親水公園(11:30)・出発(12:20) JR八鹿駅(13:40)→JR芦屋(18:00)	徒歩6時間

3. 費用

①_r + ② + ③ + ④ の総計 7,740 円

①_r 通費 6,940 円 ② 宿泊費 0 円 ③ 食料・燃料費 800 円

	朝	昼	晩	1日の食費
5月3日(月)		各自	牛丼・汁・紅茶	400円
5月4日(火)	わかめと餅ラ ーメン・茶	レーション各 自	各自	200円

燃料代 200 円

レーション (羊羹・クラッカー・ゼリー・チョコ・飴・サラミ・パンケーキなど)

④ その他 0 円

⑤ 備考: 自宅から学校までの往復費用、5月3日の昼食弁当・5月4日の行動食を各自用意

5. 連絡先

甲南中学・高等学校 〒659-0096 兵庫県芦屋市山手町31-3

電話: 0797-31-0551 FAX: 0797-31-7458

甲南高校山岳部顧問 神戸謙司

携帯電話:

目次

＝報 告＝

秋 の 集 会

日 時: 2009 年(平成 21 年)10 月 11 日(日)～12 日(月)

場 所: 木曾文化公園内宿泊施設 「駒王」 長野県木曾郡日義村 木曾駒高原

参加者: 小原 耕治 砂川 彰雄 雨宮 宏光 鈴木 頼正 田辺 潤 鳥居 威男
越田 和男 大関 和夫 二谷 和成 村上 与利一 武田 雄三 安井 正
伊丹 徳行 塩崎 将美 石原 浩二 山本 真博 井上 知三 平井 吉夫
川村 静治



日 時:2010 年 4 月 17 日 17 時～

場 所:平生記念会館 セミナーハウス

出席者:名誉会員 山本三郎 平井一正

中高顧問 神戸謙司

旧制高校 國府雄次郎 赤松 二郎 小川 守正

新制大学 小原 耕治 雨宮 宏光 鈴木 頼正 田辺 潤 鳥居 威男

芦田 匡平 越田 和男 藤安 賢一 大関 和夫 二谷 和成

飯田 進 福田 信三 武田 雄三 村上与利一 安井 正

伊丹 徳行 柏 敏 明 浪川 純吉 國分 廣昭 石原 浩二

南里 章二 井上 知三 平井 幹男 高橋けい子 中澤 章浩

山本 恵昭 谷 勇 輝 川村 静治 神澤 太一

平成 2 1 年度 山岳会総会 次第

- | | |
|-------------------|----------|
| | 司会 福田 信三 |
| 1. 会長挨拶 | 武田 雄三 |
| 2. 平成 2 1 年度 事業報告 | |
| 1) 慰霊祭 | 村上 与利一 |
| 2) 木曾福島 集会 | 井上 知三 |
| 3) 山嶽寮 | 福田 信三 |
| 4) 大学山岳部の現状 | 武田 雄三 |
| 5) 中高山岳部の現状 | 神戸 謙司 |
| 6) 会計報告 | 山本 恵昭 |

全項目全員一致で承認されました

- | | |
|-------------------|--------|
| 3. 平成 2 2 年度 事業予定 | |
| 1) 慰霊祭 | 村上 与利一 |
| 2) 木曾福島 集会 | 井上 知三 |
| 3) 山嶽寮発行 | 福田 信三 |

全項目全員一致で承認されました

- | | |
|------------------------|----------|
| 4. 検討事項 | |
| 1) 学園 9 0 周年記念事業募金への寄付 | 武田 雄三 |
| 2) 山岳会員海外遠征への支援 | 〃 |
| 3) 山岳会員名簿取扱 | 〃 |
| 5. 懇親会 | 司会 安 井 正 |
| 1) 乾杯 | |
| 2) 会食 | |
| 3) カンリガルポ 遠征報告 | 山本 恵昭 |
| 4) 部歌斉唱 | |

閉 会

平成21年度 会計報告

【収支決算表】

平成22年3月31日

【貸借対照表】

上記のとおり報告します

会計担当 山本恵昭

参 加 者

- 伊藤 長次郎 鈴木 頼正 田辺 潤 越田 和男 大関 和夫
二谷 和成 飯田 進 福田 信三 武田 雄三 村上 与利一
森本 全彦 安井 正 伊丹 徳行 柏 敏明 塩崎 将美
石原 浩二 南里 章二 井上 知三 平井 幹男 中澤 章浩
川村 静治
- 本年度物故者の方々
國府 三郎【旧制 18 理】 津田 昌男【旧制 18 理】 徳末 省三【旧制 21 理】
- 参加予定のご遺族の方々
乾 恵美子 様 横山 嘉壽子 様 本田 依子 様



〆 〆 編集後記 〆 〆

ご他聞にもれず、わが山岳会も高齢化の真っ只中にいます。その中での佐野源一氏の訃報でした。心からご冥福をお祈りいたします。

さて、113年ぶりの猛暑の中の編集大詰めでした。それでも、ギリギリの原稿到来はやはり”待ってました”の感です。原稿入手の少ない時期にページ埋めのためにとっておいた”ホームページ掲示板から”は結局全部掲載することになりました。山嶽寮は会員の1年間の動向を知るのが最大の目的と思うからです。全会員がパソコンで掲示板を見ることが出来るわけではありませんので、山嶽寮が有効となります。心配していたより原稿が集まり、なんとかまとめることができました。原稿をお寄せいただいた皆さんに感謝いたします。次回号にも是非よろしく願いいたします。

原稿宛先 山嶽寮編集担当 福田信三

電話

/ファクシミリ

Eメール

山嶽寮 第65号

発行 2010年(平成22年)10月

編集人 福田信三 印刷 カツヤマ印刷